

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第149集

こっ こう ぼる い せき
国 光 原 遺 跡
Kokkoubaru Site

東九州自動車道（都農～西都賀）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 44

2007

宮崎県埋蔵文化財センター



B区出土爪形文土器 (65)



調査区を北側より撮影



A区弥生時代遺構の完掘状況・B区中世溝状遺構の検出状況

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（都農～西都間）建設予定地にかかる埋蔵文化財発掘調査を平成11年度から実施しております。本書はその発掘調査報告書であります。

本書に掲載した国光原遺跡は、川南町の国光原台地の南端部に位置します。北西部には雄大な尾鈴山麓、南東部には湯牟田溜池の湿地帯が目に入る自然の情緒豊かな場所です。平成16年度から平成17年度にかけて発掘調査を実施し、後期旧石器時代・縄文時代草創期～早期・弥生時代終末期・中世の各時期における遺構と遺物を確認することができました。特に、縄文時代草創期～早期の炉穴が41基も検出されていますが、その中の一番大きな炉穴群は、炉穴が24基も重なりあっており、炉穴を連続して同じ場所に作っていたことが注目されます。

以上のように、豊かな自然に育まれた場所に、かなり昔から先人たちが生活の基盤をおいてきたことが窺われます。本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成19年 3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 清 野 勉

例 言

1. 本書は、東九州自動車道（都農～西都農）建設に伴い、平成16～17年度に実施した国光原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団九州支社から委託を受けて宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。なお日本道路公団は、本遺跡の発掘調査が終了した後、平成17年10月1日より分割民営化され、西日本高速道路株式会社九州支社となったが、本報告書中では日本道路公団として記載する。
3. 現地での実測及び写真等の記録は、主に安藤正純・黒木修・福田光宏が行った。また出土遺物写真は、安藤正純が当センターの今塩屋毅行の協力を得て撮影した。その他、発掘調査期間中に複数の埋蔵文化財センター職員が遺構実測に加わった。実測者は以下の通りである。
竹田享志・藤木聡・松元一浩・森本征明・井上美奈子・田中達也
4. 本書使用の遺物実測図の作成は、安藤正純・藤木聡が行ったほか整理作業員が補助した。
5. グリッド杭設定は、(有)川南技術コンサルタントと(有)エイユー技建、空中写真撮影は(有)スカイサーベイ九州、自然科学分析は(株)古環境研究所に委託した。
6. 本書で使用した遺跡位置図及び周辺遺跡分布図(第1図)は、国土地理院発行の25,000分の1地形図をもとに、調査区域図(第2図)は、日本道路公団九州支社宮崎工事事務所提供の1,000分の1測量図をもとに作成した。
7. 本書で使用した方位は、全て座標北(G.N.)である。標高は海拔絶対高である。なお、国土座標は旧平面直角座標系Ⅱに基づく。
8. 土層断面・石材・土器の色調については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準拠した。
9. 本報告書では遺構の略号は使用していないが、図面や遺物の注記には下記の略号を用いている。
SA=竪穴住居跡 SC=土坑 SE=溝状遺構 SI=集石遺構 SL=周溝状遺構 SP=か穴 P S I=礎群
10. 東九州自動車道関連遺跡の発掘調査では、基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯については共通の略称を用いている。
○ローム層 ー 上からML1、ML2、ML3… ○黒色土帯 ー 上からMB0、MB1、MB2…
11. 国光原遺跡については、すでに下記文献に概要報告がなされているが、その後の整理等で内容に変更が生じている。したがって、遺跡の内容については本報告書の内容を優先することとする。
○宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第111集『東九州自動車道(都農～西都農)関連埋蔵文化財発掘調査概報報告書V』(2005年)
○宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第131集『東九州自動車道(都農～西都農)関連埋蔵文化財発掘調査概報報告書VI』(2006年)
12. 本書の執筆・編集は、安藤正純が担当した。
13. 出土遺物その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と周辺環境	2

第II章 調査・整理の概要と経過

第1節 確認調査の概要	4
第2節 発掘調査の経過	5
第3節 基本層序	6
第4節 整理作業及び報告書	7

第III章 発掘調査の記録

第1節 後期旧石器時代の調査	11
第2節 縄文時代草創期～早期の遺構と遺物	22
第3節 弥生時代終末期の遺構と遺物	80
第4節 中世の遺構と遺物	112
第5節 時期不明の遺構	120
第6節 フローテーションの成果と結果	123

第IV章 自然科学分析

第1節 自然科学分析（1回目）	124
第2節 自然科学分析（2回目）	128

第V章 まとめ	134
---------	-----

挿図目次

第 1 図	遺跡位置図及び周辺遺跡分布図	3	第 44 図	V 層出土縄文土器実測図 3	59
第 2 図	調査区域図	8	第 45 図	V 層出土縄文土器・石器実測図	60
第 3 図	確認調査トレンチ配置図	8	第 46 図	V 層出土石器実測図 1	61
第 4 図	国光原遺跡グリッド配置図・ 土層断面わがまま 1 の配置図	9	第 47 図	V 層出土石器実測図 2	62
第 5 図	国光原遺跡土層断面図	10	第 48 図	V 層出土石器実測図 3	63
第 6 図	旧石器時代遺構分布図・ 始良 Tn 下位掘削トレンチ配置図	12	第 49 図	V 層出土石器実測図 4	64
第 7 図	礫群実測図	14	第 50 図	V 層出土石器実測図 5	65
第 8 図	始良 Tn 下位層出土旧石器実測図	15	第 51 図	V 層出土石器実測図 6	66
第 9 図	始良 Tn 上位層出土旧石器実測図 1	16	第 52 図	V 層出土石器実測図 7	67
第 10 図	始良 Tn 上位層出土旧石器実測図 2	17	第 53 図	V 層出土石器実測図 8	68
第 11 図	縄文時代遺構分布図	23	第 54 図	V 層出土石器実測図 9	69
第 12 図	縄文時代遺物出土状況図	26	第 55 図	V 層出土石器・表面採集遺物実測図	70
第 13 図	集石遺構実測図 1	28	第 56 図	弥生時代遺構分布図	81
第 14 図	集石遺構実測図 2	29	第 57 図	SA1・SA2 実測図	85
第 15 図	集石遺構実測図 3	30	第 58 図	SA3 実測図	86
第 16 図	集石遺構実測図 4	31	第 59 図	SA3 遺物出土状況図	87
第 17 図	集石遺構実測図 5	32	第 60 図	SA4・SA5 実測図	87
第 18 図	集石遺構実測図 6	33	第 61 図	SA6・SA7 実測図	88
第 19 図	集石遺構実測図 7	34	第 62 図	土坑実測図	89
第 20 図	集石遺構実測図 8	35	第 63 図	SC16・SC21・SL1 実測図	90
第 21 図	集石遺構実測図 9	36	第 64 図	SA1・SA2・SA3 出土土器実測図	92
第 22 図	集石遺構実測図 10	37	第 65 図	SA3 出土土器実測図 1	93
第 23 図	集石遺構実測図 11	38	第 66 図	SA3 出土土器実測図 2	94
第 24 図	集石遺構実測図 12	39	第 67 図	SA3 出土土器実測図 3	95
第 25 図	集石遺構実測図 13	40	第 68 図	SA4・SA5・SA6・SA7 出土土器実測図	96
第 26 図	集石遺構実測図 14	41	第 69 図	SC5・SC6・SC13・ SC14・SL1 出土土器実測図	97
第 27 図	集石遺構実測図 15	42	第 70 図	弥生時代遺構内出土土器実測図 1	98
第 28 図	集石遺構実測図 16	43	第 71 図	弥生時代遺構内出土土器実測図 2	99
第 29 図	炉穴実測図 1	44	第 72 図	弥生時代遺構内出土土器実測図 3	100
第 30 図	炉穴実測図 2	45	第 73 図	弥生時代遺構内出土土器実測図 4	101
第 31 図	炉穴実測図 3	46	第 74 図	弥生時代包含層出土・ 掘瓦出土遺物実測図	102
第 32 図	炉穴実測図 4 (炉穴群 6 の平面)	47	第 75 図	中世溝状遺構分布図 A 区	114
第 33 図	炉穴実測図 5 (炉穴群 6 の断面)	48	第 76 図	中世溝状遺構分布図 B 区	115
第 34 図	炉穴実測図 6	49	第 77 図	中世溝状遺構断面実測図 1	116
第 35 図	B 区草創期土器集中出土状況図	49	第 78 図	中世溝状遺構断面実測図 2	117
第 36 図	縄文時代土坑実測図 1	49	第 79 図	中世溝状遺構断面実測図 3	118
第 37 図	縄文時代土坑実測図 2	50	第 80 図	中世遺構内出土・ 表面採集遺物実測図	119
第 38 図	縄文時代土坑実測図 3	51	第 81 図	時期不明遺構分布図	120
第 39 図	縄文時代土坑実測図 4	52	第 82 図	時期不明遺構実測図 1	121
第 40 図	遺構内出土縄文土器 (草創期～早期) 実測図	55	第 83 図	時期不明遺構実測図 2	122
第 41 図	遺構・V 層出土縄文遺物実測図	56	第 84 図	周溝状遺構からの土の採取場所	123
第 42 図	V 層出土縄文土器実測図 1	57	第 85 図	国光原遺跡の樹種同定分析	132
第 43 図	V 層出土縄文土器実測図 2	58	第 86 図	国光原遺跡の炭化種実	133

表目次

第 1 表	実測図掲載分旧石器計測表	18	第 17 表	弥生時代土坑一覧表	91
第 2 表	実測図「未掲載」旧石器計測表 1	19	第 18 表	弥生土器観察表 1	103
第 3 表	実測図「未掲載」旧石器計測表 2	20	第 19 表	弥生土器観察表 2	104
第 4 表	実測図「未掲載」旧石器計測表 3	21	第 20 表	弥生土器観察表 3	105
第 5 表	集石遺構一覧表	53	第 21 表	弥生土器観察表 4	106
第 6 表	縄文時代「穴・土坑」一覧表	54	第 22 表	弥生土器観察表 5	107
第 7 表	縄文土器観察表 1	71	第 23 表	弥生土器観察表 6	108
第 8 表	縄文土器観察表 2	72	第 24 表	弥生土器観察表 7	109
第 9 表	縄文土器観察表 3	73	第 25 表	弥生土器計測表 8	110
第 10 表	縄文土器観察表 4	74	第 26 表	弥生時代石器計測表	111
第 11 表	縄文土器観察表 5	75	第 27 表	中世溝状遺構一覧表	118
第 12 表	縄文土器観察表 6	76	第 28 表	土師器・陶器等観察表	119
第 13 表	縄文土器観察表 7	77	第 29 表	時期不明遺構一覧表	121
第 14 表	縄文時代石器計測表 1	78	第 30 表	国光原遺跡における樹種同定結果	127
第 15 表	縄文時代石器計測表 2	79	第 31 表	国光原遺跡における炭化種実同定結果	131
第 16 表	弥生時代竪穴住居跡一覧表	91			

図版目次

巻頭図版 1	B 区出土爪形文土器 (65)		巻頭図版 2	調査区を北側より撮影	
			巻頭図版 3	A 区弥生時代遺構の完掘状況 B 区中世溝状遺構検出状況	
図版 1	散礫検出・竅穴完掘 (B 区西側散礫/竅穴部 3/竅穴部 4/竅穴部 5/SP14)	138	図版 10	旧石器時代の遺物 (1・3・6/10~15/18~23/30~47)	147
図版 2	散礫検出・竅穴完掘 (B 区東側散礫/竅穴部 6)	139	図版 11	縄文土器 (草創期~早期)	148
図版 3	礫群と集石遺構 (PS1/S13/S15/S12/S13/S134)	140	図版 12	縄文土器 (早期)	149
図版 4	集石遺構 (S14/S140/S145/S146)	141	図版 13	縄文時代の石器 (石鏃・石斧・礫器・磁石・磨石・珧石・珧石)	150
図版 5	集石遺構と竅穴 (S10/S147/S159/SP1/SP5・6/SP12・13)	142	図版 14	SA3 出土の弥生土器 (壺・甕)	151
図版 6	縄文土器出土状況と弥生時代の遺構 (縄文時代草創期出土状況/SA1・2/SA3/SA4)	143	図版 15	SA3 出土の弥生土器 (甕・鉢・脚台付鉢)	152
図版 7	弥生時代遺構と中世の溝状遺構 (SA5/SA6・7/SL1/SC10/SE2)	144	図版 16	弥生時代終末期遺構出土の土器 (SA3・SA4・SA7・SC5・SC14・SL1 出土)	153
図版 8	中世の遺構と時期不明遺構 (SB3/SB6/SE11/SC1/SC2)	145	図版 17	SA1 出土の脣圧痕を有する器台根部 SA3 出土の大型の壺	154
図版 9	時期不明遺構・土層断面・礫層検出 (SC3/SC121/B 区ベルト土層断面/B 区礫層検出)	146	図版 18	弥生時代の石器 (SA3・SA5・SA6・SA7 出土)	155
			図版 19	弥生時代の石器・中世の遺物 (SA7・SC10・SE6 出土)	156

第 I 章 はじめに

第 1 節 調査に至る経緯

東九州自動車道（都農～西部間）は、平成元年 2 月に基本計画がなされ、平成 8 年 12 月には整備計画路線となった。さらに、平成 9 年 12 月に建設大臣（当時）から日本道路公団へ施行命令が出され、公団は翌年の 2 月から事業に着手している。それに伴い、宮崎県教育委員会が、平成 10 年度に路線上の遺跡分布調査を行い、計 79 箇所（896,000㎡）におよぶ遺跡の存在が確認された。

そこで、県文化課と公団との協議の結果、工事着手によって影響を受ける部分については、工事着手前に発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成 11 年度から、日本道路公団の委託を受け、宮崎県埋蔵文化財センターが行っている。

国光原遺跡では、平成 15 年度（平成 16 年 2 月 2 日～3 月 30 日）に確認調査が実施され、鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）層の上面で弥生時代の竪穴住居跡と遺物が確認され、また K-Ah 層下位より縄文時代早期の遺物が出土し、集石遺構の一部も検出されている。このため、遺構・遺物が分布すると想定される範囲（5,400㎡、調査区内の西側部分は、調査の対象が 4 車線分から 2 車線分となったことにより、発掘調査対象から除外）を対象に発掘調査が実施されることとなった。

本調査は平成 16 年 6 月 10 日に着手し、平成 17 年 8 月 29 日に終了している。遺物の整理作業は平成 16 年 11 月より行った。

なお、国光原遺跡の所在地は、小字名で「国光原」と「湯牟田」にまたがっている。確認調査の範囲は、字「湯牟田」よりも、字「国光原」の方が広がったが、本調査の範囲は、すべて字「湯牟田」の部分だけになってしまった。

しかし、本調査区内の字「湯牟田」部分にあって、調査開始前に西側の隣接地に移転した墓地の名称が、「国光原共同墓地」とされていること、また平地に所在する南隣の湯牟田遺跡に比較して、傾斜地に位置する本遺跡の性格は、立地環境面で大きな違いがあることを重視して、湯牟田第 2 遺跡等の名称は付けずに「国光原遺跡」とした。

第 2 節 調査の組織

国光原遺跡の調査体制は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

米良弘康（平成 15 年度）

宮岡淳一（平成 16～17 年度）

清野 勉（平成 18 年度）

副所長兼総務課長

大藪和博（平成 15～16 年度）

副所長

加藤悟郎（平成 18 年度）

副所長兼調査第二課長

岩永哲夫（平成 15～18 年度）

総務課長

宮越 尊（平成 17～18 年度）

主幹兼総務係長

石川恵史（平成 15～17 年度）

主幹兼総務担当リーダー

高山正信（平成 18 年度）

調査第一課長

児玉章剛（平成 15 年度）

高山富雄（平成 16～18 年度）

調査第一係長

谷口武範（平成 15～16 年度）

主幹兼調査第一係長

長津宗重（平成 17 年度）

主幹兼調査第一担当リーダー

長津宗重（平成 18 年度）

調査第二係長

長津宗重（平成 15 年度）

主幹兼調査第二係長

長津宗重（平成 16 年度）

菅付和樹（平成 17 年度）

主幹兼調査第二担当リーダー

菅付和樹（平成 18 年度）

調査第一課調査第二係主事

今塩屋毅行（平成 15 年度、確認調査）

調査第一課調査第一係主査

安藤正純（平成 16～17 年度、調査・整理）

調査第一課調査第一担当主査

安藤正純（平成 18 年度、整理・報告書）

調査第一課調査第一係調査員

松尾有年（平成 15 年度、確認調査）

調査第一課調査第二係調査員

黒木 修（平成 16 年度、調査）

調査第一課調査第一係調査員

福田光宏（平成 17 年度、調査）

東九州自動車道発掘調査指導委員

泉 拓良 [京都大学]

小畑弘己 [熊本大学]

田崎博之 [愛媛大学]

広瀬和雄 [国立歴史民俗博物館]

本田道輝 [鹿児島大学]

柳沢一男 [宮崎大学]

加藤真二 [文化庁]

第 3 節 遺跡の位置と周辺環境

国光原遺跡は宮崎県児湯郡川南町大字川南字国光原と字湯牟田に所在する（第 1 図）。

川南町は、宮崎県のほぼ中央東部の一角を占め、東には日向灘が広がり、北は都農町、西は木城町、南は高鍋町に接している。川南町の西部には標高 1000 m 級の尾鈴山系が連なり、東麓にはなだらかな扇状地の地形が広がっている。

国光原遺跡は東にのびる緩やかな丘陵の端部に立地しており、標高は約 64 m～74 m を測る。本遺跡の南東側に湯牟田溜池があり（巻頭図版 2 参照）、溜池周囲の一帯は、本遺跡からは少し低くなっている。隣接する湯牟田遺跡は、この標高の低い箇所に位置している。湯牟田溜池北側から続く丘陵斜面をのぼった所が、国光原台地であり、台地上へには茶園や畑が広がる。また、台地上では養鶏業も営まれていたようであり、大きな鶏舎跡が残っている。

湯牟田溜池に近い本遺跡 B 区東南隅（湯牟田遺跡 D 区東北隅に接する）は、表土下から礫層に到達するまで、きれいな黒色土による土層堆積が見られる。おそらく、この地点は、過去長期間にわたって湿地帯の一部であったことが想像される。

地名の由来として、湯牟田は、「ムタ」の言葉が示すとおり、低い湿地帯であることに由来していると思われる。また国光原については、宮崎県内で「原」=「バル」と発音される地名は、水の便の悪い台地上の土地を指すことが多いことから、ここに由来があると思われる。二つの地名は、それぞれの土地の立地環境を端的に示している。

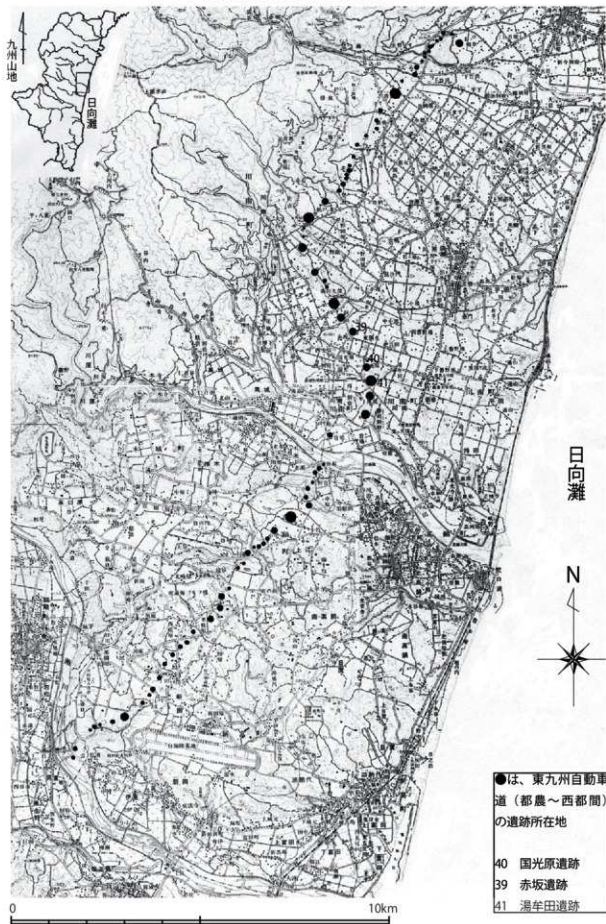
なお国光原遺跡の B 区は、湯牟田遺跡の D 区と隣接しているが、両遺跡の境界には灌漑水路として利用されているヒューム管（最大口径 1 m ほど）が埋設されており、航空写真等でもその境界をはっきりと見ることができる。このヒューム管埋設地点が、本遺跡の標高の一番低い場所であり、そこから北側に向かって上り勾配の斜面になる。

本遺跡の周辺（国光原集落）の人家はまばらであるが、遺跡に隣接する国光原共同墓地の墓碑銘を見ると、幕末の時期（近世末期）に該当する年代のものが散見される。児湯郡川南町は、近代になってから開拓が始まった地区が多く、開拓者は全国から移り住んで来ている。これらの墓石が、近代になって、他所から遺骨を移した際に、新たに建てられたものなのか、あるいは、近世末期のこの地に、実際に集落に付随する墓地があって、遺体の埋葬が実施されていたことを示すのかは不明である（国光原共同墓地の現位置は、巻頭図版 2・3 の航空写真を参照）。

本遺跡の南隣に位置する湯牟田遺跡（第 1 図 41）では、縄文時代の集石遺構・穴穴、弥生時代の焼失住居跡を含む堅穴住居跡、中世の溝状遺構や掘立柱建物跡等が検出されている。また、本遺跡から少し離れているが、本遺跡の西北方向に位置する赤坂遺跡（第 1 図 39）では、弥生時代の焼失住居跡を含む堅穴住居跡・周溝状遺構・円形周溝墓、中世の溝状遺構・掘立柱建物跡等が検出されている。

なお、巻頭図版 2 の航空写真は平成 16 年 11 月上旬撮影であり、巻頭図版 3 の国光原遺跡 B 区と湯牟田遺跡 D 区の状況は平成 16 年 12 月中旬に撮影している。

第1図 遺跡位置図及び周辺遺跡分布図 (1/100,000)



第Ⅱ章 調査・整理の概要と経過

第1節 確認調査の概要

(1) 調査の方法

国光原遺跡の確認調査は、平成16年2月2日から平成16年3月30日にかけて実施された。対象面積が18,780㎡と広大なため、便宜上、4区画に分割し、幅2m、長さ25m～50mのトレンチを29箇所設定して掘削を進めた。さらに、トレンチによっては遺物の出土状況や広がりを確認するために層位ごとに平面的に掘り下げた。

確認調査は重機で先行トレンチを掘削して層位の状況を確認した後、人力で精査した。K-Ah層が残存する箇所は、上面にて遺構の有無を確認した後、随時掘り下げて、MBO層における遺物包含層の有無を確認した。K-Ah層上位のクロボク層で遺構・遺物が確認できたT3～T5の南半部以外では、全てのトレンチでMB2層中部まで精査し、局所的にKr1w（イワオコシローム）層前後まで掘り下げた。

(2) 調査の概要

【A区一字湯牟田】 A区の南端部付近（T1～T5）はK-Ah層以下の土層は良好に存在し、部分的には弥生時代遺物を包含するクロボク層が遺存している。しかし北半部では、クロボク層～ML1層を削平した後に客土を盛るといった土地造成が認められた。また、トレンチチャー痕が表土下より縦横無尽に広がっていることが分かったが、周辺住民の聞き取り調査によると、牛蒡作付けに伴う地形改変と思われる。また、調査区を横断する形でML1下層に到達するほどのゴミ穴が連続する。

遺物はT1トレンチのMBO層から縄文土器片・石鏃・石斧・剥片等が、ML1上部より細石刃・剥片、ML1下部より角錐状石器・剥片が出土した。

遺構は、T5トレンチのK-Ah上面において方形プランの竪穴住居跡（1辺約6m）が1軒検出された。住居に伴う遺物として、弥生土器片・石庖丁などが遺構検出面で出土した。またT3～T4トレンチの南端部（K-Ah層上面）で弥生時代のものと思われる土坑が2基検出された。

さらにT1トレンチの西側部分のMBO層下部で縄文時代の集石遺構1基が検出された。

【B区一字湯牟田】 A区から湯牟田遺跡に向かってなだらかに傾斜する丘陵斜面であるが、隣接する湯牟田遺跡の調査進行状況を考慮して確認トレンチを設定しなかった。

【C区一字国光原】 この調査区では、茶栽培に伴う耕作でクロボク層～MBO層まで著しい攪乱を受けていた。ML1層以下は良好に遺存していたが、全ての確認トレンチで遺構、遺物は確認されなかった。

【D区一字国光原】 C区と同様に、茶栽培に伴う耕作でクロボク層からMBO層にかけて著しい攪乱を受けていた。ML1層以下は良好に遺存していたが、全ての確認トレンチで遺構、遺物は確認されなかった。

【E区一字国光原】 D区とE区の境界部分には、細い農道があり、農道より南側がD区、農道の北側がE区である。E区の中央から南半部（T17～T23付近）はK-Ah層が残存していたが、北半部（T24～T29）ではML1上部まで削平された上、牛蒡耕作によるトレンチチャー痕もML1上部に達している。

遺構・遺物については、T17～T23で、K-Ah面において、1辺1m前後で方形の浅い掘り込み（0.3m）が碁盤の目状に配置されている状況が確認された。掘立柱建物跡の存在が想定されたが、埋土中からは現代の陶磁器が出土したことや、旧地権者の話から果樹栽培に伴う植え込みと判断した。

T18では、東西方向に幅2m前後の浅い溝が検出された。これは、旧地権者の自宅撤去に伴う攪乱と判断した。従って、全ての試掘トレンチで遺構・遺物は確認されなかった。

(3) まとめ

【旧地形の復元】 現況の地形は南から北側にかけて緩やかな斜面地であるが、旧地形は、弥生時代の竪穴住居跡が検出されたT5南半部付近までは、湯牟田遺跡から続く緩斜面で、それより北側はやや高い起伏が存在していたと考えられる。

【本調査に向けて】 本調査対象区は、確認調査の結果から、A区南端部のT1とT5付近の部分とすることにした。同じく、調査対象の文化層は弥生時

代後期（クロボク層～K-Ah層上面）、縄文時代早期（MBO層～ML1上部）、細石刃文化期（ML1上部）、後期旧石器時代（ML1下部以下の層）とすることにした。

確認トレンチを入れることが出来なかった廃材集積箇所も地形や隣接するトレンチの調査成果から、弥生時代後期や縄文時代早期の遺構・遺物が確認されると推定される。

なお、遺構・遺物が確認されず、削平や攪乱の著しいC・D・E区は本調査対象外とした。

B区については確認トレンチを設定しなかったが、隣接する湯牟田遺跡の調査成果を考慮に入れるとA区の本調査対象部分と同様な文化層が存在することが容易に想像できた。

以上の結果により、国光原遺跡の本調査対象は、湯牟田遺跡に隣接するB区とA区の南端部分になり、宇国光原のC・D・E区は、すべて本調査の対象から除外した。

第2節 発掘調査の経過

A区の本調査は、平成16年6月10日から同年11月29日まで実施した。まず廃材集積箇所の廃材を重機でA区西北隅に移動させた。次に重機で表土・客土の掘削を実施することになったが、A区全体で、クロボク層の残存状況が極めて良くないことが予想されていたため、最初から、K-Ah層上面で揃えて表土・客土を剥ぐことになった。

A区の本調査対象となった部分は、日本道路公団による土地買収により、調査区のすぐ西隣に移転した国光原共同墓地の跡地の部分にほぼ重なる。そのため、廃棄されそのまま埋められていた古い墓石等の石塊や、墓地を囲んでいた柵の残骸と思われるコンクリートブロック等が表土中に混じっていた。

表土を剥いだ後、K-Ah層上面で遺構検出作業を実施した。その結果、弥生時代後期～終末期の竪穴住居跡7軒・周溝状遺構1基・土坑12基が確認された。また、同一面で中世の溝状遺構2条、時期不明の土坑3基を検出した。

K-Ah層上面の調査終了後、重機でK-Ah層を除去し、MBO層で揃えて、人力で包含層を下げていった結果、MBO層の中部よりやや下の部分で、A区

西南部分を中心に散礫が広がっていることが確認された。また散礫とともに、9基の集石遺構（そのうちの1基は、前年度の確認調査で検出済）が検出された。

A区の調査期間中、調査区内の一部に深掘りトレンチを設定して、部分的に下げてみたが、ML1層以下の旧石器時代に該当する層では、確認調査に続いて遺構は検出されなかった。平成15年度の確認調査で、ML1層下部より下で遺構が検出されなかったことを考慮し、また時間的な制約もあり、それ以上、旧石器時代に相当する層の調査を目的としたトレンチを設定することはなかった。

また、A区の調査期間中、隣接するB区の確認調査を実施した。平成15年度の確認調査の際には、湯牟田遺跡の調査の進行状況との兼ね合いから、B区では確認調査を実施していなかった。よって、A区の本調査が始まってから、並行してB区の確認調査を実施した。

B区の確認調査の結果、表土下ではクロボク層以下の地山がほとんど削平されずに良好に堆積していることが確認された。またK-Ah層上面で全面的に、中世のものと思われる溝状遺構が広がっていることが確認された。さらに、B区中央部より少し南側の箇所のML1層下部で、縄文時代早期のものと思われる埴穴群を検出した。

よって、A区の本調査が終了するとすぐに、平成16年12月1日から平成17年8月29日にかけてB区の本調査を実施した。

最初に、重機で表土の掘削を行ったが、A区本調査と並行して実施したB区確認調査で、表土下のクロボク層からは、ほとんど遺物が出土しなかったことを考慮して、表土とともに一緒にクロボク層を除去し、K-Ah層上面で揃えた。

K-Ah層上面で遺構精査を実施した結果、溝状遺構11条を検出できた。そのうちの2条の溝の底部で、時代を特定できる遺物が出土し、これらの溝状遺構は中世前期のものとして特定できた。

中世の溝状遺構の調査終了後、重機でK-Ah層を除去し、MBO層上面で揃えて人力による掘削で包含層を下げていった。その結果、A区と同じように、まず散礫が現れ、散礫の中や、その周囲に点在する形で、集石遺構が数十基検出された。A区と違った

のは、散礫を取り払った後、その下からも十数基ほどの集石遺構が検出できたことであった。結局、A区の9基を大幅に上回り、合計54基の集石遺構をB区で検出した。

散礫と集石遺構の調査終了後、ML1層上面で、慎重に遺構精査を行った結果、単独の炉穴1基、炉穴群1群、土坑2基を検出した。さらに調査区全体を15cmほど重機で下げた後、遺構精査をした結果、単独の炉穴1基、炉穴群5群、土坑16基を確認した。その結果、合計で単独の炉穴2基、切り合いにより群をなす炉穴6群、土坑18基を検出することができた。

これらの縄文時代遺構の調査と並行して、念のため、旧石器調査のためのトレンチをいくつか設定して掘削し始めたところ、B区南西部分のML2層上面で礫群1基を検出した。また調査区北端のトレンチでも始良Tn火山灰層下のMB3層で黒曜石製の台形石器が出土したため、B区全体に旧石器調査のためのトレンチを満遍なく設定して人力で深掘りを実施した。

その結果、上記以外の礫群の検出は無かったものの、B区北西側を中心に始良Tn火山灰層の上下でかなり良好な旧石器時代の遺物（角錐状石器・ナイフ形石器・台形石器・石斧・礫器・挿器・蔽石・石核・剥片など）が出土した。

また旧石器時代の調査の最中、B区西端のML1層下部で大型の土坑1基を検出した。遺物が出土しなかったため、断定はできないが、埋土の硬さや遺構の形態から、縄文時代草創期～早期の落し穴状遺構であることが推測される。

始良Tn火山灰層下位のMB2層・MB3層で、礫群が検出されないことを確認した上で、平成17年8月29日に国光原遺跡の全調査を終了した。

第3節 基本層序

国光原遺跡の基本層序は、A区では、調査区の南端部分を中心に、鬼界アカホヤ火山灰[K-Ah]（約7,300年前）を含む層からその下の層が良好に自然堆積している。また、B区では表土下のクロボク層もほとんど削平されず、クロボク層から礫層にかけて極めて良好な自然堆積が確認された。本遺跡の基

本層序は次のようにまとめられる。

第I層	表土
第II層	客土
第III層	クロボク層
第IV層	K-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）
第V層	黒褐色ローム（MBO）
第VI層	暗褐色ローム（ML1 上部相当）
第VII層	褐色ローム（ML1 下部相当）
第VIII層	褐色ローム（ML2 相当か？）
第IX層	始良Tn火山灰
第X層	暗褐色ローム（MB2）
第XI層	暗褐色ローム（MB3）
第XII層	褐色ローム（ML3 相当）
第XIII層	Kr-Iw（イワオコシローム）
第XIV層	礫層

第I層は表土である。B区ではほぼ均等な厚さ（10cm以内）であった。A区では調査区南側部分で局所的に深い部分がある。

第II層は客土である。B区には存在しないが、A区では調査区の北側部分で2m以上に達する所もある。

第III層はクロボク層である。A区では、調査面積の半分以上にわたって削平をうけていた。B区では良好に堆積しており、削平の影響はほとんどなかった。特に湯牟田溜池に近いB区南東隅では、分厚い堆積状況であった。

第IV層はK-Ah（鬼界アカホヤ火山灰）である。A区では調査面積の半分近く（特に調査区北東側）が削平されていたが、B区では非常に良い状態で堆積していた。しかしB区内でも、南東部では確認できなかった。

第V層は黒褐色ローム（MBO）層である。縄文時代草創期～早期の遺物包含層である。A区でも調査区の東北部分を除いて、全体の3/4程度の面積で確認できた。B区では南東隅部分では、確認できなかったが、その他の部分では堆積良好である。

第VI層は暗褐色ローム層（ML1 上部相当）である。縄文時代草創期～早期の遺物包含層である。A区では調査区の東北部分を除いて、B区では南東隅部分を除いて良好な堆積状況が確認できる。

第Ⅶ層は褐色ローム層（ML1 下部相当）である。後期旧石器時代の遺物包含層である。B区の南部では、第Ⅵ層との違いが、はっきりと確認できる所もあるが、A・B区ともに第Ⅵ層との分層がはっきりしない所が多い。

第Ⅷ層は褐色ローム層（ML2 相当か？）である。第Ⅶ層よりも更に視覚上は明るく見える。後期旧石器時代の遺物包含層である。ただし、B区の南西部を中心に堆積していて、そこから遠くなるにしたがって薄くなる。A区では、全く確認できなかった。

第Ⅸ層は始良 Tn である。B区の南西部では、二次堆積を含めて 50cm を越す厚さが見られる所もあるが、A・B区のその他の箇所では、20cm 強ほどの堆積状況である。

第Ⅹ層と第Ⅺ層は暗褐色ローム層（MB2・MB3）である。後期旧石器時代の遺物包含層である。B区の東南部分や中央部分では、所によって確認できなかった場所もある。

第Ⅻ層は褐色ローム層（ML 3 相当）である。A・B区ともに、場所によって確認できる所と確認できない所がある。

第Ⅼ層は、Kr-Iw（イワオコシローム）である。A区の東北隅部分、B区では、調査区の南端中央で確認できた。その他の大部分の場所では確認できなかった。

第Ⅽ層は、礫層である。A・B区ともに多くの場所では、第Ⅺ層（MB3）のすぐ下で検出できる（図版9 146 頁参照）。しかし場所によっては、かなりの深掘りになるため、すべての箇所に礫層があるかどうかは確認できなかった。

第4節 整理作業及び報告書作成

本遺跡発掘調査資料は、平成16年11月から宮崎県埋蔵文化財センター本館において整理作業を開始した。

11月から翌年（平成17年）9月まで遺物の洗浄・注記・接合・計測作業を行った。接合作業は、弥生時代の竪穴住居跡から出土した土器と、縄文時代草創期～早期に該当する包含層から出土した土器片の数が多かったため、かなりの時間を費やした。土器の接合作業と平行して、出土土器の石材分類、計測を実施している。

平成17年10月からは、出土遺物の実測を行い、平成18年3月に終了した。また縄文土器の拓本をとる作業は平成18年4月から5月にかけて実施した。

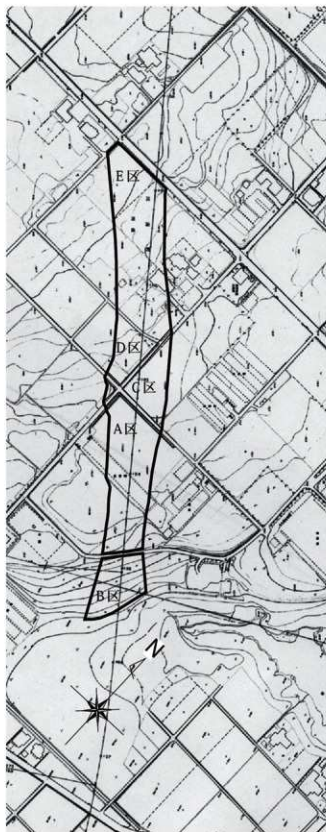
遺構・遺物のトレースは、平成18年の4月から開始したが、すべてパソコンによるデジタルトレースを実施し、平成18年9月に完了した。図面レイアウトは、同じくパソコン上で10月から11月にかけて行った。トレース・拓本取り込み・レイアウト作業で使用したパソコンソフトは以下の通りである。

- ◇O S … Windows XP
- ◇トレースくん（アイシン精機）
- ◇イラストレーター CS2（アドビ）
- ◇フォトショップ CS2（アドビ）
- ◇インデザイン CS2（アドビ）

文章と表・グラフは平成18年4月から同年11月にかけて作成した。文章はワード2003、表・グラフはエクセル2003で作成し、後でインデザインCS2に読み込み、図面等と合わせて最終的なレイアウト作業を実施した。

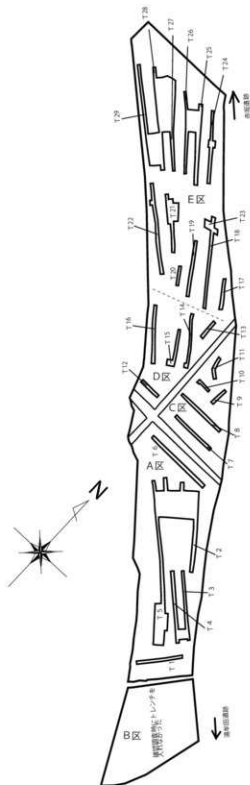
また、巻頭と巻末の図版に掲載している遺物の写真撮影は平成18年11月に実施している。

なお、本遺跡では弥生時代の竪穴住居跡と周溝状遺構について、遺構埋土を洗浄して、種子や炭化物等を選別するフローテーション法を実施したが、その詳細については第Ⅲ章第6節に譲る。



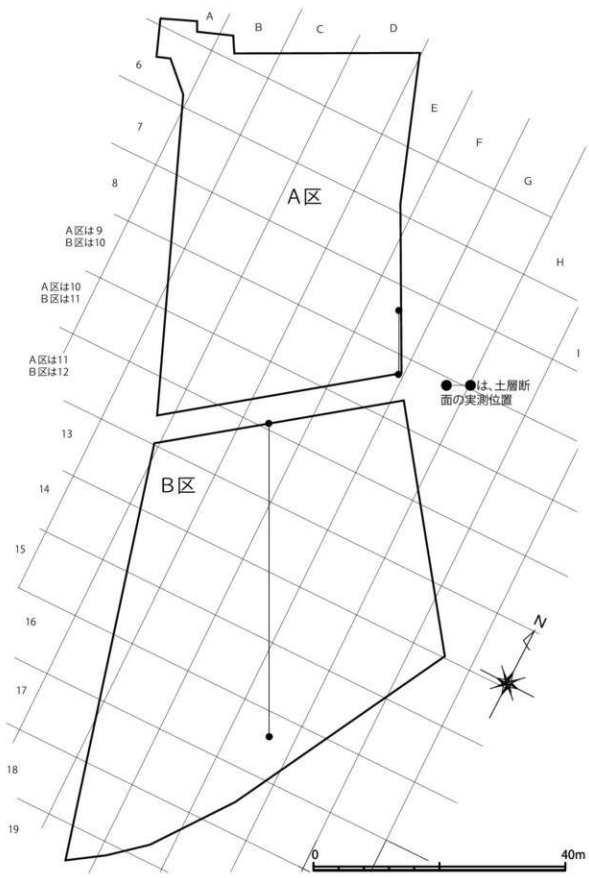
0 200m

第2図 調査区域図 (S=1/4,000)



0 100m

第3図 確認調査トレンチ配置図 (1/2,500)



第4図 国光原遺跡グリッド配置図・土層断面セクションポイント配置図 (1/600)

第三章 発掘調査の記録

第1節 後期旧石器時代の調査

(1) 後期旧石器時代の調査の概要

V層下部～VI層上面の縄文時代草創期～早期に相当する時期の調査で、縄文時代の遺物とともに100点以上におよぶ旧石器が出土した。また、VII層以下の旧石器該当層の調査では、50点以上の旧石器が出土した。

また、VII層以下に関しては、A区・B区ともに、調査区全面を均一に掘り下げていったのではなく、部分的に深掘トレンチを設定(第6図参照)して、750㎡を対象に調査を実施した。トレンチのいくつかは礫層上面まで精査した。礫群ならびに石器は、以下の層より確認された。

一 IV層(K-Ah)一

◇V層 …ナイフ形石器、挿器、台形石器、石核、細石刃、細石刃核、剥片

◇VI層 …ナイフ形石器、角錐状石器、台形石器、細石刃、剥片

◇VII層 …角錐状石器、剥片

◇VIII層 …礫群(VII層上面)、角錐状石器、剥片

一 IX層(始良Tn)一

◇X層上部 …石斧、挿器、敲石、剥片

◇XI層下部 …台形石器、礫器、石核、剥片

礫群についてはB区南端中央部のVIII層上面検出の1基のみである。石器は、始良Tn上位のV～VIII層の各層では、A区からB区にわたる比較的広範囲にわたって出土した。始良Tn下位のX層～XI層では、B区の北西部分に集中して出土した。

(2) 後期旧石器時代の地形

おおまかな地形は現在と変わらず、南東から北西にのぼる緩斜面だったと思われる。しかし、始良Tn火山灰の降灰とその二次的な移動によって、始良Tn下位には見られたB区南端部一帯の谷(湯牟田遺跡との境で段丘下に相当)が埋められ、比較的フラットになったものと推定される。

(3) 後期旧石器時代の遺構・遺物

本遺跡では、始良Tn下位で30点以上、始良Tn上位で160点以上の旧石器が出土している。また始良Tn上位のVIII層では、礫群が1基検出されているが、以下、本遺跡の文化層ごとに、検出された遺構と出土した遺物を示す。

【第1文化層】(第8図1～4)

XI層(MB3)最下部に包含される。該当層まで掘り下げたトレンチは第6図に示す通りであるが、遺物が確認されたのはほとんどがB区北西隅部分であった。石器の総点数は14点であり、そのうち4点を掲載した。

1の桑ノ木津留産黒曜石の台形石器は、宮崎県内で始良Tn下位から出土する例は少なく特筆されるものである。その他、3は礫器、4は石核である。大ぶりの石器が多い。

宮崎県旧石器文化談話会「宮崎県の旧石器時代遺跡概観(2004)」(以下、「宮崎旧石器概観」と略す)に示された段階によると、[第1段階]に相当する遺物と考えられる。

【第2文化層】(第8図5～9)

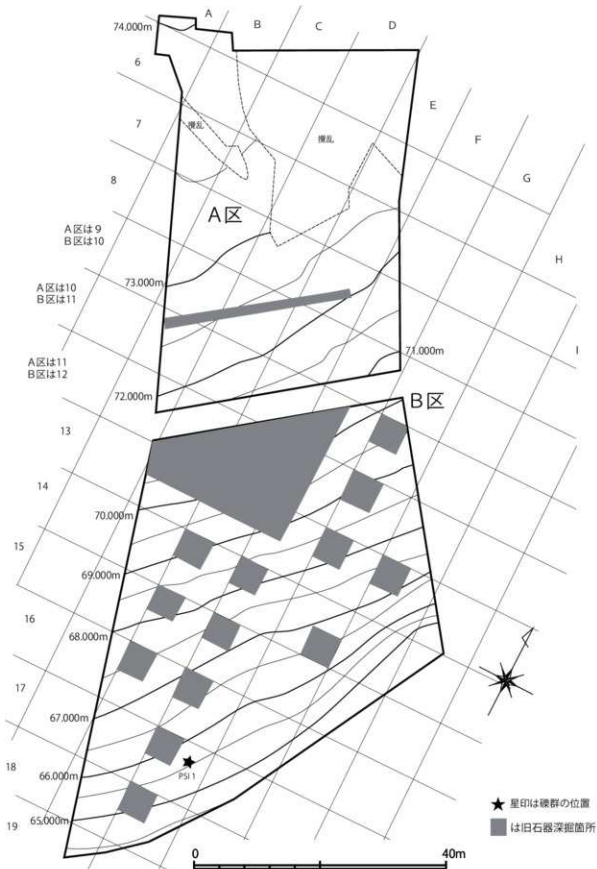
始良Tn直下のX層(MB2)上部に包含される。第1文化層と同じく、遺物が確認されたのはほとんどがB区北西隅部分であった。石器の総点数は17点であり、そのうち5点を掲載した。5は挿器、6は石斧、7・8は二次加工剥片、9は敲石である。ナイフ形石器はみられない。

「宮崎旧石器概観」によると、[第3段階]に相当する遺物と考えられる。

【第3文化層】(第9図12・13・15・16)

始良Tn上位のVIII層とVII層に該当する。本遺跡のVIII層は、堆積が認められない部分が多く、堆積している部分も層は非常に薄い。

またVII層は調査区全体に堆積が認められるが、遺物が出土した部分が、VII層下部に限られる。出土遺



第6図 旧石器時代遺構分布図・始良 Tn 下位掘削トレンチ配置図 (S=1/600)

物の種類も、両方の層ともに角錐状石器と剥片であることから、Ⅷ層出土の遺物とⅧ層下部出土の旧石器は、同一の文化層に属するものと判断した。

本遺跡では、この文化層にのみ礫群（PSI 1、第7図、Ⅷ層上面検出）が伴う。礫の範囲は南北1.31m、東西1.27mである。礫はほとんどすべてが被熱しており、大きさはこぼし大程度のものが多い。尾鈴山酸性岩類の中には数点やや大きめのものがある。礫群（PSI 1）構成礫の構成石材・石材別点数・石材別重量は以下の通りである。

◇尾鈴山酸性岩類 19点（14.5kg）

◇ホルンフェルス 15点（5.3kg）

◇砂岩 5点（1.4kg）

◇総数・総重量 39点（21.2kg）

なお、礫群周囲には数点の剥片が散在していた。

Ⅷ層上面出土の16の大型の二次加工剥片は、その一つである。

石器としては、12（B区中央部Ⅷ層出土）・15（A区南西隅Ⅷ層出土）の角錐状石器がある。

13は12製作の際に剥離された剥片であり、12出土地点のやや北側の地点で出土した。出土層位はⅧ層であり、ここで角錐状石器の製作が行われたことがわかる。

第3文化層出土の遺物は、「宮崎旧石器概観」によると、[第5段階]～[第6段階]に相当する遺物と考えられる。

【第4文化層】（第9図・第10図）

縄文時代草創期～早期の包含層であるⅤ層下位のⅥ層上面に該当する。しかし、この層位でも、縄文土器片が何点か見られることから、縄文時代草創期～早期の文化層と重なる可能性もある。

遺物は10・11・18のナイフ形石器、14の角錐状石器、17の微細剥離のある剥片、26の流紋岩製の剥片、37の台形石器、45・46の桑ノ木津留黒曜石製の細石刃が出土した。

「宮崎旧石器概観」によると、10・11のナイフ形石器は[第4段階]に相当する遺物と考えられる。いずれもB区東北隅で出土した。素材剥片の打点がナイフ形石器先端側にあるという特徴から第4段階に相当するものとした。

14の角錐状石器、17の微細剥離のある剥片は、

いずれもB区北西部分で出土したが、[第5段階]～[第6段階]に相当する遺物である。

18のナイフ形石器は、A区西側部分で出土したが、10・11と違い、ナイフ形石器基部の方に素材剥片の打点側がある。その特徴から「宮崎旧石器概観」の[第7段階]に相当するものとした。26の剥片も[第7段階]に相当するものである。

37の台形石器は、B区北西部で出土したが、おそらく[第6段階]～[第7段階]に相当し、45・46の細石刃は、[第8段階]以降の細石刃文化層に該当する遺物である。

よって、上記の遺物の出土状況から判断すると、第4文化層は、「宮崎旧石器概観」の[第4段階]以降の遺物をすべて包含する文化層である。

【第4文化層の上位層出土遺物】（第9図・第10図）

本遺跡のⅤ層は、縄文時代草創期～早期の包含層であり、多数の縄文土器や縄文時代の特徴を有する石器が出土しているが、それに混在して、100点以上の旧石器も出土している。

本遺跡では、集石遺構や炉穴を中心とする多数の縄文時代草創期～早期にかけての遺構があり、これらの遺構の造営により、Ⅴ層中に、Ⅵ層以下から多数の旧石器が混じった可能性もある。また、本遺跡は傾斜地になっていることから、一部、他所からの流れ込みもあると考えられる。

Ⅴ層出土の石器で図面を掲載したのは、19～23のナイフ形石器、24の搔器、38・39の台形石器、25の微細剥離のある剥片、27～29の二次加工剥片、30～34・48の剥片、35・36・49の石核、40～44の細石刃、47の細石刃核である。

「宮崎旧石器概観」により、Ⅴ層出土の旧石器を分類すると以下ようになる。

【第6段階】～【第7段階】

◇台形石器（38・39）

【第7段階】

◇ナイフ形石器（19～23）

◇搔器（24）

◇微細剥離のある剥片（25）

◇剥片（30～34）

◇二次加工剥片（27～29）

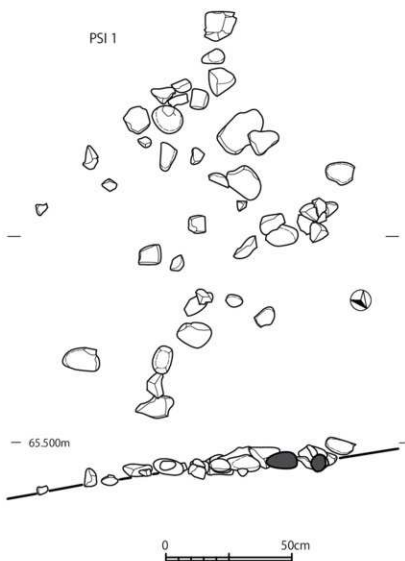
- ◇石核 (35～36)
- [第8段階]以降
- ◇細石刃 (40～44)
- ◇細石刃核 (47)
- [段階不明]
- ◇剥片 (48)
- ◇石核 (49)

よって、本遺跡のV層は、縄文時代草創期～早期にわたる遺物の包含層であるとともに、「宮崎旧

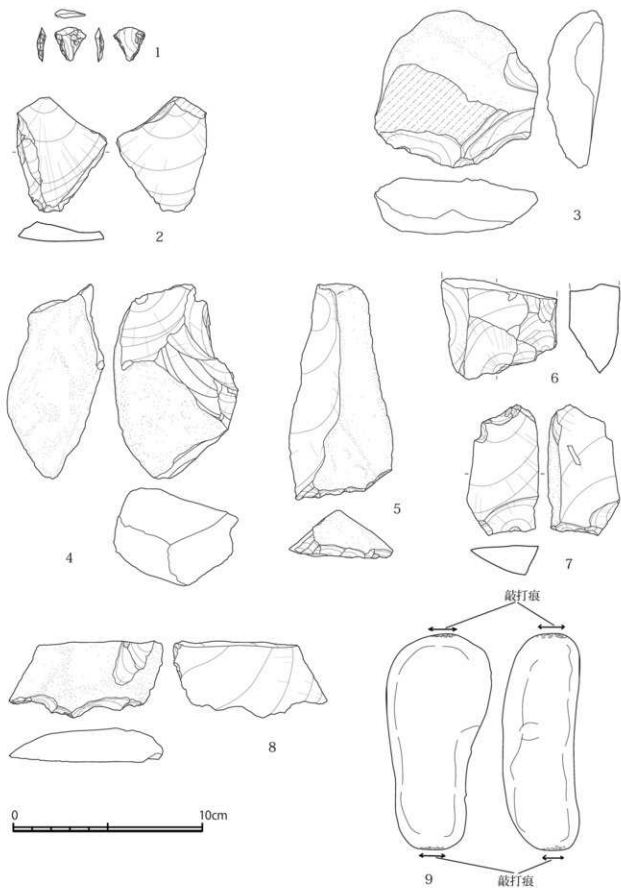
石器概観」の[第6段階]以降の旧石器をも包含する層である。

【実測図未掲載の遺物】

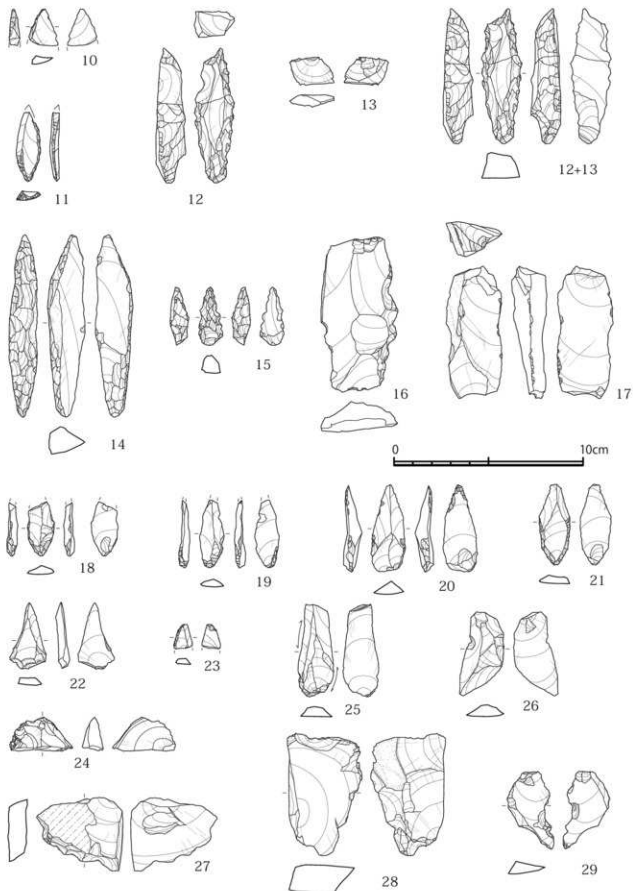
本遺跡では、実測図未掲載文として、始良Tn下位ではX1層とX層を合わせて22点の剥片が出土しており、始良Tn上位ではⅧ層10点・Ⅶ層11点・Ⅵ層17点・Ⅴ層124点の剥片が出土した。詳細は本節末の実測図未掲載分の旧石器計測表に記している(19頁～21頁)。



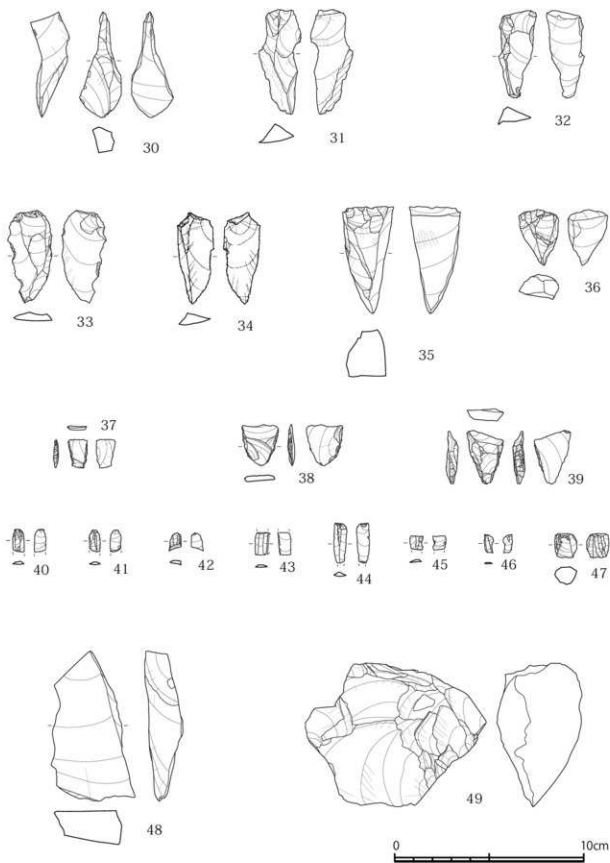
第7図 礫群実測図 (1/15)



第8图 始良Tn下位层(MB2·MB3)出土旧石器夹测图(1/2)



第9图 始良 Tn 上位層出土旧石器实测图1 (1/2)



第 10 图 始良 Tn 上位層出土旧石器实测图 2 (1/2)

第1表 実測図掲載分旧石器計測表

遺物番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	E12	X1層	台形石器	黒曜石燻ノ木津留	1.8	1.6	0.4	0.81	
2	D13	X1層	二次加工剥片	ホルンフェルス	6.1	4.8	0.9	35.19	
3	—	X1層	礫器	ホルンフェルス	8.3	8.7	2.8	225.17	
4	E12	X1層	石核	ホルンフェルス	10.2	6.6	4.4	324.30	
5	D13	X層	掻器	ホルンフェルス	11.4	5.5	2.5	136.90	
6	E11	X層	石斧	ホルンフェルス	5.4	6.1	2.7	103.54	
7	E11	X層	二次加工剥片	ホルンフェルス	6.9	3.8	1.6	49.80	
8	—	X層	二次加工剥片	ホルンフェルス	4.1	8.1	1.8	56.74	
9	D13	X層	敲石	砂岩	11.4	5.6	4.0	343.70	
10	—	VI層	ナイフ形石器	流紋岩	2.0	1.6	0.6	1.30	
11	G11	VI層	ナイフ形石器	流紋岩	3.65	1.3	0.4	2.40	
12	F15	VII層	角錐状石器	頁岩	7.1	2.1	1.6	13.36	
13	F16	VIII層	剥片	頁岩	1.5	2.4	0.5	1.34	
12・13	F15/F16	VII・VIII層	接合資料	頁岩	7.1	2.1	1.6	14.70	
14	E14	VI層	角錐状石器	ホルンフェルス	9.6	2.0	1.5	25.11	
15	—	VIII層	角錐状石器	チャート	3.1	1.3	0.9	2.97	
16	F17	VIII層	二次加工剥片	ホルンフェルス	8.2	4.1	1.6	49.83	
17	E13	VI層	使用痕剥片	頁岩	7.0	3.0	1.8	33.64	
18	C10	VI層	ナイフ形石器	流紋岩	2.9	1.4	0.6	2.05	
19	C7	V層	ナイフ形石器	流紋岩	3.6	1.3	0.4	2.10	
20	B9	V層	ナイフ形石器	流紋岩	4.6	1.8	0.8	6.66	
21	B7	V層	ナイフ形石器	流紋岩	4.2	1.6	0.5	4.14	
22	F12	V層	ナイフ形石器	流紋岩	3.5	1.9	0.5	3.10	
23	G11	VI層	ナイフ形石器	黒曜石燻ノ木津留	1.3	1.0	0.3	0.47	
24	E7	V層	掻器	流紋岩	1.7	3.3	0.9	5.31	
25	F16	V層	使用痕剥片	ホルンフェルス	4.9	1.9	0.5	6.20	
26	—	V層	剥片	流紋岩	4.5	2.3	0.7	6.19	
27	C9	V層	二次加工剥片	流紋岩	3.9	4.6	1.0	22.60	
28	E12	V層	二次加工剥片	流紋岩	6.5	3.9	1.5	42.10	
29	E15	V層	二次加工剥片	流紋岩	4.1	2.3	0.8	6.28	
30	F11	V層	剥片	流紋岩	5.6	2.2	1.7	11.31	
31	F11	V層	剥片	流紋岩	5.5	2.2	1.2	13.82	
32	F11	V層	剥片	流紋岩	4.6	2.0	1.0	7.49	
33	E15	V層	剥片	流紋岩	4.9	2.3	0.4	0.11	
34	F15	V層	剥片	流紋岩	4.9	1.9	0.6	5.64	
35	D9	V層	石核	流紋岩	5.7	2.7	2.5	42.34	
36	E17	V層	石核	流紋岩	2.9	2.1	1.1	7.22	
37	E12	VI層	台形石器	頁岩	1.5	1.0	0.2	0.47	
38	G13	V層	台形石器	流紋岩	2.2	1.9	0.4	1.63	
39	F12	V層	台形石器	チャート	2.8	1.9	0.6	3.05	
40	F8	V層	礪石刃	黒曜石燻ノ木津留	1.2	0.6	0.1	0.13	
41	—	V層	礪石刃	黒曜石燻ノ木津留	1.2	0.6	0.1	0.10	
42	G14	V層	礪石刃	黒曜石燻ノ木津留	0.9	0.6	0.2	0.13	
43	C9	V層	礪石刃	流紋岩	1.2	0.7	0.1	0.18	
44	G12	V層	礪石刃	流紋岩	2.1	0.7	0.2	0.44	
45	D7	VI層	礪石刃	黒曜石燻ノ木津留	0.8	0.7	0.1	0.08	
46	F8	VI層	礪石刃	黒曜石燻ノ木津留	1.0	0.5	0.1	0.03	
47	C8	V層	礪石刃核	黒曜石燻ノ木津留	1.3	1.2	1.0	1.69	
48	B9	V層	剥片	流紋岩	7.9	4.4	1.8	64.68	
49	F10	V層	石核	ホルンフェルス	7.6	9.6	4.3	320.23	

※旧石器時代の遺物は全てグリッド一括で取り上げている。

第2表 実測図「未掲載」旧石器計測表1

整理番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
1	E 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	5.8	5.5	2.4	79.9	
2	D 1 3	X 1	細片	ホルンフェルス	5.2	6.4	1.0	33.3	
3	E 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	8.3	6.0	2.6	98.4	
4	D 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	6.3	4.8	1.7	40.0	
5	F 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	9.5	8.2	2.8	174.5	
6	D 1 3	X 1	細片	ホルンフェルス	6.8	4.7	1.5	41.4	
7	D 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	6.9	5.3	2.1	72.7	
8	E 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	4.3	3.2	1.6	20.8	
9	F 1 2	X 1	細片	ホルンフェルス	4.9	3.1	1.1	17.5	
10	E 1 3	X 1	細片	ホルンフェルス	5.9	5.9	1.7	51.3	
11	F 1 5	X	細片	ホルンフェルス	4.3	1.9	0.7	4.3	
12	F 1 2	X	細片	ホルンフェルス	4.8	2.2	0.8	6.8	
13	D 1 2	X	細片	ホルンフェルス	9.1	7.0	1.7	128.0	
14	F 1 1	X	細片	ホルンフェルス	5.2	4.6	1.3	20.2	
15	H 1 3	X	細片	ホルンフェルス	7.1	5.5	1.9	52.1	
16	D 1 3	X	細片	ホルンフェルス	6.8	6.4	1.4	57.8	
17	F 1 1	X	細片	ホルンフェルス	5.1	5.0	1.5	36.9	
18	D 1 3	X	細片	ホルンフェルス	6.0	4.0	1.3	35.6	
19	D 1 3	X	細片	ホルンフェルス	5.9	4.0	1.8	24.6	
20	F 1 2	X	細片	ホルンフェルス	4.9	3.7	1.8	24.7	
21	H 1 3	X	細片	ホルンフェルス	5.0	2.9	1.3	10.9	
22	E 1 1	X	細片	流紋岩	4.2	2.6	1.3	12.7	
23	F 1 7	VII	細片	チャート	4.8	4.1	1.9	35.7	
24	F 1 7	VII	細片	チャート	3.9	2.6	1.3	10.5	
25	G 1 7	VII	細片	ホルンフェルス	8.5	5.3	2.0	71.5	
26	F 1 1	VII	細片	ホルンフェルス	4.2	3.1	0.8	7.2	
27	F 1 7	VII	細片	ホルンフェルス	5.8	5.2	1.3	33.5	
28	F 1 2	VII	細片	ホルンフェルス	6.4	3.1	1.3	21.6	
29	F 1 5	VII	細片	ホルンフェルス	4.9	4.1	0.9	13.9	
30	E 1 3	VII	細片	ホルンフェルス	5.8	4.0	1.5	22.1	
31	F 1 2	VII	細片	ホルンフェルス	1.9	1.3	0.6	1.0	
32	E 1 3	VII	細片	ホルンフェルス	1.3	1.3	0.5	0.7	
33	F 1 6	VII	細片	ホルンフェルス	5.3	3.8	1.5	30.5	
34	F 1 1	VII	細片	ホルンフェルス	5.9	4.8	2.0	26.5	
35	G 1 6	VII	細片	ホルンフェルス	4.2	3.6	1.3	19.2	
36	D 1 3	VII	細片	ホルンフェルス	6.1	4.4	1.5	37.0	
37	G 1 6	VII	細片	ホルンフェルス	4.9	2.9	1.7	14.2	
38	G 1 6	VII	細片	ホルンフェルス	4.5	2.3	0.9	7.7	
39	F 1 6	VII	細片	流紋岩	1.3	2.2	0.5	0.8	
40	G 1 6	VII	細片	流紋岩	3.0	2.4	1.1	4.6	
41	F 1 6	VII	細片	流紋岩	3.2	3.7	0.9	6.9	
42	F 1 8	VII	細片	流紋岩	1.8	2.8	0.7	2.9	
43	F 1 8	VII	細片	流紋岩	1.9	1.1	0.3	0.6	
44	G 1 1	VI	細片	黒曜石	1.2	1.0	0.2	0.2	
45	F 1 7	VI	細片	チャート	6.5	5.4	2.5	92.8	
46	F 1 2	VI	細片	ホルンフェルス	2.4	1.4	0.4	0.9	
47	G 1 1	VI	細片	ホルンフェルス	2.5	3.3	0.7	3.7	
48	E 1 3	VI	細片	ホルンフェルス	4.2	2.5	1.3	8.9	
49	D 1 4	VI	細片	ホルンフェルス	4.9	2.7	0.8	9.1	
50	G 1 1	VI	細片	流紋岩	2.6	1.3	0.8	1.6	
51	G 1 3	VI	細片	流紋岩	2.0	1.2	0.8	1.4	
52	H 1 2	VI	細片	流紋岩	3.0	1.5	0.5	1.5	
53	G 1 1	VI	細片	流紋岩	2.8	1.5	0.6	2.2	
54	G 1 1	VI	細片	流紋岩	1.9	1.4	0.5	1.4	
55	G 1 1	VI	細片	流紋岩	3.0	1.2	0.8	1.6	
56	G 1 1	VI	細片	流紋岩	2.3	2.1	0.5	1.4	
57	G 1 1	VI	細片	流紋岩	2.0	1.5	0.4	1.0	
58	G 1 6	VI	細片	流紋岩	2.5	1.7	0.6	2.0	
59	F 1 0	VI	細片	流紋岩	3.9	2.4	0.9	5.9	
60	不明	VI	細片	流紋岩	3.2	2.2	0.6	3.0	
61	F 1 1	V	細片	ホルンフェルス	3.0	1.8	0.7	2.4	
62	F 1 1	V	細片	ホルンフェルス	3.7	1.7	1.1	6.2	

※旧石器時代の遺物は全てグリッド一括で取り上げている。

第3表 実測図「未掲載」旧石器計測表2

整理番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
63	G 1 2	V	剥片	流紋岩	3.8	1.8	0.7	3.5	
64	G 1 2	V	剥片	流紋岩	3.0	1.3	0.7	2.3	
65	G 1 2	V	剥片	流紋岩	3.0	2.0	0.7	3.0	
66	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.0	1.8	0.4	1.4	
67	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.0	2.2	0.5	1.8	
68	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.5	2.0	1.0	4.7	
69	F 1 2	V	剥片	流紋岩	3.7	2.8	0.8	4.8	
70	G 1 4	V	剥片	流紋岩	1.8	1.8	0.3	0.8	
71	G 1 3	V	剥片	流紋岩	4.0	3.0	0.8	9.0	
72	G 1 3	V	剥片	流紋岩	1.2	1.2	0.3	0.5	
73	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.4	1.9	0.4	1.3	
74	G 1 4	V	剥片	流紋岩	3.7	3.0	1.0	8.3	
75	H 1 3	V	剥片	流紋岩	2.1	1.2	0.4	1.3	
76	G 1 4	V	剥片	流紋岩	3.8	2.7	1.0	7.1	
77	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.8	2.4	0.4	3.4	
78	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.3	0.9	0.5	0.6	
79	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.7	2.2	0.5	1.9	
80	G 1 2	V	剥片	流紋岩	1.6	1.7	0.4	1.2	
81	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.3	1.9	0.4	1.5	
82	F 1 3	V	剥片	流紋岩	1.7	1.3	0.2	0.6	
83	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.1	2.3	0.5	1.4	
84	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.3	1.8	0.5	1.9	
85	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.3	0.6	2.2	
86	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.6	3.3	1.0	5.0	
87	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.6	2.1	1.0	4.5	
88	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.7	2.5	0.7	2.4	
89	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.4	1.7	0.4	1.1	
90	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.0	2.5	0.7	3.5	
91	F 1 2	V	剥片	流紋岩	3.2	1.9	1.2	3.6	
92	G 1 1	V	剥片	流紋岩	3.6	2.0	1.0	5.0	
93	F 1 1	V	剥片	流紋岩	4.0	1.5	1.3	6.8	
94	F 1 2	V	剥片	流紋岩	3.0	2.1	1.0	4.5	
95	F 1 2	V	剥片	流紋岩	1.9	1.4	0.8	1.2	
96	F 1 2	V	剥片	流紋岩	2.3	1.1	0.7	1.2	
97	E 1 2	V	剥片	流紋岩	4.3	2.6	0.9	9.1	
98	F 1 1	V	剥片	流紋岩	1.4	1.0	0.5	0.6	
99	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.0	0.4	1.6	
100	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.0	0.7	1.6	
101	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.5	2.6	1.5	7.5	
102	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.1	2.7	1.0	6.9	
103	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.9	3.3	1.0	10.8	
104	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.5	1.8	0.7	3.5	
105	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.0	0.9	4.7	
106	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.2	1.6	1.2	4.3	
107	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.3	1.4	0.6	1.6	
108	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.1	3.5	0.8	3.8	
109	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.0	2.0	0.5	1.8	
110	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.0	0.7	1.8	
111	F 1 1	V	剥片	流紋岩	1.8	0.9	0.5	0.4	
112	F 1 1	V	剥片	流紋岩	1.4	2.3	0.4	1.0	
113	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.6	1.5	0.9	2.7	
114	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.1	1.9	0.7	2.5	
115	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.3	2.5	0.8	3.3	
116	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.7	1.5	0.7	1.9	
117	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.9	1.2	0.6	1.7	
118	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.5	2.5	0.8	5.8	
119	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.4	2.0	0.5	1.5	
120	F 1 1	V	剥片	流紋岩	4.7	2.0	0.9	6.5	
121	F 1 1	V	剥片	流紋岩	4.0	2.1	1.2	6.6	
122	F 1 1	V	剥片	流紋岩	5.3	2.4	1.3	10.1	
123	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.4	2.0	0.5	2.3	
124	F 1 4	V	剥片	流紋岩	4.6	4.4	1.6	26.9	

※旧石器時代の遺物は全てグリッド一括で取り上げている。

第4表 実測図「未掲載」旧石器計測表3

整理番号	グリッド	層位	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
125	F 1 4	V	剥片	流紋岩	49	5.4	1.5	417	
126	E 1 5	V	剥片	流紋岩	19	1.7	0.5	1.2	
127	E 1 3	V	剥片	流紋岩	12	1.0	0.7	0.8	
128	G 1 2	V	剥片	流紋岩	3.0	1.3	0.7	2.7	
129	E 1 6	V	剥片	流紋岩	3.6	3.4	1.5	14.0	
130	E 1 3	V	剥片	流紋岩	3.5	2.5	1.0	6.9	
131	E 1 3	V	剥片	流紋岩	2.2	2.5	0.7	4.0	
132	E 1 6	V	剥片	流紋岩	3.2	2.1	0.7	2.7	
133	E 1 6	V	剥片	流紋岩	3.8	2.2	0.8	4.6	
134	D 1 3	V	剥片	流紋岩	2.4	2.7	0.8	4.7	
135	D 1 4	V	剥片	流紋岩	2.2	2.7	0.8	3.4	
136	D 1 4	V	剥片	流紋岩	2.1	1.5	0.6	1.4	
137	D 1 4	V	剥片	流紋岩	1.2	1.8	0.5	0.5	
138	F 1 7	V	剥片	流紋岩	2.6	1.2	0.7	1.6	
139	F 1 7	V	剥片	流紋岩	4.4	3.6	1.9	25.8	
140	E 1 7	V	剥片	流紋岩	2.6	2.1	0.9	4.7	
141	D 1 5	V	剥片	流紋岩	4.8	3.5	1.1	14.9	
142	D 1 4	V	剥片	流紋岩	2.0	1.3	0.6	1.0	
143	D 1 4	V	剥片	流紋岩	4.1	1.9	0.6	4.8	
144	D 1 3	V	剥片	流紋岩	3.5	2.5	0.6	4.1	
145	G 1 6	V	剥片	流紋岩	3.5	3.1	0.8	7.5	
146	E 1 6	V	剥片	流紋岩	4.1	3.6	0.7	6.9	
147	F 1 5	V	剥片	流紋岩	8.3	3.2	1.5	43.3	
148	E 1 6	V	剥片	流紋岩	2.4	2.8	0.8	4.5	
149	F 1 5	V	剥片	流紋岩	2.6	1.5	0.7	2.1	
150	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.3	2.0	0.7	4.0	
151	G 1 3	V	剥片	流紋岩	2.0	3.1	0.6	2.0	
152	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.0	1.4	0.6	2.0	
153	G 1 4	V	剥片	流紋岩	3.1	1.5	0.5	2.1	
154	G 1 1	V	剥片	流紋岩	3.5	1.7	0.6	1.9	
155	G 1 3	V	剥片	流紋岩	3.0	2.2	0.8	3.9	
156	G 1 2	V	剥片	流紋岩	3.0	1.3	0.5	1.3	
157	F 1 5	V	剥片	流紋岩	2.9	1.9	0.7	3.2	
158	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.9	3.4	0.8	6.8	
159	F 1 1	V	剥片	流紋岩	3.6	1.3	1.2	3.6	
160	G 1 3	V	剥片	流紋岩	2.1	1.1	0.8	0.7	
161	F 1 1	V	剥片	流紋岩	1.3	1.0	0.6	0.7	
162	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	1.8	0.7	2.8	
163	G 1 2	V	剥片	流紋岩	2.6	1.6	0.8	2.1	
164	F 1 2	V	剥片	流紋岩	1.1	1.3	0.3	0.4	
165	F 1 2	V	剥片	流紋岩	1.4	1.2	0.3	0.4	
166	F 1 5	V	剥片	流紋岩	4.2	7.0	1.4	42.6	
167	G 1 1	V	剥片	流紋岩	4.6	1.1	1.0	5.0	
168	F 1 1	V	剥片	流紋岩	4.0	1.0	1.0	3.3	
169	F 1 0	V	剥片	流紋岩	2.1	2.0	0.6	2.1	
170	F 1 0	V	剥片	流紋岩	1.9	1.5	0.6	1.7	
171	F 1 0	V	剥片	流紋岩	2.0	1.2	0.4	0.8	
172	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.5	2.5	0.8	4.0	
173	F 1 2	V	剥片	流紋岩	1.8	2.3	0.7	2.2	
174	F 1 1	V	剥片	流紋岩	1.2	0.9	0.3	0.3	
175	F 1 1	V	剥片	流紋岩	2.3	2.1	0.7	2.1	
176	G 1 1	V	剥片	流紋岩	2.3	1.5	0.8	1.7	
177	F 1 2	V	剥片	流紋岩	3.2	1.1	0.8	2.4	
178	G 1 0	V	剥片	流紋岩	2.0	1.7	0.6	1.4	
179	D 1 3かE 1 3	V	剥片	流紋岩	2.5	3.1	0.8	5.2	
180	E 1 3	V	剥片	流紋岩	2.5	1.3	0.7	1.1	
181	不明	V	剥片	流紋岩	3.9	2.5	1.3	11.3	
182	不明	V	剥片	流紋岩	2.6	1.8	1.3	3.3	
183	不明	V	剥片	流紋岩	2.4	1.4	0.5	1.2	
184	不明	V	剥片	流紋岩	1.5	2.0	0.2	0.7	

※旧石器時代の遺物は全てグリッド一括で取り上げている。

第2節 縄文時代草創期～

早期の遺構と遺物

(1) 調査の概要

鬼界アカホヤ火山灰(以下K-Ahと略す)上の精査(弥生時代と中世が対象)が終了した後、K-Ahを重機で除去し、V層(MB0層)とVI層(ML1上部相当)で縄文時代草創期～早期を対象とした調査(面積5,400m²)を実施した。

その結果、遺構は、V層で散礫・集石遺構46基、VI層で集石遺構17基・炉穴3基・土坑2基、VII層で炉穴38基・土坑16基が検出された。

また、遺物は、集石遺構・炉穴・土坑の各遺構埋土中と、V層下部の包含層中より、縄文時代草創期～早期にかけての土器・石器が出土した。

本節では、以下、縄文時代草創期～早期にかけての調査の結果を記す。

(2) 縄文時代草創期～早期の環境

当該期における遺跡の古地形は、湯牟田溜池に隣接するB区東南隅部分は湿地帯の一部で、そこから北西に向かって緩やかな上り勾配の斜面であったと思われる。

B区東南隅は、現在では湿地帯ではないが、当遺跡の発掘作業中は、その方向から北西方向に向かって強風が吹くことが多々あった。当遺跡の炉穴の設置方向も、北西向きに造られているものが多く、そのことから考えると、縄文時代も似たような風向が多かったことが考えられる。

後述のように、集石遺構内部や炉穴底部で出土した炭化材3点を自然科学分析(樹種同定)にかけた結果、ともにコナラ属コナラ節のブナ科の植物と同定された。遺跡周辺の植生を知る一つの手がかりになると考えられる。

(3) 縄文時代草創期～早期の遺構

調査の概要で述べた通り、V層で散礫と集石遺構、VI層で集石遺構、炉穴、土坑、VII層で炉穴、土坑が検出された。以下、上の層から順に、遺構の種類ごとに検出状況等を示す。

【散礫】(第11図)

IV層(K-Ah)を除去した後、V層掘削を進めた結果、V層下部で、B区南側中央部からA区南西部にかけて散礫が広がっていることが確認された。

散礫の密度は、B区南側が最も密で、途中で途切れながら、北側のA区に向かってだんだんと薄くなっていく傾向が見える。構成礫は、尾鈴山酸性岩類、砂岩、ホルンフェルスの3種類が大半であり、一部、他の種類が混じる。

【集石遺構-V層下部検出】(第13図～第28図)

散礫中(V層下部)には、A区で9基、B区で37基の集石遺構が点在しており、そのうちA区の5基、B区の15基は掘り込みを有する。配石はA区の1基(SI3)のみで検出された。

本遺跡の集石遺構は、検出面の石の密集度ということで見ると、

- ◇A…検出面の石の密度が薄い
- ◇B…検出面の石の密度が密
- ◇C…検出面の石の密度がかなり密

という3つのタイプに分類できる。

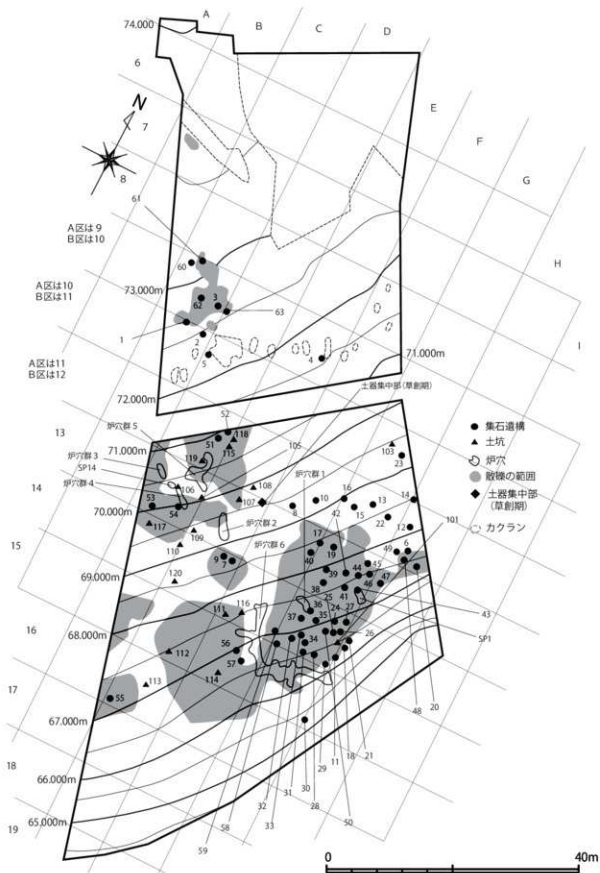
また、掘り込みの有無、掘り込みの深さとういう点から見ると、

- ◇1…掘り込みを有しない
- ◇2…掘り込みを有するが浅い
(0.2m未満)
- ◇3…比較的、深い掘り込みを有する
(0.2m以上)
- ◇4…かなり深い掘り込みを有する
(0.5m以上)

という4つのタイプに分類できる。

上記の基準に従って、本遺跡出土V層の集石遺構46基を分類すると以下のようになる。

- ◇A-1類 … 12基
(SI9・SI10・SI12・SI15・SI16・SI20・SI31・SI41・SI60・SI61・SI62・SI63)
- ◇A-2類 … 1基
(SI35)
- ◇B-1類 … 14基
(SI7・SI21・SI22・SI27・SI30・SI38・SI39・SI42・SI44・SI49・SI51・SI53・SI55・SI56)
- ◇B-2類 … 10基



第 11 図 縄文時代遺構分布図 (1/600)

(SI1・SI2・SI3・SI4・SI18・SI19・SI24・SI36・SI43・SI57)

◇B-3類 … 7基

(SI5・SI6・SI8・SI17・SI25・SI28・SI52)

◇C-2類 … 2基

(SI14・SI50)

形態的には、石の密集度がある程度あって、掘り込みを有しない集石遺構（B-1類）が一番多い。

また検出面の石の密集度が薄いAタイプの場合、掘り込みを有しないものがほとんどである。なお配石を有するSI3はB-2類に該当する。

構成礫をみると、こぶし大の石が大半であり、そのほとんどが被熱している。石材を見ると、多くの集石遺構では尾鈴山酸性岩類が一番の比重を占めている。ホルンフェルスと砂岩も多く、この3種類で、多くの集石遺構で、石全体の重量の9割以上を占めている。

なおV層出土の集石遺構では、B-2類にあたるSI19の掘り込み上部で炭化物が出土した。C14年代測定にかけた結果、BC7,140という測定値を得た。また樹種同定では、コナラ属コナラ節(?)という同定結果を得ている。

【集石遺構-VI層上面検出】(第13図～28図)

V層下部の散礫を除去した後、VI層上面でそろえて遺構精査を実施した結果、B区で17基の集石遺構を検出した。そのすべてが掘り込みを有しており、V層検出のものよりも深い傾向がある。0.2m以上の深さがある掘り込みを有するものが合計で8基あり、そのうち6基(SI32・SI33・SI40・SI46・SI47・SI59)で配石が確認された。

前述の基準に従って、VI層検出の集石遺構17基を分類すると次のようになる。

◇A-2類 … 3基

(SI11・SI35・SI37)

◇A-3類 … 1基

(SI46)

◇A-4類 … 2基

(SI40・SI47)

◇B-2類 … 6基

(SI23・SI26・SI29・SI34・SI45・SI48)

◇B-3類 … 5基

(SI32・SI33・SI54・SI58・SI59)

検出面での石の密集度が濃いBタイプの集石遺構のほうが多いが、V層下部では認められなかったA-3類(SI46)とA-4類(SI40・SI47)の形態が目される。

A-3類とA-4類の集石遺構は、実測図面を見ても分かる通り、検出面の石の密集度はまばらであるが、掘り込みの下のほうで石の密集度が増える傾向がある。特にSI40とSI47は掘り込みの深さが0.5mを超えており、本遺跡の中では特筆されるべきものである。

VI層上面検出の集石遺構の構成礫も、V層下部検出のものと同様の傾向を示しており、V層とVI層のもので構成礫の差異は見られなかった。

なお、炭化物がSI11・SI32・SI40・SI46・SI48から出土しており、各遺構から1点づつC14年代測定にかけている。

結果は、A-2類のSI11のものがBC8,440、A-3類のSI46でBC7,190、A-4類のSI40でBC7,080、B-2類のSI48でBC8,300、B-3類のSI32ではBC9,280となっている。

C14年代測定の結果で見える限りにおいては、VI層上面検出のB-3類(SI32)出土炭化物が、約11,000年以上前の年代を示しており、最も古い。逆にV層下部検出B-2類(SI19)の炭化物よりも新しい年代を示したのは、VI層上面検出A-4類(SI40)出土炭化物であり(約9,000年前)、本遺跡で特に深い掘り込みをもつ集石遺構(A-4類)の年代が、最も新しい時期になる可能性もある。

また、A-4類のSI40の炭化材は樹種同定にもかけているが、V層検出のSI19の炭化材と同じく、コナラ属コナラ節という同定結果を得ている。

【炉穴】(第29図～第36図)

斜面上部にあたるA区では検出されなかったが、B区VI層上面で3基、B区VII層上面で38基、合計で41基の炉穴が検出された。形態は基本的に長楕円形を呈しているが、ブリッジは全て遺存していなかった。すべての炉穴で、埋土は非常に硬く、多少なりとも埋土に小礫(こぶしの半分程度)を含んでいる。

なお検出面で、周囲の地山との境界がはっきりし

ていなかったため、遺構検出状況の写真撮影は実施していない。

Ⅵ層上面で検出した炉穴は、単独のもの1基（SP1）、切り合いにより群をなすもの1群（炉穴群2）である。ともに北西向きに掘り込まれている。

SP1は、本遺跡で2基しかない単独立地の炉穴の一つであり、長径は2.5mもある。焼土の残り具合も良く、炭化物が4点検出された。炭化物の1点をC14年代測定にかけた結果、BC7,460という測定値を得た。

炉穴群2は、SP5とSP6の2基から構成され、南側のSP6では焼土が残存していた。遺構断面の土層堆積状況から、北側のSP5が南側のSP6を切る状態が確認された。

炭化物は2基から4点出土した。そのうち、SP6で出土した炭化物の1点をC14年代測定にかけた結果、SP1よりも古いBC8,300という測定値を得た。また、樹種同定によると、炭化材の種類はコナラ属コナラ節と同定された。

Ⅶ層上面で検出した炉穴は、単独のもの1基（SP14）、切り合いにより群をなすものが5群（炉穴群1・炉穴群3・炉穴群4・炉穴群5・炉穴群6）である。

単独の炉穴SP14は、1.15mの長径であり、本遺跡の炉穴の中では小さめの部類である。遺物も出土せず、焼土も残存していなかった。炉穴群3（SP4・SP17）・炉穴群4（SP15・SP16）とともに、狭い間隔でほぼ一直線上に北西向きに設置されていることから、SP14・炉穴群3・炉穴群4の合計5基は、検出面の上位層では連続した切り合いを示していた可能性が高い。なお、この5基では、遺物・炭化物は出土せず、焼土は、SP15・SP16・SP17で確認された。

炉穴群1は、SP12とSP13の2基から構成される。切り合いの先後関係は不明である。焼土は南側のSP13で遺存しており、2基ともに北西向きに掘り込まれている。合計3点の炭化物が出土している。

炉穴群5は、SP2・SP3・SP7・SP8・SP9・SP10・SP11の7基が切り合う。切り合いの先後関係は不明である。焼土は7基全てで残存しているが、SP2は炉部の位置が斜面上方ではない可能性もある。遺物・炭化物は出土しなかった。

炉穴群6は、SP18～SP41の24基が切り合うが、それぞれの先後関係は不明である。焼土はSP40とSP41の2基以外ではすべて残存しているが、炉部の位置が、斜面上方に配置されていないものも多い（SP22・SP24・SP25・SP28・SP29・SP33）。炭化物が合計で11点出土した。

なお、炉穴群6出土の炭化物については、その内から南西側立地のSP19、中央立地のSP26、北西側立地のSP35から1点ずつ選んで、合計3点をC14年代測定にかけており、SP19とSP26でBC8,260、SP35でBC8,220という測定値を得ている。C14年代測定値を見る限りは、炉穴群6は、比較的短期間で造営されたものと言える。

【土坑】（第37図～第39図）

B区Ⅵ層上面でSC101・SC103の2基、また、B区Ⅶ層上面では、SC105～SC120の16基、合計18基が検出された。円形プランが6基、楕円形プランが12基である。

埋土は、炉穴に比較すると軟らかく、多少なりとも小礫（こぶしの半分以下）を含むが、SC103では特に埋土中の小礫が多い特徴があった。長径は、どれも0.8m～1.6mほど、深さは0.1m～0.4mほどである。

18基中、5基（SC107・SC111・SC116・SC117・SC120）で焼土が検出され、2基（SC113・SC120）で炭化物が出土した。

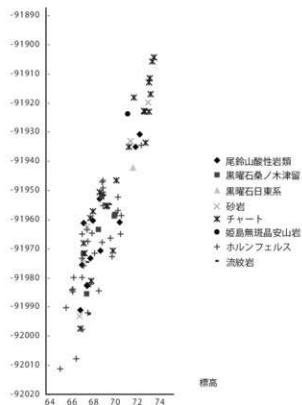
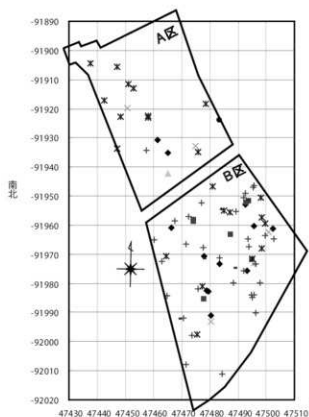
なおSC113出土の炭化物をC14年代測定にかけた結果、BC6,820という測定値を得ており、集石遺構や炉穴出土の炭化物よりも、新しい時期のものであるという結果を得た。

（4）縄文時代草創期～早期の遺物

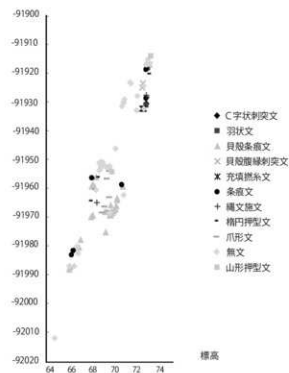
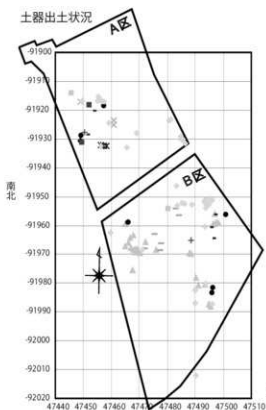
本遺跡では、前述の通り、集石遺構・炉穴・土坑の各埋土中とⅤ層下部の包含層中で、縄文土器や石器の遺物が出土した。ただし、縄文時代草創期遺物と早期の遺物は、層位的な上下関係は見られず、ともにⅤ層下部で混在していた。

以下、遺構から出土した縄文土器、石器、次に包含層から出土した縄文土器、石器の順に概要を示していく。

石器出土状況散布図



土器出土状況



第12図 縄文時代遺物出土状況図

【遺構出土の草創期土器】(第40図50・51)

50は、SI28から出土した爪形文土器、51は、SC115から出土した降帯文土器である。50は掘り込み中の南東部から、51は北西部から出土したが、ともに出土位置が遺構埋土上部か下部かは不明である。

【遺構出土の早期土器】(第40図52～59)

52は、SP2、53は、SP21の遺構底部に張り付いた状態で出土した貝殻条痕文土器である。54はSP25で出土した条痕文土器で、遺構埋土中での出土である。

55はSC101から出土した縄文施文を有する土器、56はSC107から出土した山形押型文土器で、胴部に突帯が施されている。57はSC108から出土した山形押型文土器で、口唇に刻み目を有する。58はSC110から出土した口唇に刻み、口縁に沈線をもつ土器、59はSC111から出土した山形押型文土器である。

55～59は、ともに土坑埋土中からの出土であるが、どの位置から出土したかは不明である。

【遺構出土の石器】(第41図60～63)

60はSI16から出土した削器、61はSI43から出土した小さめの台石である。ともに集石遺構埋土中の礫に混じって出土した。62はSP5出土の石斧、63はSC103出土の削器であり、ともに埋土中の小礫とともに出土した。60～63ともに、具体的な出土位置は不明である。

【包含層出土の草創期土器】(第41図64・65、第42図66～72)

64～72は、ともにV層から出土した縄文時代草創期の土器である。

65は、爪形文を有する草創期土器で、本遺跡出土の草創期土器の中では、全体の器形が推し量れる唯一の資料である。本遺跡B区の北側中央部の土器集中区(便宜的に、ここで出土した土器はSC100の番号を割り当てた)で出土した。65とは別個体の64の刻み目貼り付け降帯を有する爪形文土器もここで出土している(出土状況図は49頁の第35図を参照)。

66～69は、刻み目降帯を有する爪形文の草創期土器で、70・71は爪形文土器(同じく草創期)、72はC字状刺突文を有する草創期土器である。

【包含層出土の早期土器】(第42図73～第45図121)

73～121は全てV層出土であり、A区からB区にかけて草創期土器と混じり、散在して出土した。73～75は楕円押型文土器、76・77は山形押型文土器である。78・79は縄文施文を有する土器で、縄文施文を有する土器は、遺構出土の55と合わせて、本遺跡では3点出土した。

80・81は充填櫛糸文の土器で、塞ノ神式土器である。この形態のものはA区のみで出土した。

82・83は、羽状文を有する土器で、早期の下刺釜式土器である。82は瘤状突起があり、83は羽状文の下部に貝殻腹縁による刺突文を有する。

84・85は工具による浅い刺突文を有する土器で、ともに刺突文の下部は条痕による調整が見られる。86は、貝殻腹縁刺突文の土器、87は貝殻腹縁による押し引き施文が見られる。

88は、口縁部に2条の沈線を有しており、口唇にやや斜め気味の刻みがある。

89～100は、貝殻条痕(または条痕)による調整を有する土器である。横・斜方向への調整が目立つが、89の外全面と99の外下面部でのみ縦方向の調整が見られる。なお96～99は補修孔を有する。

101～121は無文土器である。縄文土器の種類の中では、最も数多く出土した。いずれも内外面ともに、指、または工具によるナデ調整が行われており、一部、ミガキによる調整が見られるものもある。

【包含層出土の石器】(第45図122～第55図236)

122～236は全てV層出土の石器である。122～150の29点は、打製石礫である。チャート素材にしたものが多く、125～146(145・146は赤チャート)までを占め、合計22点を数える。122・123の2点は、桑ノ木津留産の黒曜石、124は日東産の黒曜石が素材になっている。その他、147は流紋岩、148～150の3点はホルンフェルス製である。打製石礫はA区で13点、B区で16

点が出土した。

151～155は、すべてホルンフェルス製の打製石斧である。ただし155に関しては、形が他のものとは異なる有肩打製石斧である。154のみがA区で出土し、他の4点はB区出土である。

156～160は削器であり、156・157の2点が流紋岩製、158～160の3点がホルンフェルス製である。5点ともすべてB区で出土した。

161～192の32点は、礫器で、すべてB区から出土した。素材はすべてホルンフェルスである。193・194の2点は、尾鈴山酸性岩類の敲石であり、ともにB区からの出土である。

195～200の6点は、磨石であり、195のみが砂岩、それ以外は尾鈴山酸性岩類を素材としている。A区で4点、B区で2点出土した。

201は、砂岩の砥石であり、B区北端部付近で出土している。

202～210の9点は、台石である。出土状態で、使用痕を下面にして出土したものが5点(204・205・206・207・210)ある。202と205は砂岩が素材であり、その他は尾鈴山酸性岩類である。202のA区出土のものはやや小ぶりであり、他のB区出土8点は大きく、特に210は30kg近い重量がある。

211はチャート、212は流紋岩を素材とした二次加工剥片であり、211はA区中央部西側、212はB区中央部で出土した。213は流紋岩を素材とした微細剥離のある剥片でB区北西部分で出土した。

214～223の10点は剥片であり、218・220・222・223の4点がA区、他の6点がB区出土である。素材別に見ると、桑ノ木津留産黒曜石が4点、日東産黒曜石が2点、ホルンフェルスが2点、姫島産無斑晶安山岩が1点、流紋岩が1点である。

224～236の13点は石核である。224～226の3点は、桑ノ木津留産黒曜石を素材としているが、ともに外面の磨滅がはげしい。

227・228の2点は、チャートが素材で、229は砂岩、230～236の7点はホルンフェルスが素材である。黒曜石・チャートのものに比較して、砂岩・ホルンフェルスの石核は大き目のものが多い。

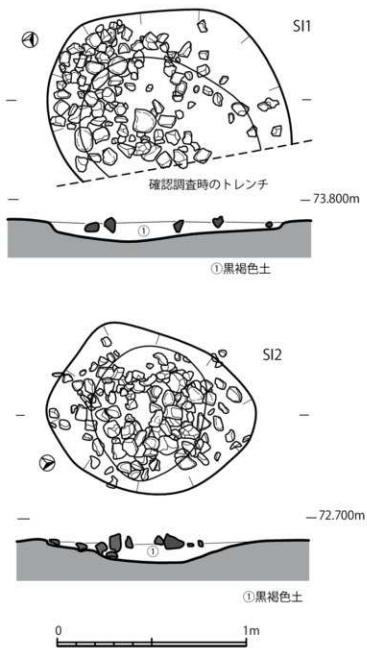
石核は、230はA区出土で、その他はB区から

の出土である。

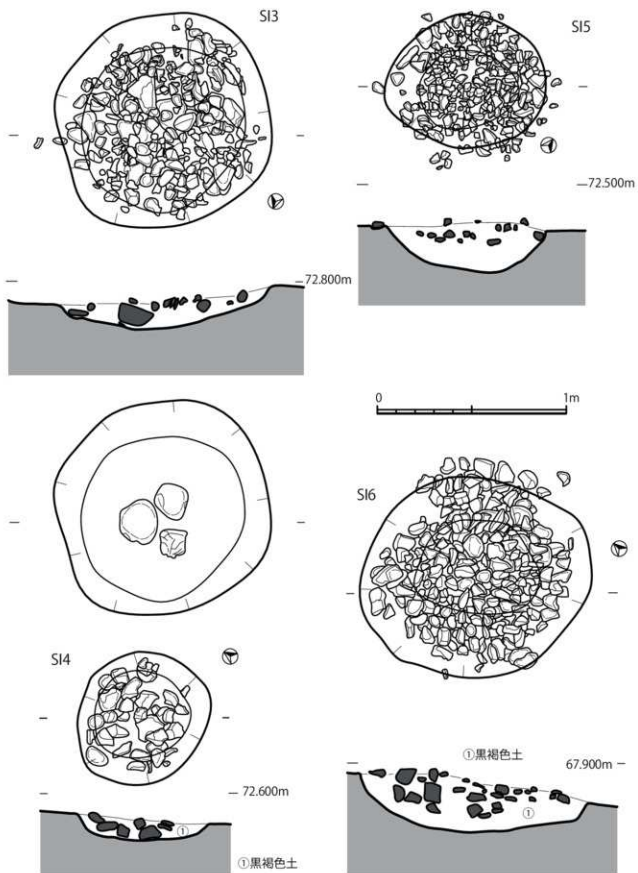
【表面採取の石器】(第55図237・238)

237は打製石礫である。素材はチャートでB区で採集した。

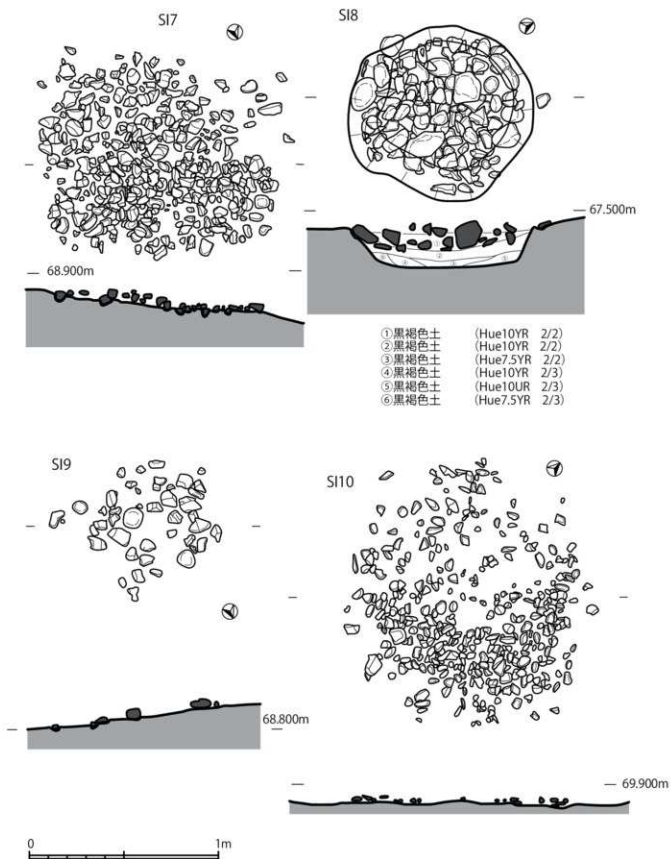
238は、桑ノ木津留産黒曜石を素材とした石核で、表面の磨滅が著しい。同じくB区で採集した。



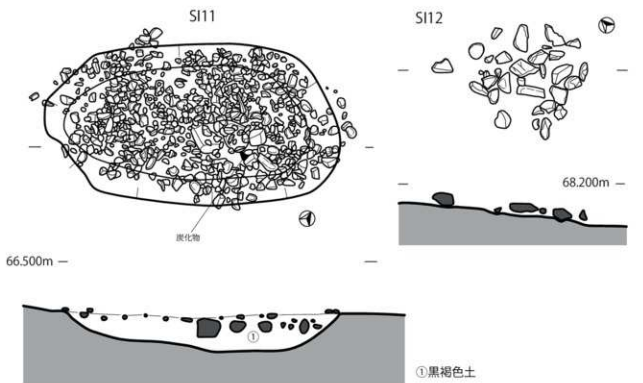
第13図 集石遺構実測図1 (1/20)



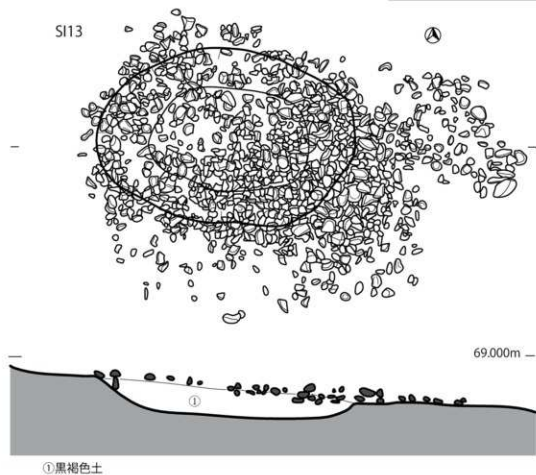
第14图 集石遺構実測図2 (1/20)



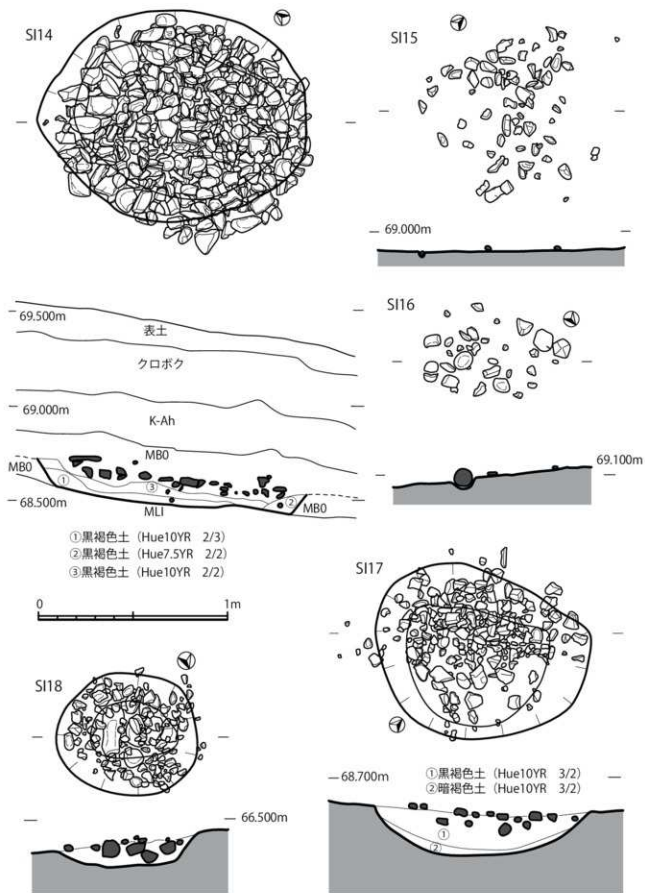
第15図 集石遺構実測図3 (1/20)



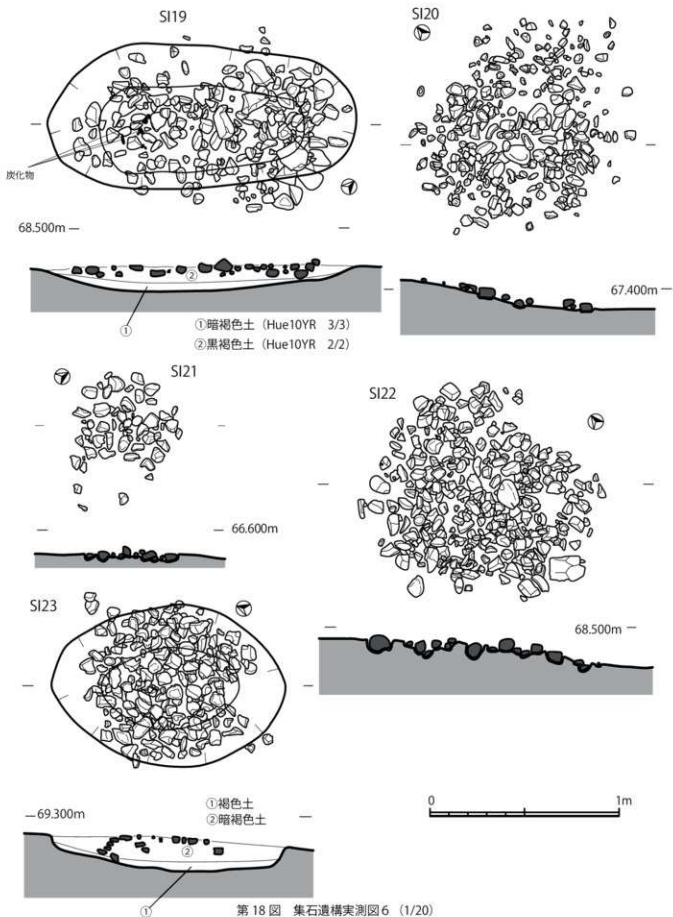
0 1m



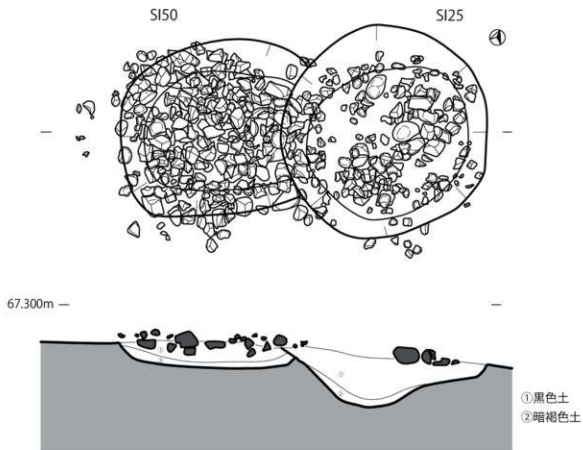
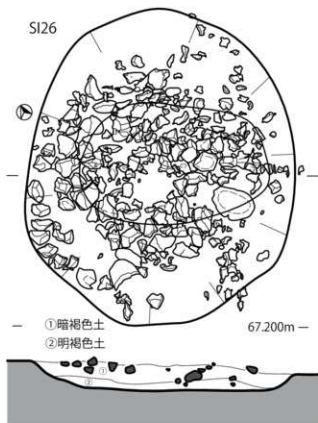
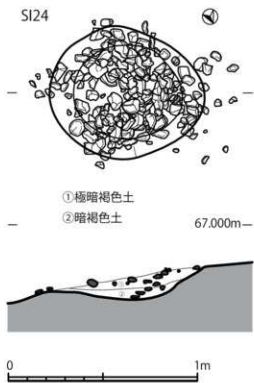
第16図 集石遺構実測図4 (1/20)



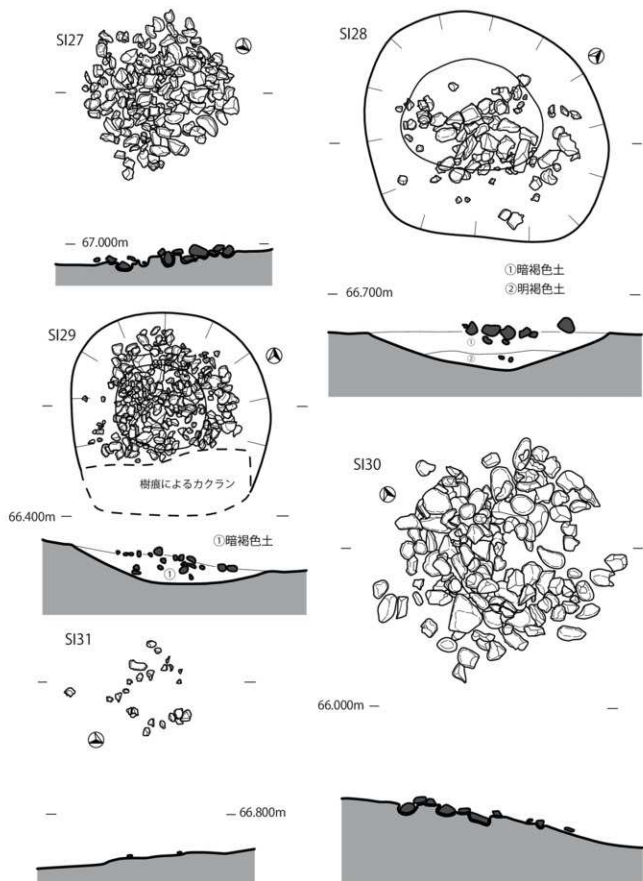
第17図 集石遺構実測図5 (1/20)



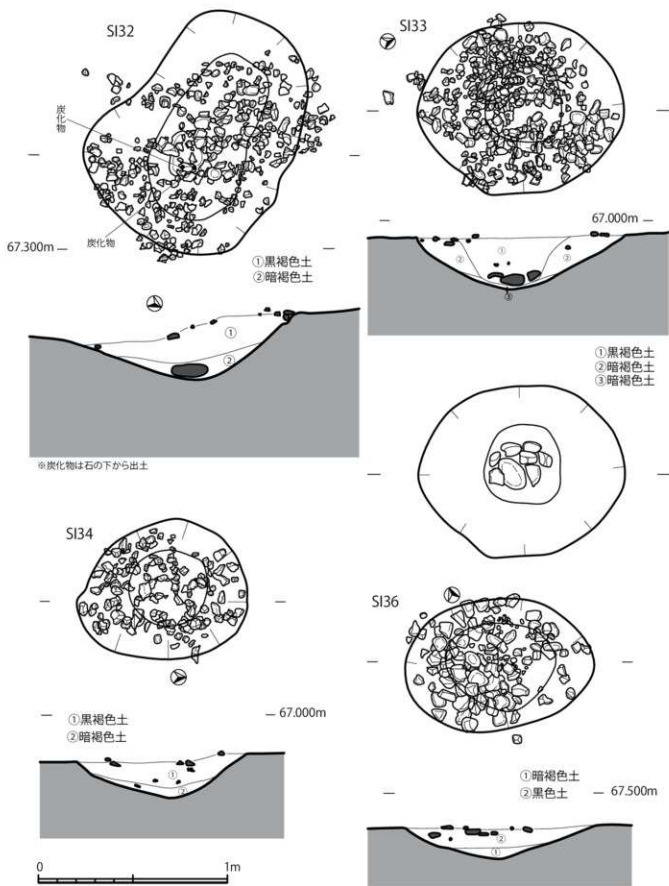
第18図 集石遺構実測図6 (1/20)



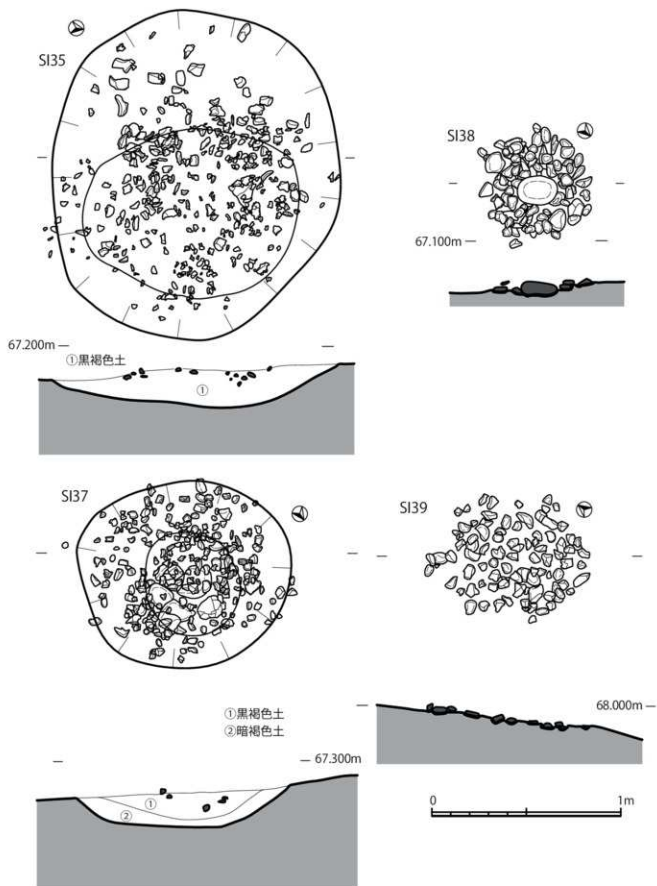
第19図 集石遺構実測図7 (1/20)



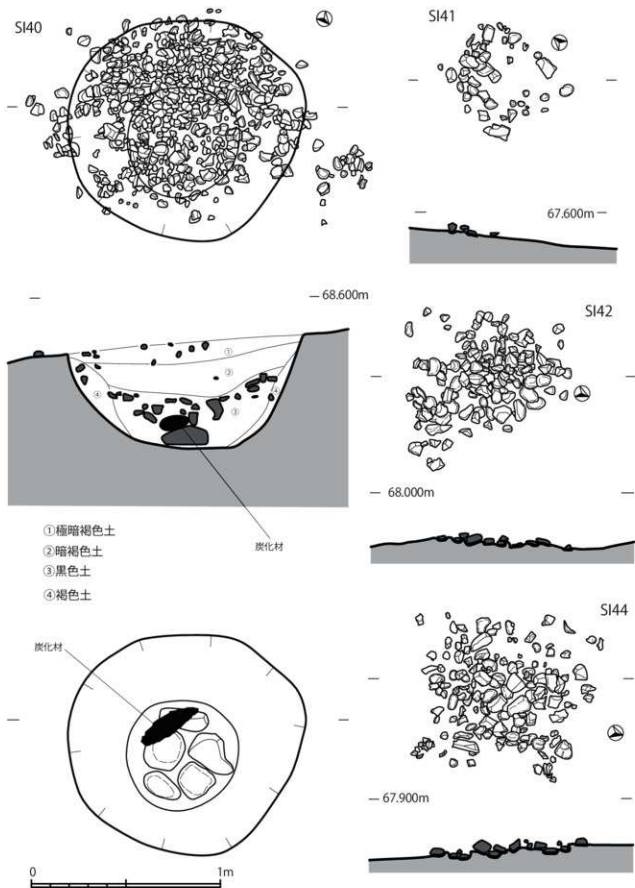
第20図 集石遺構実測図8 (1/20)



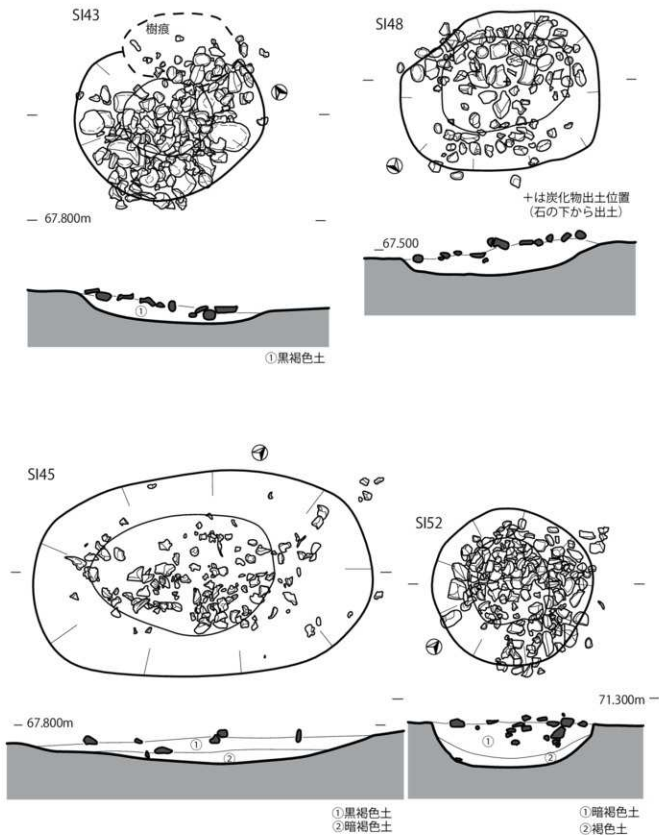
第 21 図 集石遺構実測図 9 (1/20)



第 22 图 集石遺構実測図 10 (1/20)

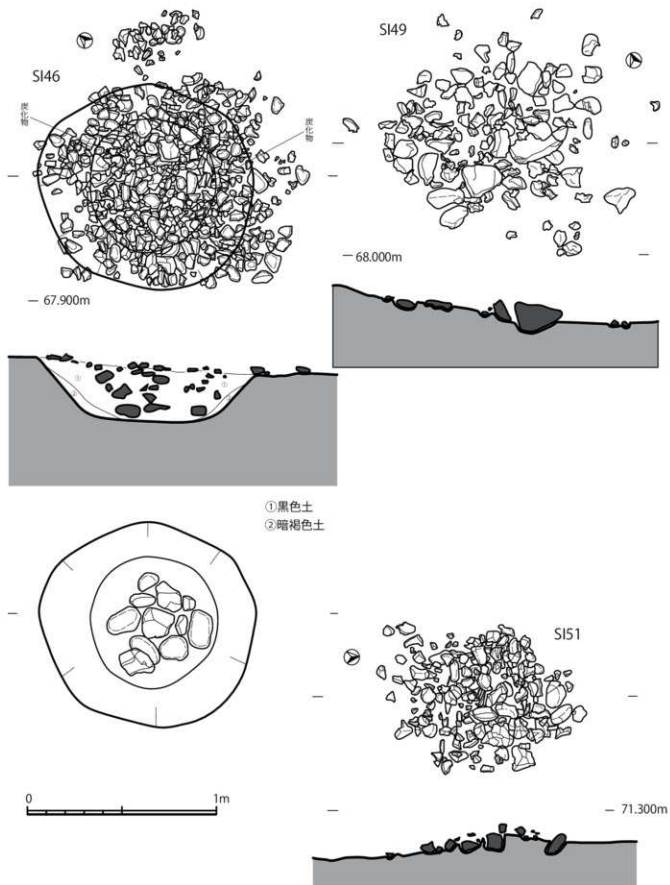


第 23 図 集石遺構実測図 11 (1/20)

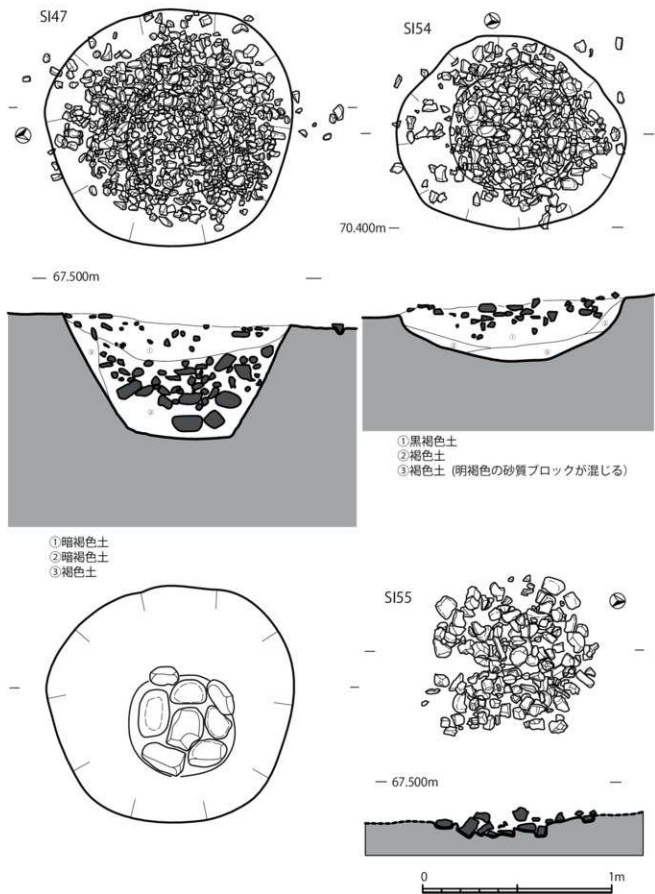


0 1m

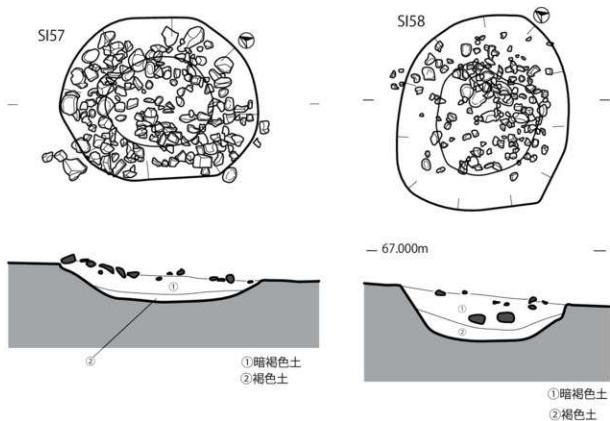
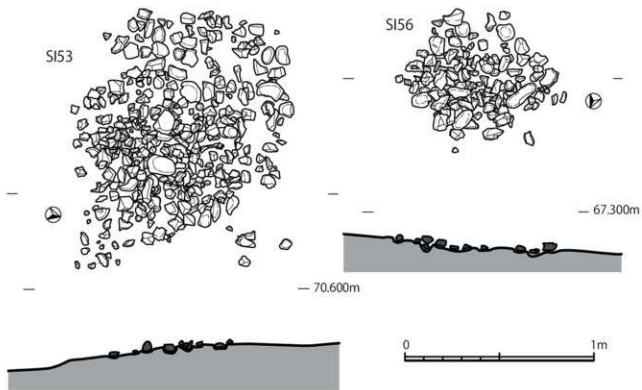
第 24 図 集石遺構実測図 12 (1/20)



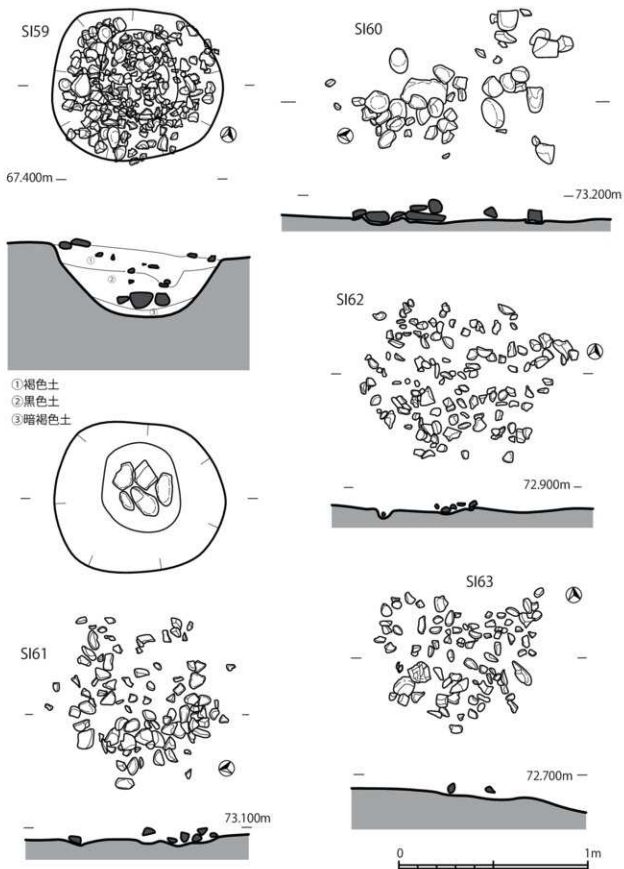
第 25 図 集石遺構実測図 13 (1/20)



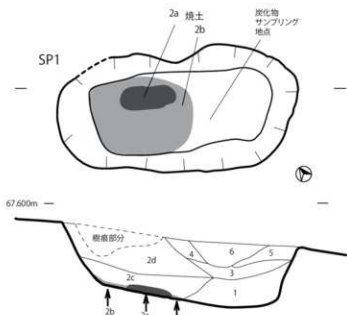
第 26 図 集石遺構実測図 14 (1/20)



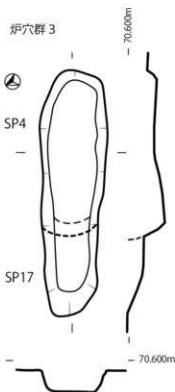
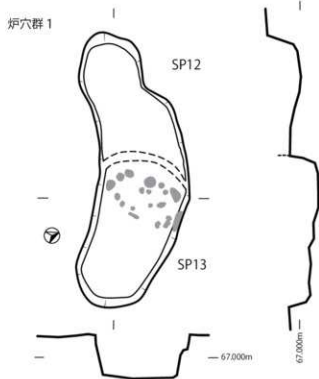
第 27 図 集石遺構実測図 15 (1/20)



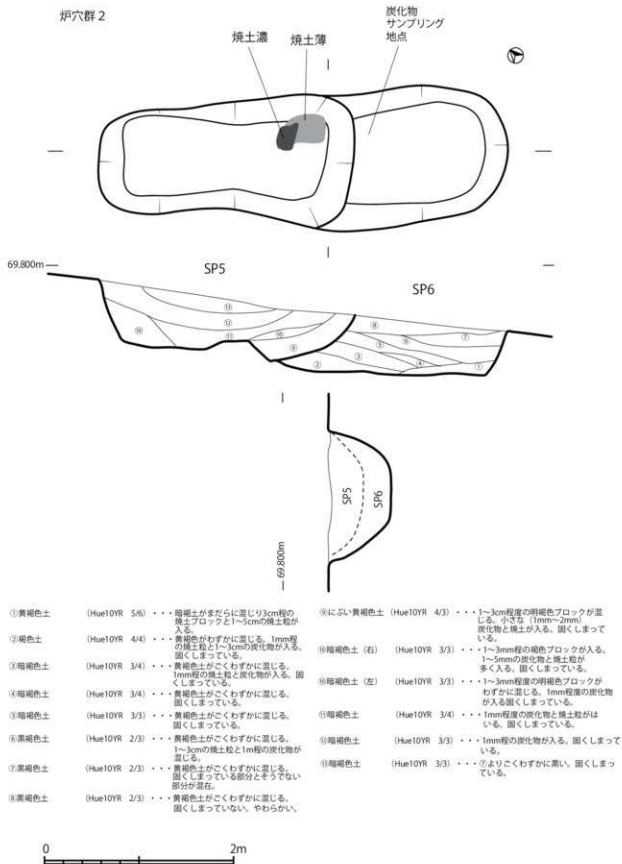
第 28 図 集石遺構実測図 16 (1/20)



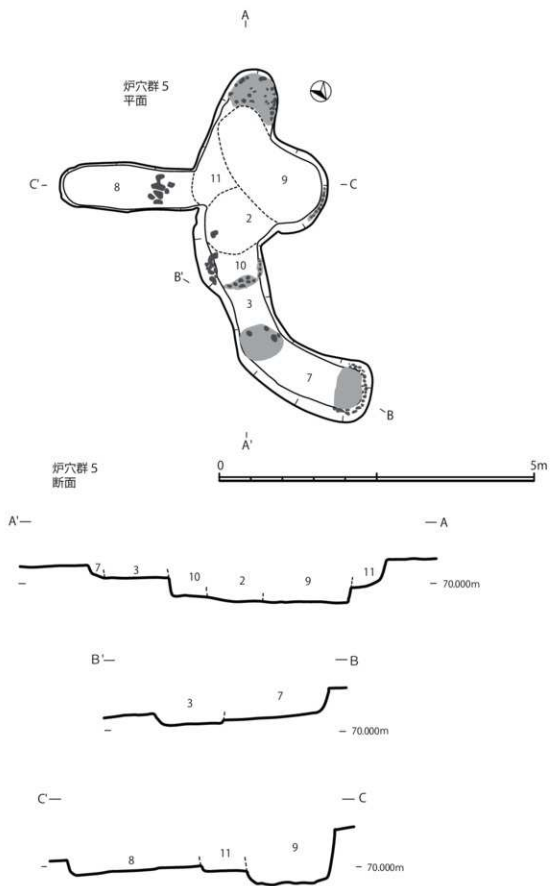
- 1 黒褐色土 (Hue10YR 3/1) ... 粘性がある。1cm程度の褐色ブロックが入る。また微細な焼土と炭化物が混じる。
- 2a 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 焼土が大量に混じる。1cm程度の褐色ブロックと褐色土がまだらに入る。微細な炭化物が入る。
- 2b 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 焼土が多く混じる。1cm程度の褐色ブロックと褐色土がまだらに入る。微細な炭化物が入る。
- 2c 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 焼土は入らない。1cm程度の褐色ブロックと褐色土がまだらに入る。微細な炭化物が入る。
- 2d 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 褐色ブロックが入らず。褐色土がまだらに入る。
- 3 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 粘性がある。1よりほんのわずかに濃い。1cm程度の褐色ブロックが1より少ないが入り微細な炭化物も混じる。
- 4 暗褐色土 (Hue10YR 3/3) ... 2よりわずかに濃い。ごくわずかに褐色土がはいっている。フカフカしている。
- 5 黒褐色土 (Hue10YR 3/2) ... 粘性があるごくわずかな褐色土が混じる。固くしまっている。
- 6 黒褐色土 (Hue10YR 2/2) ... 褐色土が少しまだらに入る。フカフカしている。



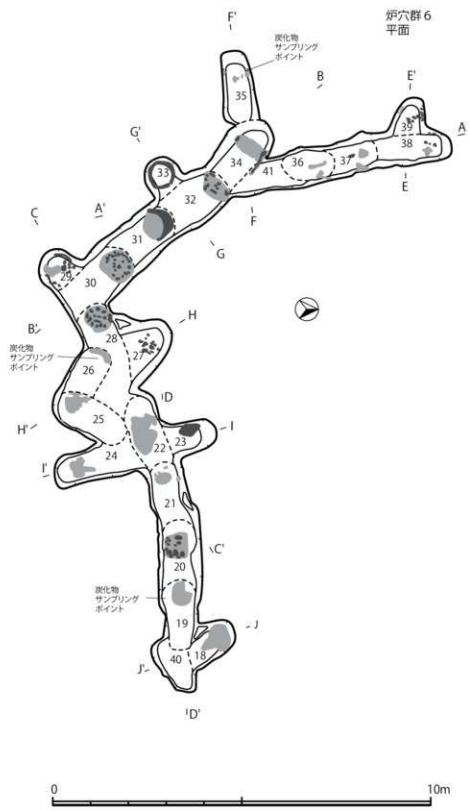
第29図 炉穴実測図1 (1/40)



第 30 図 炉穴実測図 2 (1/40)

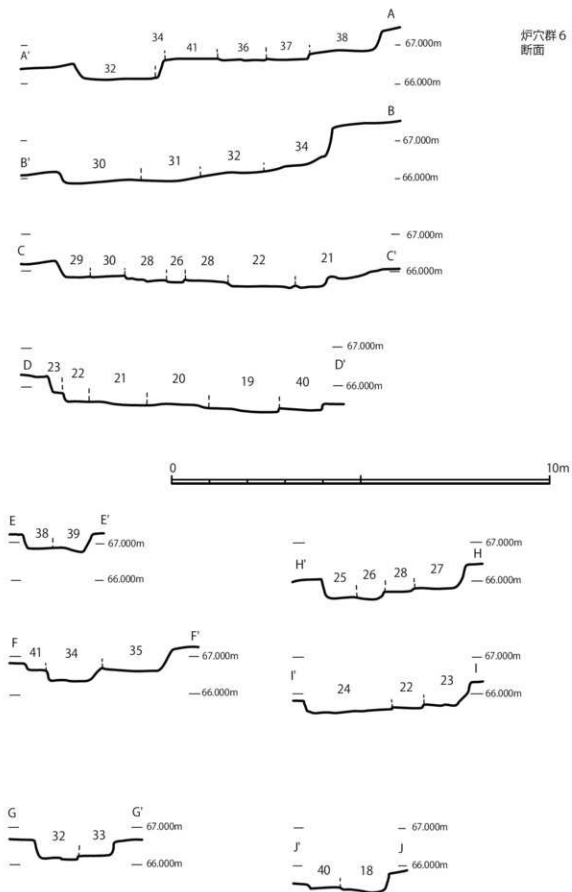


第31图 炉穴实测图3 (1/60)

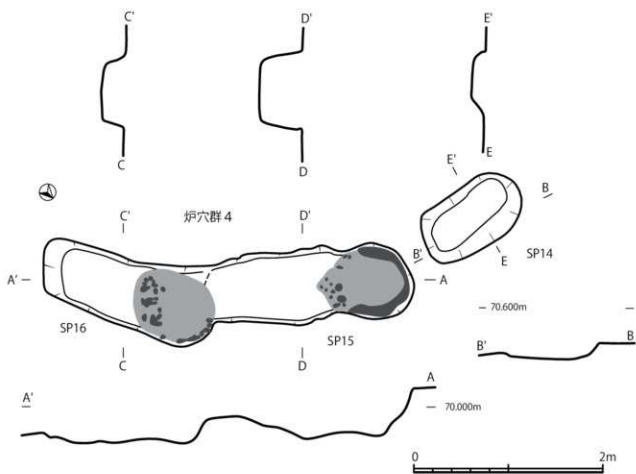


第 32 図 炉穴実測図4 (炉穴群6の平面) (1/100)

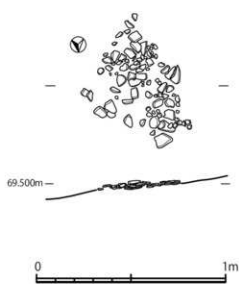
炉穴群 6
断面



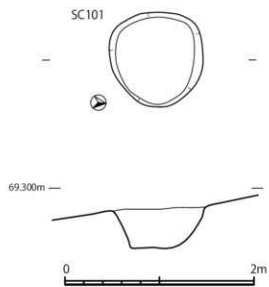
第 33 図 炉穴実測図 5 (炉穴群 6 の断面) (1/100)



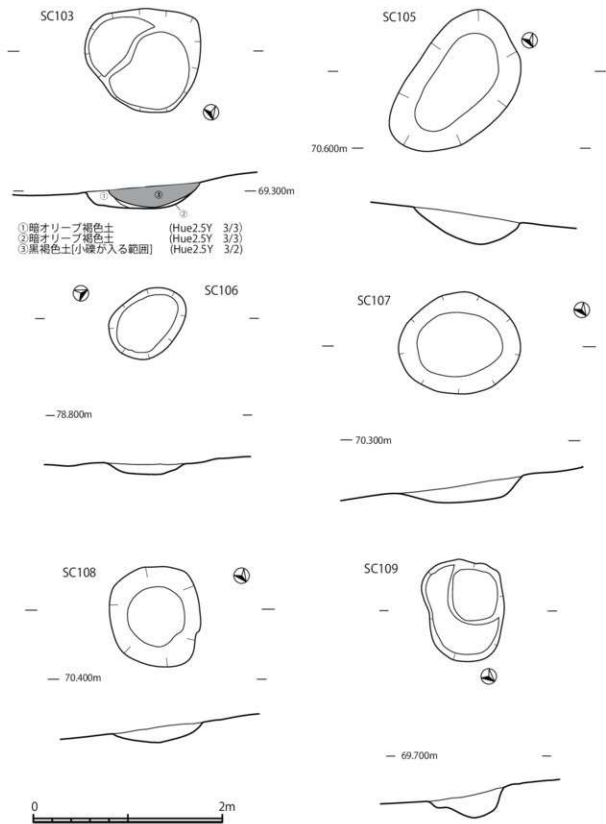
第34図 炉穴実測図6 (1/40)



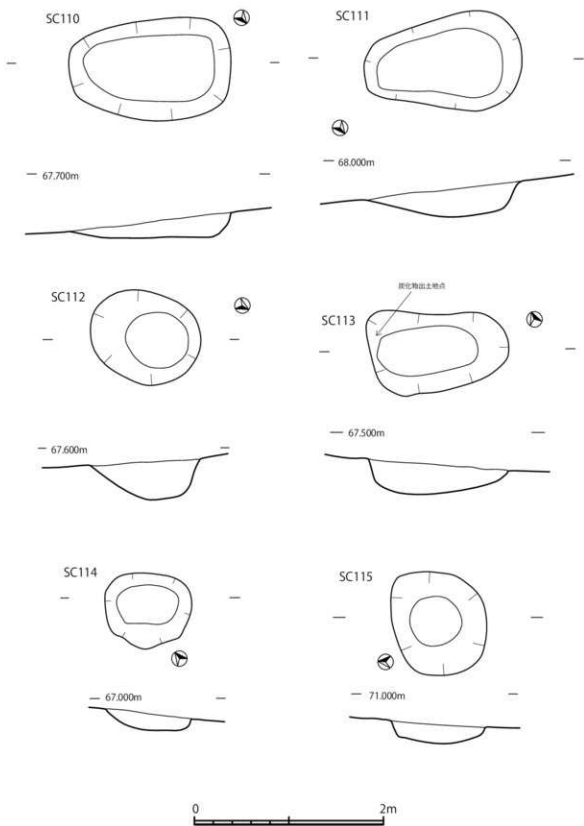
第35図 B区草創期土器集中出土状況図 (1/20)
(64と65が集中出土)



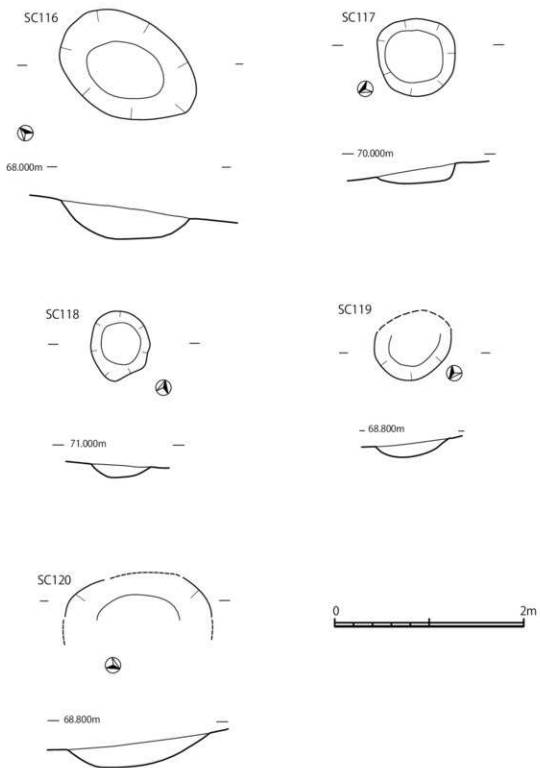
第36図 縄文時代土坑実測図1 (1/40)



第 37 図 縄文時代土坑実測図 2 (1/40)



第 38 圖 縄文時代土坑実測図 3 (1/40)



第 39 図 縄文時代土坑実測図 4 (1/40)

第5表 集石遺構一覧表

NO	地区	遺構の種類	石の密度	集石遺構の特徴				炭化物	石の重量					備考(C14) 詳細図
				幅込み	長さ	高さ	配石		砂岩	ホルンフェルス	尾鈴山酸性岩類	その他	配石	
SI1	A	V層	密	○	1.25	10		11.1 kg	2.1 kg	34.7 kg	0.2 kg	-	48.1 kg	
SI2	A	V層	密	○	1.10	11		7.8 kg	1.4 kg	24.4 kg	1.0 kg	-	34.6 kg	
SI3	A	V層	密	○	1.12	14	○	24.8 kg	14.4 kg	26.5 kg	7.2 kg	13.5 kg	86.4 kg	
SI4	A	V層	密	○	0.70	10		1.4 kg	3.8 kg	11.7 kg	0.2 kg	-	17.1 kg	
SI5	A	V層	密	○	0.85	26		14.8 kg	5.9 kg	5.7 kg	0.2 kg	-	26.6 kg	
SI6	B	V層	密	○	1.24	28		1.0 kg	7.3 kg	18.3 kg	-	-	26.6 kg	
SI7	B	V層	密	-	-	-		8.6 kg	9.0 kg	45.6 kg	1.9 kg	-	65.1 kg	
SI8	B	V層	密	○	0.96	20								
SI9	B	V層	薄	-	-	-		4.4 kg	6.0 kg	15.6 kg	1.4 kg	-	27.4 kg	
SI10	B	V層	薄	-	-	-								
SI11	B	V層	薄	○	1.54	19	○	11.6 kg	10.4 kg	30.3 kg	0.6 kg	-	52.9 kg	BC8,440
SI12	B	V層	薄	-	-	-		0.6 kg	2.5 kg	1.8 kg	-	-	4.9 kg	
SI13	B	V層	薄	○	1.36	14								
SI14	B	V層	かなり密	○	1.42	18		2.5 kg	11.3 kg	66.9 kg	1.1 kg	-	81.8 kg	
SI15	B	V層	薄	-	-	-		2.9 kg	2.3 kg	1.5 kg	-	-	6.7 kg	
SI16	B	V層	薄	-	-	-		2.0 kg	0.9 kg	3.5 kg	0.8 kg	-	7.2 kg	
SI17	B	V層	密	○	1.13	23		6.5 kg	14.7 kg	22.8 kg	0.7 kg	-	44.7 kg	
SI18	B	V層	密	○	0.74	12		3.2 kg	2.7 kg	17.1 kg	1.2 kg	-	24.2 kg	
SI19	B	V層	密	○	1.63	13	○							BC7,140
SI20	B	V層	薄	-	-	-		3.2 kg	18.1 kg	30.8 kg	2.6 kg	-	54.7 kg	
SI21	B	V層	薄	-	-	-		0.6 kg	0.9 kg				1.5 kg	
SI22	B	V層	密	-	-	-		1.7 kg	8.9 kg	26.3 kg	-	-	36.9 kg	
SI23	B	V層	密	○	1.23	18		4.2 kg	7.4 kg	41.9 kg	-	-	53.5 kg	
SI24	B	V層	密	○	0.81	12		7.3 kg	16.3 kg	16.8 kg	1.8 kg	-	42.2 kg	
SI25	B	V層	密	○	1.09	26		2.0 kg	7.8 kg	29.5 kg	-	-	39.3 kg	
SI26	B	V層	密	○	1.66	12		4.8 kg	0.7 kg	48.4 kg	0.2 kg	-	54.1 kg	
SI27	B	V層	密	-	-	-		12.8 kg	8.1 kg	71.0 kg	1.1 kg	-	93.0 kg	
SI28	B	V層	密	○	1.27	20		1.7 kg	5.2 kg	5.5 kg	0.7 kg	-	13.1 kg	
SI29	B	V層	密	○	1.06	15		2.3 kg	10.5 kg	8.2 kg	-	-	21.0 kg	
SI30	B	V層	密	-	-	-								
SI31	B	V層	薄	-	-	-		0.7 kg	1.8 kg				2.5 kg	
SI32	B	V層	密	○	1.29	28	○	16.8 kg	27.4 kg	45.9 kg	2.4 kg	7.5 kg	100.0 kg	BC9,280
SI33	B	V層	密	○	1.09	27	○	6.1 kg	11.1 kg	28.1 kg	1.0 kg	4.0 kg	50.3 kg	
SI34	B	V層	密	○	0.90	19		1.5 kg	3.7 kg	9.2 kg	-	-	14.4 kg	
SI35	B	V層	密	○	1.74	19		3.3 kg	7.5 kg	13.2 kg	0.8 kg	-	24.8 kg	
SI36	B	V層	密	○	0.99	15		5.0 kg	10.5 kg	6.4 kg	0.8 kg	-	22.7 kg	
SI37	B	V層	薄	○	1.12	19		5.6 kg	12.4 kg	29.3 kg	1.2 kg	-	48.5 kg	
SI38	B	V層	密	-	-	-		2.2 kg	10.4 kg	13.2 kg	1.1 kg	-	26.9 kg	
SI39	B	V層	密	-	-	-		4.8 kg	1.3 kg	6.0 kg	-	-	12.1 kg	
SI40	B	V層	薄	○	1.24	55	○							BC7,080
SI41	B	V層	薄	-	-	-		1.5 kg	3.2 kg	5.8 kg	-	-	10.5 kg	
SI42	B	V層	密	-	-	-		1.8 kg	5.1 kg	4.8 kg	0.9 kg	-	12.6 kg	
SI43	B	V層	密	○	1.00	9		5.9 kg	11.3 kg	20.3 kg	1.4 kg	-	38.9 kg	
SI44	B	V層	密	-	-	-		4.3 kg	5.8 kg	18.3 kg	0.9 kg	-	29.3 kg	
SI45	B	V層	密	○	1.79	13								
SI46	B	V層	薄	○	1.14	28	○	28.8 kg	45.0 kg	39.0 kg	2.3 kg	16.9 kg	132.0 kg	BC7,190
SI47	B	V層	密	○	1.30	60	○	12.4 kg	38.5 kg	58.0 kg	6.3 kg	44.4 kg	159.6 kg	
SI48	B	V層	密	○	1.04	15	○	2.6 kg	8.9 kg	14.9 kg	-	-	26.4 kg	BC8,300
SI49	B	V層	密	-	-	-								
SI50	B	V層	かなり密	○	(1.10)	14		2.2 kg	1.2 kg	44.7 kg	-	-	48.1 kg	
SI51	B	V層	密	-	-	-		2.0 kg	6.2 kg	4.6 kg	-	-	12.8 kg	
SI52	B	V層	密	○	0.85	24								
SI53	B	V層	密	-	-	-		23.9 kg	9.1 kg	32.2 kg	1.3 kg	-	66.5 kg	
SI54	B	V層	密	○	1.21	30		1.8 kg	15.6 kg	77.0 kg	0.4 kg	-	94.8 kg	
SI55	B	V層	密	-	-	-		8.8 kg	6.9 kg	35.6 kg	1.2 kg	-	52.5 kg	
SI56	B	V層	密	-	-	-		6.3 kg	4.4 kg	15.3 kg	2.0 kg	-	28.0 kg	
SI57	B	V層	密	○	1.06	13		13.8 kg	2.5 kg	20.1 kg	-	-	36.4 kg	
SI58	B	V層	密	○	1.10	25		1.8 kg	3.5 kg	11.3 kg	0.1 kg	-	16.7 kg	
SI59	B	V層	密	○	0.89	34	○	14.2 kg	8.9 kg	18.7 kg	-	-	41.8 kg	
SI60	A	V層	薄	-	-	-		3.9 kg	4.0 kg	12.9 kg	0.1 kg	-	20.9 kg	
SI61	A	V層	薄	-	-	-		5.4 kg	2.7 kg	13.5 kg	-	-	21.6 kg	
SI62	A	V層	薄	-	-	-		11.1 kg	3.1 kg	8.0 kg	2.1 kg	-	24.3 kg	
SI63	A	V層	薄	-	-	-		5.5 kg	4.1 kg	2.7 kg	0.8 kg	-	13.1 kg	
合計								347.8 kg	454.7 kg	1213.8 kg	500 kg	86.3 kg	2152.6 kg	

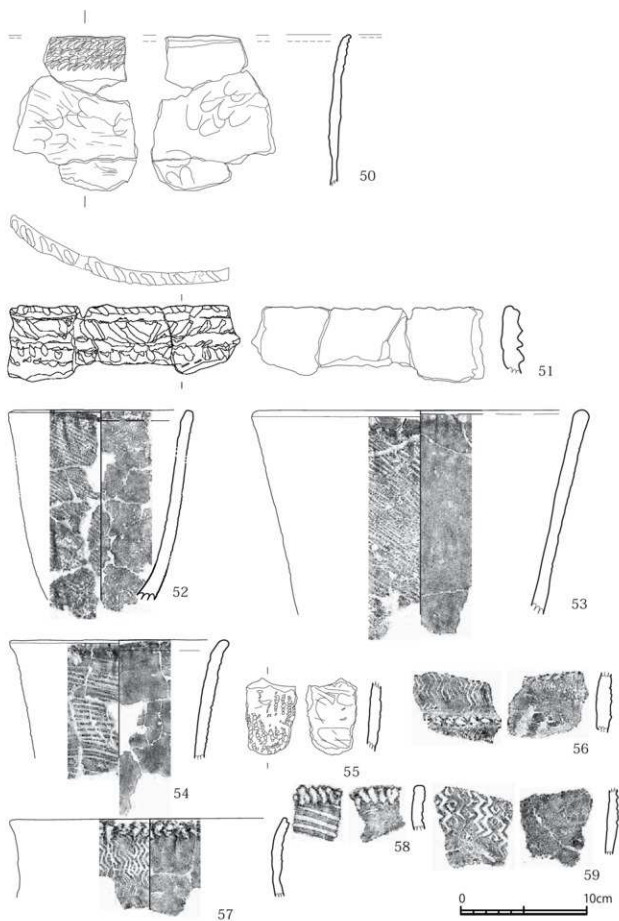
※集石遺構の特徴欄の○は「有」、空欄は「無」を示す。また石の重量欄の薄い斜線部分は、測定できなかったことを示す。

第6表 縄文時代炉穴・土坑一覧表

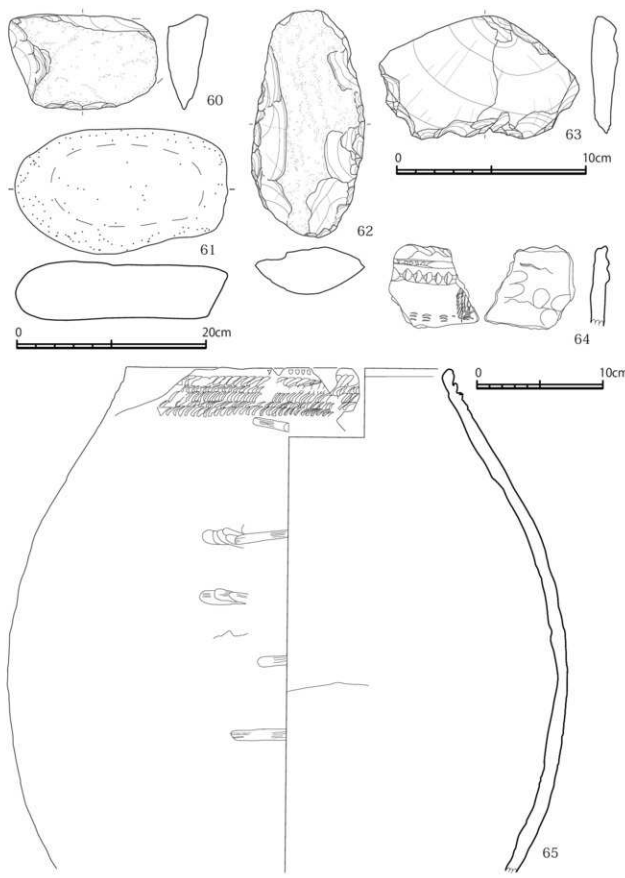
炉穴	検出区	検出面	伊予群の NO	炭化物	遺物	礫	焼土	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SP1	B	Ⅵ層	なし	○4	×	少	○	2.50	1.16	0.66	年代測定 (BC7,460)
SP2	B	Ⅶ層	5	×	○	少	○	-	0.92	-	-
SP3	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	0.70	-	-
SP4	B	Ⅶ層	3	×	☆	少	×	-	0.66	0.31	-
SP5	B	Ⅶ層	2	○1	○☆	少	×	-	1.12	0.61	-
SP6	B	Ⅵ層	2	○3	×	少	○	-	1.50	0.61	年代測定 (BC8,300)
SP7	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	0.91	-	-
SP8	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	0.66	-	-
SP9	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	0.98	-	-
SP10	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	1.04	-	-
SP11	B	Ⅶ層	5	×	×	少	○	-	0.97	-	-
SP12	B	Ⅶ層	1	○3	×	多	×	-	0.86	0.33	-
SP13	B	Ⅶ層	1		×	多	○	-	0.83	0.44	-
SP14	B	Ⅶ層	なし	×	×	少	×	1.15	0.67	0.15	-
SP15	B	Ⅶ層	4	×	×	少	○	-	0.64	0.51	-
SP16	B	Ⅶ層	4	×	×	少	○	-	0.68	0.30	-
SP17	B	Ⅶ層	3	×	×	少	○	-	0.57	0.31	-
SP18	B	Ⅶ層	6	×	×	多	○	-	0.89	-	-
SP19	B	Ⅶ層	6	○2	×	少	○	-	0.88	-	年代測定 (BC8,260)
SP20	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	1.14	-	-
SP21	B	Ⅶ層	6	×	○☆	少	○	-	0.98	-	-
SP22	B	Ⅶ層	6	○2	☆	多	○	-	-	-	-
SP23	B	Ⅶ層	6				○	-	-	-	-
SP24	B	Ⅶ層	6	○1	×	少	○	-	-	-	-
SP25	B	Ⅶ層	6	○3	○	少	○	-	0.81	-	-
SP26	B	Ⅶ層	6	○1	×	多	○	-	-	-	年代測定 (BC8,260)
SP27	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	-	-	-
SP28	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	-	-	-
SP29	B	Ⅶ層	6	×	☆	少	○	-	-	-	-
SP30	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	1.29	-	-
SP31	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	1.15	-	-
SP32	B	Ⅶ層	6	○1	×	少	○	-	-	-	-
SP33	B	Ⅶ層	6		×	少	○	-	0.96	-	-
SP34	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	-	-	-
SP35	B	Ⅶ層	6	○1	×	少	○	-	0.83	-	年代測定 (BC8,220)
SP36	B	Ⅶ層	6	×	×	多	○	-	0.87	-	-
SP37	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	0.91	-	-
SP38	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	-	-	-
SP39	B	Ⅶ層	6	×	×	少	○	-	-	-	-
SP40	B	Ⅶ層	6	×	×	少	×	-	-	-	-
SP41	B	Ⅶ層	6	×	×	少	×	-	-	-	-

土坑	検出区	検出面	プラン	炭化物	遺物	礫	焼土	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	備考
SCI01	B	Ⅵ層	楕円	×	○	多	×	0.50	-	0.41	-
SCI03	B	Ⅵ層	円	×	○	多	×	0.61	-	0.23	-
SCI05	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	×	0.83	-	0.28	-
SCI06	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	×	0.43	-	0.12	-
SCI07	B	Ⅶ層	円	×	○	少	○	0.65	-	0.24	-
SCI08	B	Ⅶ層	円	×	○	少	×	0.52	-	0.17	-
SCI09	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	×	0.54	-	0.27	-
SCI10	B	Ⅶ層	楕円	×	○☆	少	×	0.86	-	0.24	-
SCI11	B	Ⅶ層	楕円	×	○	少	○	0.83	-	0.30	-
SCI12	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	×	0.58	-	0.40	-
SCI13	B	Ⅶ層	楕円	○	×	少	×	0.74	-	0.33	年代測定 (BC6,820)
SCI14	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	×	0.46	-	0.16	-
SCI15	B	Ⅶ層	楕円	×	○	少	×	0.55	-	0.10	-
SCI16	B	Ⅶ層	楕円	×	×	少	○	0.76	-	0.35	-
SCI17	B	Ⅶ層	円	×	×	少	○	0.41	-	0.16	-
SCI18	B	Ⅶ層	円	×	×	少	×	0.32	-	0.14	-
SCI19	B	Ⅶ層	円?	×	×	少	×	-	-	0.25	-
SCI20	B	Ⅶ層	楕円?	○	×	少	○	-	-	-	-

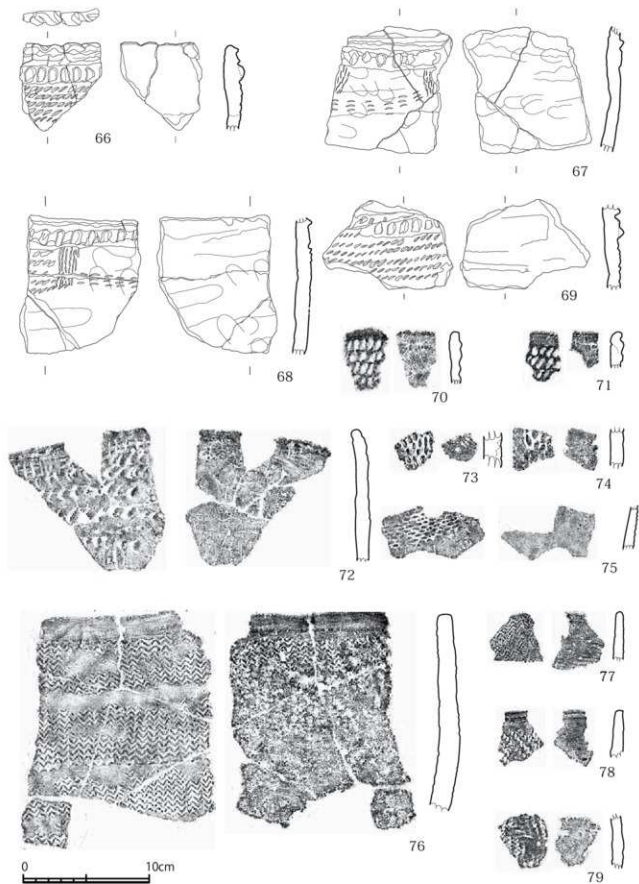
※上記の表内の○は「有」、×は「無」を示す。また、遺物欄の☆は、報告書未掲載遺物があることを示す。



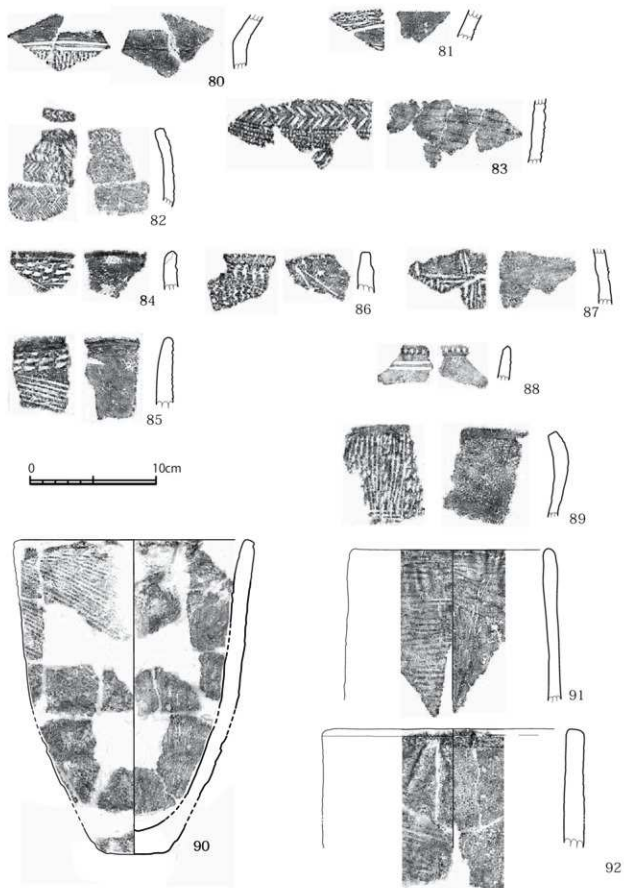
第40図 遺構内出土縄文土器（草創期～早期）実測図（1/3）



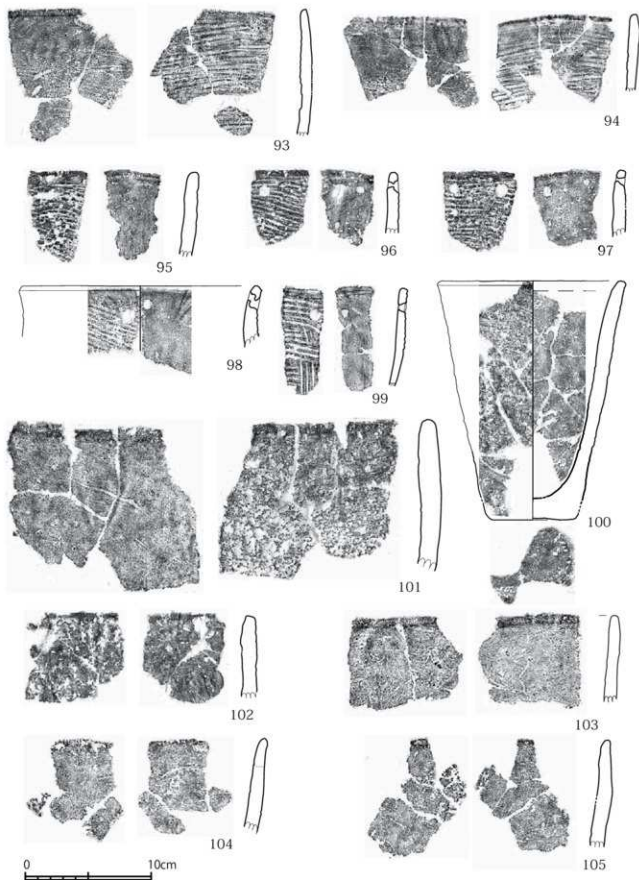
第41図 遺構・V層出土縄文遺物実測図 (石器60・62・63 1/2)
 (石器61 1/4)
 (土器64・65 1/3)



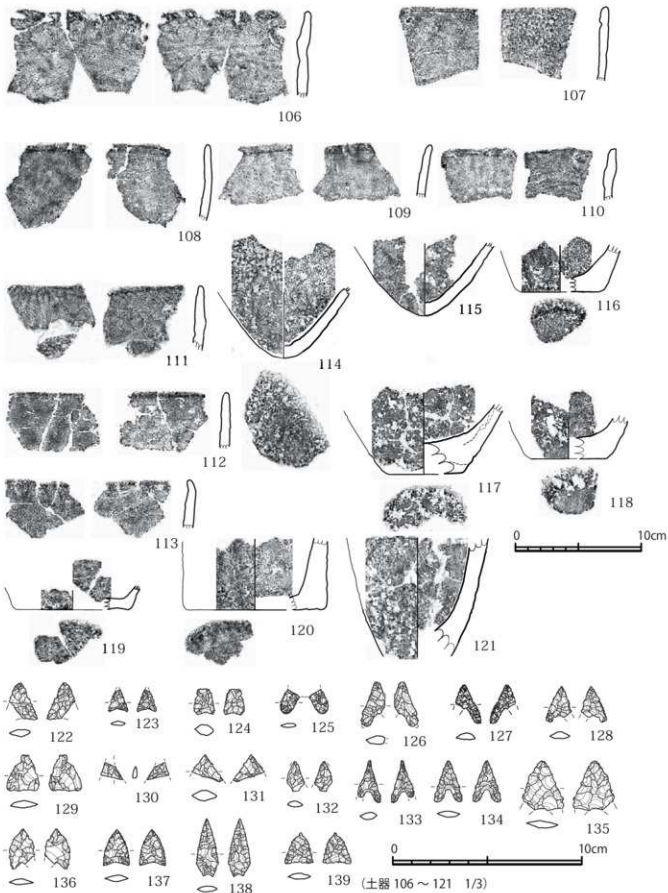
第42图 V层出土绳文土器实测图1 (1/3)



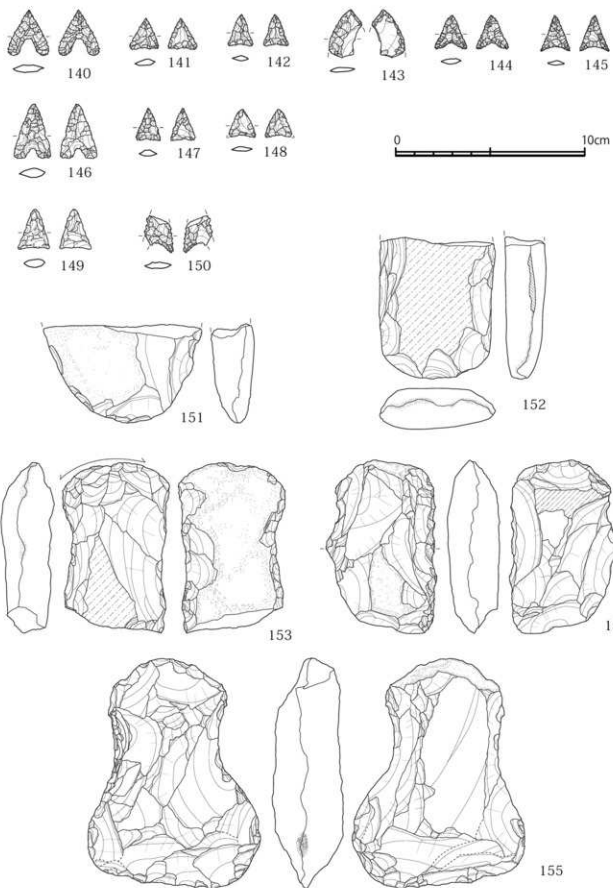
第43图 V層出土繩文土器実測図2 (1/3)



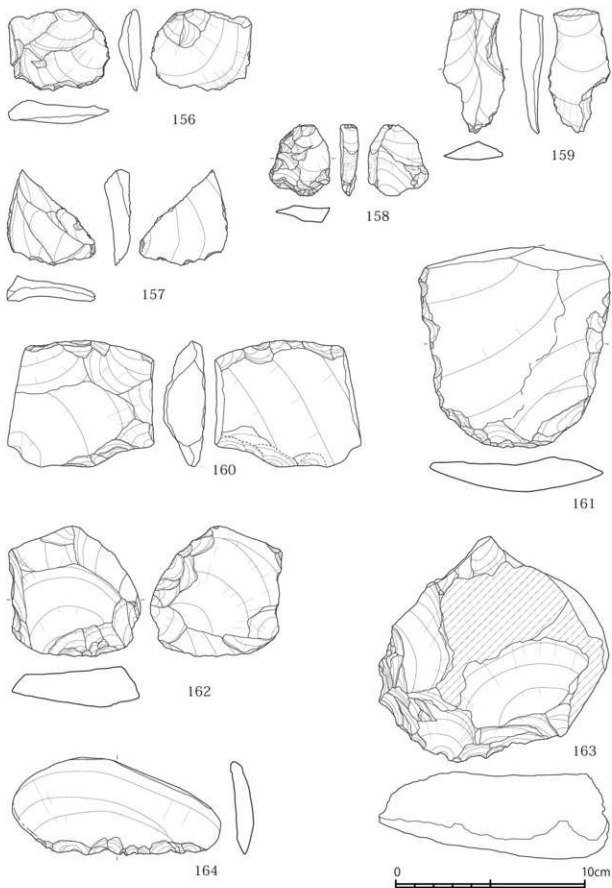
第44図 V層出土縄文土器実測図3 (1/3)



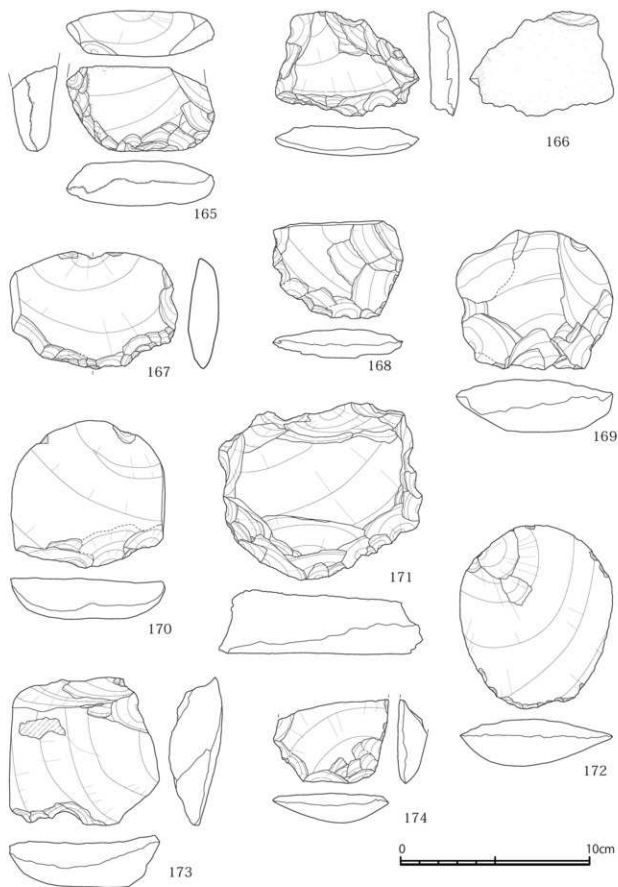
第45图 V層出土縄文土器・石器実測図 (石器 122 ~ 139 1/2)



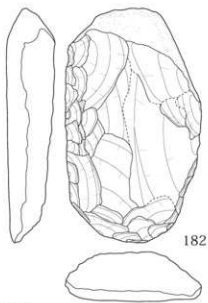
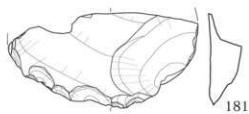
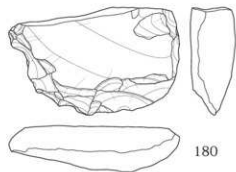
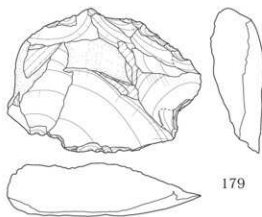
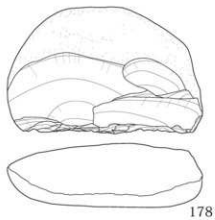
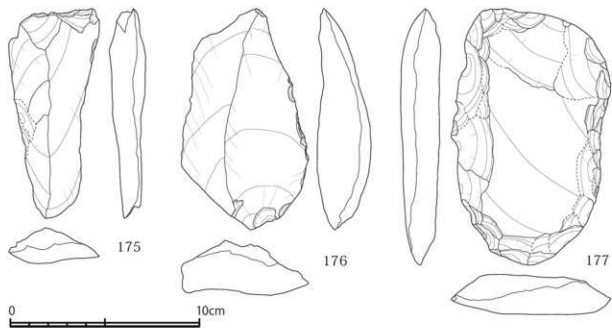
第46图 V层出土石器实测图1 (1/2)



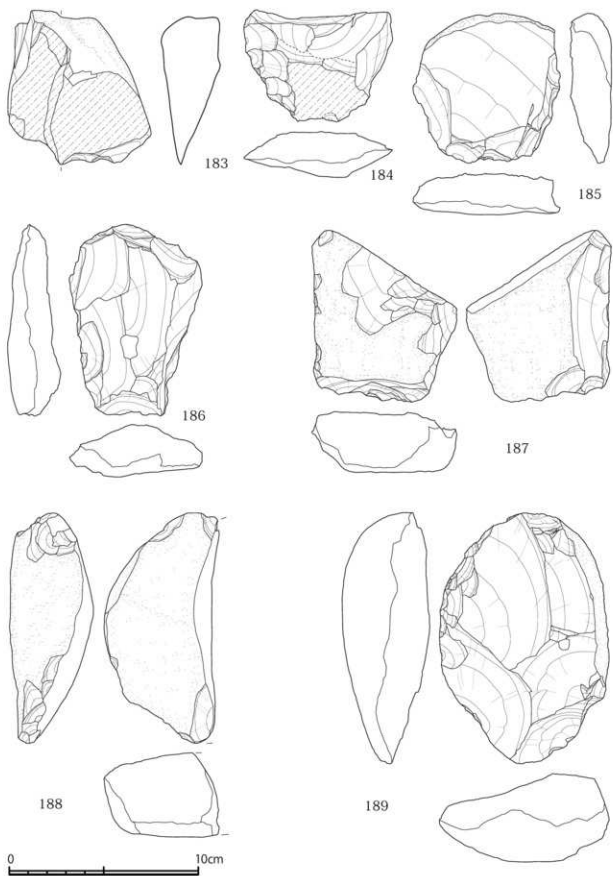
第47图 V層出土石器实测图2 (1/2)



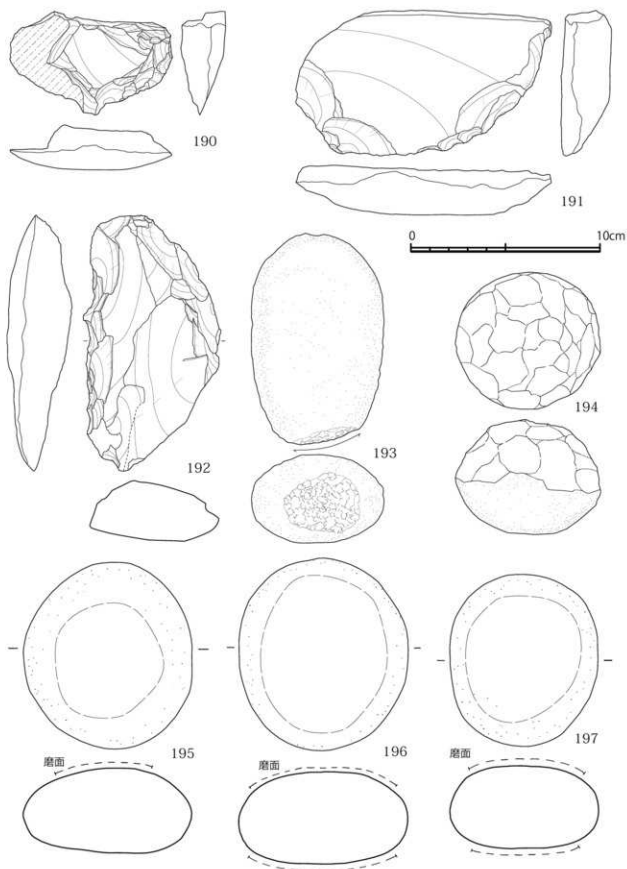
第48图 V層出土石器実測图3 (1/2)



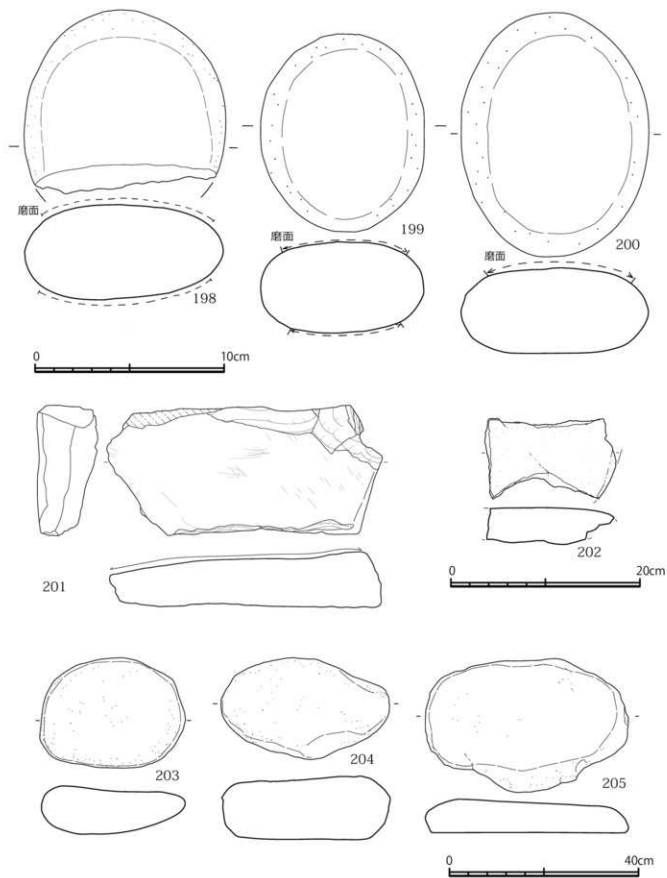
第49图 V层出土石器实测图4 (1/2)



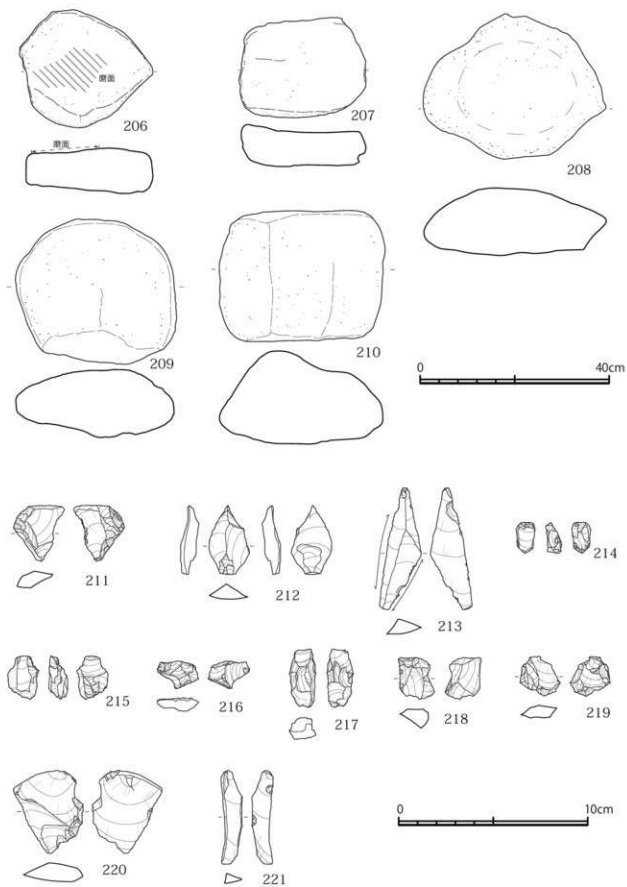
第50图 V層出土石器実測図5 (1/2)



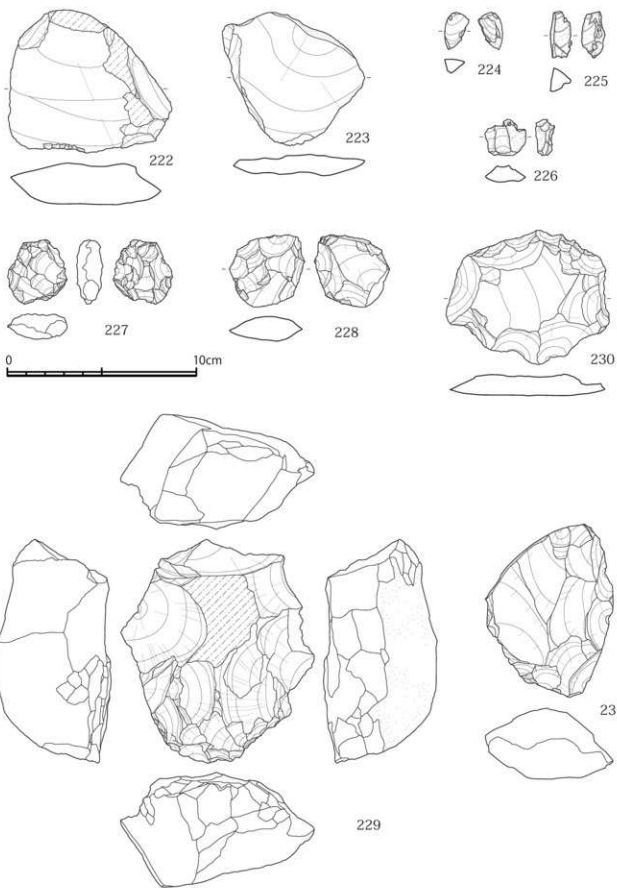
第 51 图 V 层出土石器实测图 6 (1/2)



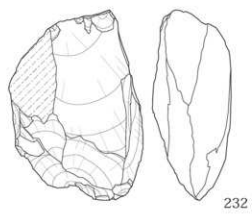
第52图 V層出土石器実測図7 (198~201 1/2、202 1/4、203~205 1/8)



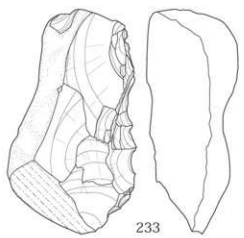
第53图 V層出土石器実測図8 (206~210 1/8、211~221 1/2)



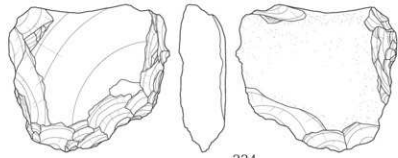
第54图 V層出土石器实测图9 (1/2)



232



233



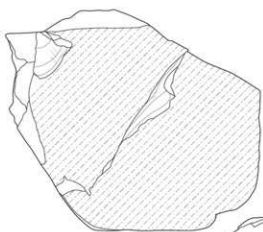
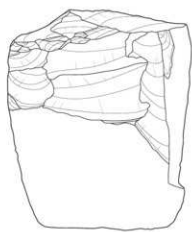
234



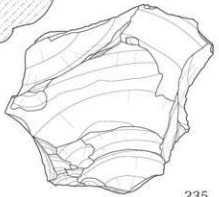
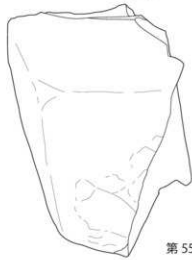
237



238



236



235

第 55 図 V層出土石器・表面採集遺物実測図 (1/2)

第7表 縄文土器観察表1

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
50	深鉢	口縁部 ～胴部	B区SC8と V層				胴の上部ナデの後、 横方向4段に爪形文 が施されている。横 と斜方向のナデ、指 頭痕あり	粗いナデ、指 頭痕あり	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	明黄褐色 (10YR 7/6)	1mm以下の明赤褐色 と3mm以下の 褐灰色粒をわずかに 含む。1mm以下の 黒色光沢粒を含む	不明	外面スス付 着、接合痕 あり
51	深鉢	口縁部	B区SC115 とV層				口縁部に1条、口縁 部に3条の隆帯文を ほどこす。隆帯には 棒状の工具で刻み目 をほどこす。隆帯以 外の箇所は横ナデま たはナデ	内面横方向の ナデ	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	3.5mmほどの赤褐色 石粒を1粒、1mm 以下の黒色と乳白色 の砂粒を含む	約1/8	
52	深鉢	口縁部 ～底部	B区SP2 とV層	推定 14.6			口縁部ナデ、口縁 部から胴部は右下方 向への貝殻条痕文	縦方向のミガ キ	褐色 (7.5YR 6/6)	褐色 (7.5YR 6/6)	8mm程度のにぶい 褐色粒を1粒、3mm 以下の黄褐色粒・灰 白色粒と1mm以下 の金色光沢粒を含む	約1/3	外面スス付 着、内面黒 垢あり
53	深鉢	口縁部 ～胴部	B区SP21	推定 26.8			口縁部横ナデ、胴部 に斜方向の貝殻条痕 文、胴部ナデ	縦方向のナデ	浅黄褐色 (10YR 8/4)	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	1mm以下の黒色粒・ 灰白色粒、微細な無 色透明光沢粒・黒色 光沢粒を含む	口縁部の 1/4	外面スス付 着、内面炭 化物付着
54	深鉢	口縁部 ～胴部	B区SP25 とV層	推定 9.4			条痕文、ナデ、口縁 部は横ナデ、指頭痕 あり	上部は横方向 のミガキ、下部 は縦方向の ミガキ、指頭 痕あり	褐色 (5YR 6/6)	赤褐色 (5YR 4/8)	1mm以下の灰白色 粒・浅黄褐色粒・褐 灰色粒・無色透明色 粒・金色光沢粒と 2mm程度の暗赤褐色 色粒を含む	胴部の1/4	外面スス付 着、内面炭 化物付着
55	深鉢	胴部	B区SC101				縦・斜方向の縄文 文、縦・斜方向のナ デ	工具による縦・ 横・斜方向の ナデ、指頭痕	褐色 (5YR 6/6)	褐色 (7.5YR 6/6)	3mm以下の灰褐色 粒・灰白色粒、1mm 以下の黒色光沢粒・ 無色透明光沢粒を含 む		継ぎ不明
56	深鉢	胴部	B区SC107				縦・横・斜方向のナ デ、山形押型文、下 部に突帯を貼り付 け、貝殻押しにより 刻み目を施した	工具による横・ 斜方向のナデ、 指頭痕	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	にぶい黄 褐色 (10YR 6/4)	1mm以下の浅黄褐色 粒・灰白色粒・黒 色透明光沢粒・無色 透明光沢粒を含む		継ぎ不明
57	深鉢	口縁部 ～胴部	B区SC108 とV層	21.5			縦位の山形押型文、 口縁部はナデ、刻み 目あり、中位に指頭 痕あり、下部には深 い指頭痕あり	横方向のナデ、 指頭痕あり	にぶい黄 褐色 (10YR 6/4)	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	3mm以下の灰褐色 粒をわずかに含む	約1/5	外面スス付 着、外面上 部に5mm 大の浅黄褐色 色粒1粒付 着、内面接 合痕あり
58	深鉢	口縁部	B区SC110				口縁部横ナデ刻みあり 、胴部ナデ、胴部 に幅2～3mmの横 方向の沈線文	工具による横 方向のナデ、 口縁部から縦 方向の沈線文	にぶい黄 褐色 (10YR 5/3)	にぶい黄 褐色 (10YR 7/4)	3mm以下の灰白色 粒・灰黄色粒、2mm 以下の明褐色粒・黒 色粒、2mm以下の 白色透明粒・黒色光 沢粒を含む		外面スス付 着、外面一 部黒垢あり、口縁部 一部剥離
59	深鉢	胴部	B区SC111				胴部に縦方向の山形 押型文、部分的に押 型文の垂なりの部分 が見られる。工具に よる縦・斜方向のナ デ、胴部下部に指頭 痕あり	工具による横・ 斜方向のナデ、 指頭痕あり	にぶい黄 褐色 (10YR 6/4)	にぶい黄 褐色 (10YR 6/3)	2mm以下の灰白色 粒・灰色粒、2mm 以下の無色透明光沢 粒、微細な黒色光沢 粒を含む		外面部分的 にスス付 着、内面剥 離あり、炭 化物付着

第8表 縄文土器観察表2

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外部	内部	外面	内面			
64	深鉢	口縁部	B区SC100				口縁部に斜方向の切 み目、上部に刻み目 のある隆帯文、下部 は横方向のナデの後 部分的に爪形文が刺 突文、一部縦に爪形 施文あり	横方向のナデ、 指頭痕あり	に ぶ い 黄 橙 (10YR 5/4)	に ぶ い 黄 橙 (10YR 5/4)	2mmほどの黒 色粒・褐色粒を 含む、1mm以 下の透明光沢 粒・灰白色粒を 含む		内面接合痕あ り
65	深鉢	口縁部～ 胴部	B区SC100	推定	25.0		口縁部はナデ・刺突文、 口縁部は5段の爪形 文、胴部はナデで部 分的にかなり風化し ている、指頭痕あり	上部ナデ、中位 以下は風化著し い	橙 (7.5YR 6/6)	に ぶ い 橙 (7.5 YR 6/4)	4mm以下の褐 色粒、1mm以 下の灰白色粒を 多く含む	胴部の約 1/3	内面部分的に スス付着、外 面全体に赤色 顔料(?)付着
66	深鉢	口縁部	B区V層				口縁部は押圧切み後 ヨコナデ、口縁部は 隆帯貼り付け後押圧 切み、口縁下部は爪 形文が5段	ナデ	に ぶ い 黄 橙 (10YR 7/4)	に ぶ い 黄 橙 (10YR 7/4)	1mm以下の黒 褐色粒・明褐色 粒・灰白色粒・ 褐色粒を含む		内面接合痕あ り
67	深鉢	口縁部～ 胴部	B区V層				隆帯2条あり、下 方の隆帯は切み目の 後に指押え、口縁中 部はナデの後横方向 に爪形文が施されて いる、口縁下部はナ デの後横方向に爪形 文、胴部は横方向の ナデ	横方向のナデ、 上部～中部は浅 い指頭痕、下部 は深い指頭痕あ り	に ぶ い 黄 橙 (10YR 7/4)	に ぶ い 黄 橙 (10YR 6/4)	3mm以下の赤 褐色粒と微細な 灰白色粒を含む		内外面ともに 接合痕あり
68	深鉢	口縁部付 近～胴部	B区V層				全体に横方向のナ デ、隆帯2条あり、 上方の隆帯は細長 い、下方の隆帯は切 み目を施す、横方向 に5段の刺突文と6 列縦の刺突文が重な りあり、一部赤い顔 料付着	横方向のナデ、 指頭痕あり、一 部赤い顔料付着	に ぶ い 黄 橙 (10YR 6/4)	に ぶ い 黄 橙 (10YR 6/4)	微細な金色光沢 粒と灰白色粒を 含む		内面接合痕あ り
69	深鉢	胴部	B区V層				上部は隆帯3条あ り、2条目と3条目 はナデのあとと工具 による刺突文、2条目 の裏付は途中から割 れている、下部は、 ナデのあとと横方向5 段に爪形文が施され ている	指ナデ、一部工 具によるナデも ある	浅 黄 橙 (2.5Y 7/3)	浅 黄 (2.5Y 7/4)	1mm以下の乳 白色粒・黒色粒・ 明赤褐色粒をわ ずかを含む		内面赤い顔料 付着、接合痕 あり
70	深鉢	口縁部	B区V層				ナデの後、横方向の 爪形文	ナデ、指頭痕あ り	に ぶ い 黄 橙 (10YR 7/3)	に ぶ い 黄 橙 (10YR 7/4)	3mm以下の褐 色粒と微細な灰 白色粒を含む		内外面接合痕 あり
71	深鉢	口縁部	B区V層				ナデの後、横方向の 爪形文	ナデ、指頭痕あ り	浅 黄 橙 (10YR 4/8)	に ぶ い 橙 (7.5 YR 6/4)	微細な灰白色粒 を含む		外面スス付 着、内面接合 痕あり
72	深鉢	口縁部～ 胴部	A区V層				口縁部はナデ、横方向 の調整の後、縦方向 の調整、C字状の刺 突文	縦・横・斜方向 のナデ	橙 (7.5YR 6/6) に ぶ い 黄 橙 (7.5 YR 7/4)	に ぶ い 黄 橙 (7.5YR 6/4) 灰黄褐 (7.5YR 6/2)	1mm以下の乳 白色粒と2mm 以下の褐色光沢 粒をわずかに含 む	口径部分 で1/5	外面スス付 着、内面風化 物付着
73	深鉢	胴部	B区V層				ナデの後、約8mm 幅の縦位の楕円押型 文を施す	工具による横方 向のナデ	赤 褐 (5YR 4/6)	に ぶ い 赤 褐 (2.5 YR 4/4)	4mm以下の淡 褐色粒、3mm 以下の赤色粒・ 黒色粒を含む		接合痕あり

第9表 縄文土器観察表3

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
74	深鉢	胴部	B区V層				楕円押型文	横・斜方向のナデ	にぶい 橙 (5YR 6/4)	にぶい 赤褐 (5YR 5/4)	5mm以下の褐色粒・褐色色粒を含む、1mm以下の黒色光沢粒・灰色粒を含む		外面スス付着
75	深鉢	胴部	A区V層				楕円押型文、ナデ	ナデ	にぶい 黄 橙 (10YR 4/2)	灰黄褐 (10YR 4/2)	2mm以下の褐色色粒を少し含む		外面一部スス付着、内面炭化物付着
76	深鉢	口縁部～胴部	A区V層				口押部横ナデ、口縁部～胴部は山形押型文、一部山形押型文の後横方向のナデ	上部：山形押型文、下部：条虫の後横方向のナデ	明赤褐 (5YR 5/6)	明黄褐 (10YR 6/6) 黄 褐 (10YR 6/6)	2～5mmの灰白色石粒、2mm以下の乳白色の砂粒、1～3mmの黒色光沢粒をわずかに含む		外面スス付着、内面黒炭あり
77	深鉢	口縁部	A区V層				山形押型文、文様を入れた後ナデ	横方向のナデ	にぶい 黄 褐 (5YR 5/4)	明 赤 褐 (5YR 5/6)	3mm程度の灰白色粒、1mm以下の黒色光沢粒をわずかに含む、1mm以下の乳白色粒を含む		
78	深鉢	口縁部	A区V層				斜方向の縄文施文、口押部は横ナデ	ナデ	にぶい 赤 褐 (5YR 4/4)	にぶい 赤 褐 (5YR 4/4)	1mm以下の乳白色粒と無色透明光沢粒を含む		
79	深鉢	胴部	B区V層				ナデの後、縄文施文、一部工具の圧痕あり	ナデ	明赤褐 (5YR 5/6)	明 赤 褐 (5YR 5/6)	1mm以下の乳白色・黒色砂粒、1～3mmの灰白色粒・赤褐色粒をわずかに含む		
80	深鉢	頸部	A区V層				ナデ、沈線、光噴然糸文	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	3mm以下の明褐色色粒をわずかに含む、1mm以下の灰白色粒・黒色粒・褐色色粒を多く含む		
81	深鉢	胴部	A区V層				ナデ、沈線、光噴然糸文	ナデ	にぶい 黄 褐 (10YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	1mm以下の黒色光沢粒・にぶい黄褐色粒・灰白色粒・灰褐色色粒を含む		
82	深鉢	口縁部～胴部	A区V層				へらによる羽状文、瘤状突起あり	横方向のナデ	明赤褐 (5YR 5/6)	にぶい 赤 褐 (5YR 4/4)	3mm以下の灰白色粒と1.5mm以下の無色光沢粒をわずかに含む		外面スス付着、内面炭化物付着
83	深鉢	胴部	A区V層				ナデ、横方向に貝殻敷刺突文(断面で4本または6本)、工具による羽状の調整痕あり	ミガキ	にぶい 赤 褐 (5YR 5/4)	灰 褐 (7.5YR 4/2)	5mm以下の無色透明光沢粒と3mm以下の灰白色粒・褐色粒と2mm以下の金色粒・微細な光沢粒を含む		外面一部スス付着、内面一部炭化物付着、全体的に黒っぽい

第10表 縄文土器観察表4

遺物番号	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
84	深鉢	口縁部	B区V層				上部はナデの後、斜方向のナ 横方向の浅い刺突 文、下部は斜方向 の条痕文	斜方向のナ デ	にぶい黄褐色 (10YR 4/3)	にぶい褐色 (7.5YR 5/4)	微細な灰白色 粒を含む		内面剥離 痕あり
85	深鉢	口縁部	B区V層				口胴部横ナデ、口 縁上部刺突文、口 縁中部ナデ、口縁 下部条痕文	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	にぶい黄褐色 (10YR 5/3)	1mm以下の乳 白色砂粒・乳白 色透明砂粒を わずかに含む		外面上部 スス付着
86	深鉢	口縁部	B区V層				口胴部横ナデ、口 縁部はナデの後、指頭痕 線位の貝殻胞縁刺 突文を施す	斜方向のナ デ、指頭痕 あり	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	3mm以下の灰 白色粒を含む		外面部分 的にスス 付着
87	深鉢	胴部	A区V層				貝殻胞縁による 斜・横・縦方向の 刺突文	ナデ	明赤褐色 (5YR 5/6)	黒褐色(5YR 2/1)	3mm以下の褐 灰色粒と2mm 以下の灰白色 粒を少し含む		内面炭化 物付着、 傾き不明
88	深鉢	口縁部	A区V層				口胴部に工具によ るやや斜め気味の 彫みあり(1.5mm 程の深さ)、横方 向に2本の沈線、 沈線の下に傷痕、 横ナデ	斜方向のナ デ	にぶい褐色 (7.5YR 6/4)	褐色(7.5YR 6/6)	1mm以下の黒 色粒・灰白色 粒・褐色灰色 粒を多く含む、微細 な黒色光沢粒・ 無色透明光沢 粒を多く含む		
89	深鉢	口縁部 ～胴部	A区V層				横方向の条痕文の あと、縦方向の条 痕文	ナデ	明赤褐色 (5YR 5/6)	にぶい褐色 (7.5YR 5/4)	3mm以下の灰 白色粒を多く 含む	約1/5	外面スス 付着、内 面炭化物 付着、傾 き不明
90	深鉢	口縁部 ～底部	B区V層	18.1	5.7	24.9	口胴部横ナデ、上 部は横方向(先) の貝殻条痕文、中 位は斜方向(後) の貝殻条痕文、下 部はナデ	ナデ	明褐色(7.5YR 5/8)	明褐色(7.5YR 5/6)	2mm以下の灰 白色粒・褐色 灰色粒を含む	約2/3	外面スス 付着、内 面炭化 物付着
91	深鉢	口縁部 ～胴部	A区V層	14.8			貝殻条痕文、口胴 部ヘラムガキ	ミガキ	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	明黄褐色 (10YR 7/6)	6mm以下の灰 白色粒と3mm 以下の黒色粒・ 明褐色粒・褐 灰色粒を含む	約1/5	外面スス 付着(特 に口胴部 付近は濃 く付着)
92	深鉢	口縁部	B区V層	推定 20.8			口胴部横ナデ、口 縁部は右下方向へ の貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	2mm以下の灰 白色粒・褐色 灰色粒、1mm以 下の浅黄褐色粒・ 黒色粒、3mm 以下の無色透 明色粒を多く 含む	胴部の約 1/5	外面一部 スス付着、 内面一部 黒斑あり
93	深鉢	口縁部 ～胴部	B区V層				工具によるナデ	貝殻条痕文	明赤褐色 (5YR 5/6)	褐色(5YR 6/6)	1～2mm程度 の黒色光沢粒 と1mm以下の 乳白色砂粒を わずかに含む		外面スス 付着、内 面黒斑あ り

第11表 縄文土器観察表5

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	部高	外面	内面	外面	内面			
94	深鉢	口縁部 ～胴部	B区V層				ナデ	只染条痕文	明 褐 (7.5YR 5/6)	に ぶ い 褐 (7.5 Y R 5/4)	1～2mm程度の黒色 光沢粒と1mm 以下の乳白色砂粒 をわずかに含む		外面スス付着、 内面黒斑あり
95	深鉢	口縁部	B区V層				口縁部ミガキ、 口縁部条痕文	ミガキ、指頭 痕あり	黄 褐 (10YR 5/8)	灰黄褐 (10YR 4/2)	2mm以下の金色 光沢粒・灰白色粒・ 黄褐色粒を含む		外面一部スス付 着、内面炭化物 付着、全体的に 気泡状の穴多し
96	深鉢	口縁部	B区V層				口縁部ミガキ、 口縁部条痕文	ミガキ、指頭 痕あり	橙 (7.5YR 6/6)	褐 灰 (10YR 4/1)	2mm以下の金色 光沢粒・灰白色粒・ 明黄褐色粒を含む		外面スス付着、 全体的に気泡状 の穴多し
97	深鉢	口縁部	B区V層				口縁部ミガキ、 口縁部は横方向 の条痕文	横方向のミガ キ、指頭痕あ り	に ぶ い 黄 褐 (10YR 6/4)	に ぶ い 黄 褐 (10YR 7/4)	2mm以下の灰白 色粒・淡黄色粒、 1mm以下の褐灰 色粒・金色光沢粒・ 黒色光沢粒を含む		外面一部スス付 着、直径2mm の円の補修孔と 直径約4mmの 楕円の補修孔あ り、内面黒斑あ り、全体的に気 泡状の穴多し
98	深鉢	口縁部	B区V層	推定 18.3			口縁部はナデ、 口縁部は条痕文	横・斜方向の ナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	2mm以下の灰色 粒・にぶい褐色粒 と1mm以下の黒 色光沢粒を少し含 む	約1/6	外面スス付着、 補修孔あり、横・ 斜方向のナデ
99	深鉢	口縁部 ～胴部	A区V層				上部は横方向の 条痕、下部は縦 横方向の条痕、 口縁部はナデ	ナデ	浅 黄 (2.5YR 7/4)	黄 褐 (2.5YR 5/3)	2mm以下の灰白 色粒を含む		口縁部に補修孔 あり、外面スス 付着、焼き不明
100	内筒 深鉢	口縁部 ～底部	B区V層	推定 15.0	6.3	19.5	口縁部はココナ デ、上部は横・ 斜方向の只染条 痕文、下部は縦 方向のナデ、底 部はミガキ	指頭痕あり、 縦・斜方向の ミガキ	橙 (7.5YR 6/6)	に ぶ い 黄 褐 (10YR 7/4) に ぶ い 黄 褐 (10YR 6/3)	3mm以下の淡黄 色粒・灰白色粒 と2mm以下の金 色光沢粒・無色透 明粒を多く含む、 1mm以下の黒色 粒・褐灰色粒・黒 色光沢粒を含む	約1/3	外面スス付着、 内面黒斑あり、 内外面ともに気 泡状の穴多し
101	深鉢	口縁部 ～胴部	A区V層				ナデ	ナデ	明 赤 褐 (5YR 5/8) に ぶ い 橙 (7.5YR 6/4)	明 赤 褐 (5YR 5/8)	6mm以下の灰白 色 粒 1 粒、4mm 以下の淡褐色粒、 2mm以下の黒色 光沢粒・赤褐色粒・ 灰白色粒を含む		焼き不明
102	深鉢	口縁部	B区V層				口縁部ミガキ、 口縁部は横・斜 方向のナデ	横方向のミガ キ、指頭痕、工 具による斜方 向のナデ	橙 (7.5YR 6/6) 黒 褐 (7.5YR 3/1)	に ぶ い 黄 褐 (10YR 5/4)	1mm以下の灰白 色粒・灰色粒・金 色光沢粒・黒色光 沢粒を含む		外面スス付着、 内面黒斑、内外 面ともに気泡状 の穴多し
103	深鉢	口縁部	B区V層				工具による斜方 向のナデ、全体 に浅い指頭痕あ り	工具による横・ 斜方向のナデ、 工具痕と指頭 痕あり	明 赤 褐 (5YR 5/8)	明 赤 褐 (5YR 5/6)	2mm以下の淡橙 色粒と1.5mm以 下の黒色光沢粒を 含む、約5mm大 の黒褐色粒が1粒 付着	約1/8	外面スス付着、 内面炭化物付着

第12表 縄土器観察表6

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
104	深鉢	口縁部	B区V層				横方向のナデ、指頭痕あり、細かい横線痕あり	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕あり	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	明赤褐 (2.5 YR 5/6)	1mm以下の灰白・淡褐色粒を含む		外面スス付着、内面一部黒変
105	深鉢	口縁部	B区V層					工具による横・斜方向のナデ、指頭痕あり	赤褐 (5YR 4/6)	褐 (7.5 YR 4/3)	2mm以下の赤褐色粒を含む		外面スス付着、内面黒変
106	深鉢	口縁部～胴部	B区V層				工具による縦・斜方向のナデ後、横方向に工具痕、指圧痕あり	指ナデの後、工具によるナデ	にぶい黄褐 (10 Y-R 7/4)	灰黄褐 (10YR 6/2)	1mm以下の乳白色・黒色・無色透明粒を含む	口径は約1/7	外面スス付着、内面黒変と接合痕あり
107	深鉢	口縁部～胴部	A区V層				横・斜方向ナデ、口唇部ヨコナデ	工具による縦・横・斜方向ナデ	浅黄褐 (10YR 8/4)	浅黄褐 (10YR 8/4)	3mm以下の明褐色粒・灰白色粒・白色透明光沢粒・黒色光沢粒を含む		
108	深鉢	口縁部～胴部	A区V層				工具による縦・横・斜方向ナデ	工具による縦・斜方向ナデ	にぶい黄褐 (10YR 6/4)	橙 (5YR 7/6) にぶい黄褐 (10YR 6/4)	8mm程度の灰白色の内ばった粒を3粒含む、4mm以下の灰白色粒・浅黄褐色粒を含む、3mm以下の明褐色粒・無色透明光沢粒を含む		
109	深鉢	口縁部	A区V層				上部：横ナデ、下部：横・斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	にぶい黄褐 (10YR 7/3) にぶい橙 (7.5YR 7/4)	4mm以下のにぶい褐色粒・灰白色粒を含む、2mm以下の明褐色粒・浅黄褐色粒を含む		外面全体的にスス付着
110	深鉢	口縁部	B区V層				横方向のナデ、指頭痕あり	横方向のナデ、下部は指押さえの後、工具による斜方向のナデ	にぶい黄褐 (7.5 YR 5/4)	明赤褐 (5YR 5/6)	2mm以下の黒色光沢粒と褐灰色粒を含む、約5mm大の赤褐色粒と約6mm大の灰白色粒が1粒ずつ付着		外面スス付着、接合痕あり
111	深鉢	口縁部	B区V層				横・斜方向のナデ、浅い指頭痕あり	横・斜方向のナデ、指頭痕あり	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	にぶい黄褐 (10YR 5/4)	3mm以下の黒色光沢粒・浅黄褐色粒・灰白色粒・褐灰色粒を含む		外面スス付着、内面接合痕あり
112	深鉢	口縁部	B区V層				工具による横ナデ	工具による横・斜方向のナデ、指頭痕あり	にぶい黄褐 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5 YR 7/3)	3mm以下のにぶい赤褐色粒・黒褐色粒と1mm以下の暗褐色粒・灰白色粒を含む		外面一部スス付着

第13表 縄文土器観察表7

遺物 番号	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
113	深鉢	L1脚部	A区V層				斜方向へのナ デ、口脚部横 ナデ	指つまみ、上 段による横方 向のナデ	明褐 (7.5R 5/6) にぶい赤褐 (5YR 4/2)	明赤褐 (5YR 5/6)	2mm以下の灰 白色粒・褐灰色 粒を含む。1mm 以下の浅黄褐色 粒・白色透明光 沢粒を含む		外面は全体 的にスス付 着、全体的 に黒っぽい
114	深鉢	胴部～底部	B区V層		推定 1.88		ナデ	ナデ、指頭痕 あり	浅黄 (2.5Y 7/3)	明黄褐 (10YR 7/6)	1mm以下の乳 白色粒・黒色粒 2mm程の黒色 光沢粒を含む	底部は約 1/4	
115	深鉢	胴部～底部 (尖底)	A区V層		0.6		丁寧なナデ (ミガキの可 能性もあり)	ナデ	明赤褐 (5YR 5/6)	明褐 (7.5YR 5/6)	3mm以下の灰 白色粒、2mm 以下の灰褐色粒 を含む	底部は完形	
116	深鉢	底部	B区V層		推定 7.0		ナデ	ナデ、指頭痕 あり	にぶい褐 (7.5 YR 7/4)	明褐 (7.5YR 6/1)	2mm以下の乳 白色粒・黒色光 沢粒・透明光沢 粒・褐灰色粒を 含む	底部の約 1/4	
117	深鉢	胴部～底部	B区V層				ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 6/2)	約5mm以下の 褐色粒・褐灰色 粒を含む		内外面接合 痕あり、外 面スス付 着、内面灰 化物付着
118	深鉢	底部	B区V層				ナデ	ナデ、指頭痕 あり	明赤褐 (5YR 5/6)	明褐 (7.5YR 5/6)	1mm以下の乳 白色粒・黒色粒・ 透明粒・黒色光 沢粒を含む	底部の約 1/4	
119	深鉢	底部	B区V層				ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR 7/4)	にぶい黄褐 (10YR 7/3)	1mm以下の黒 色粒・乳白色粒 を含む	底部の約 1/4	
120	深鉢	底部	A区V層		10.8		斜方向ナデ	斜方向ナデ	明赤褐 (5YR 5/8)	明褐 (7.5YR 3/1)	5mm以下の粒 子を含む	約1/6	底部に割離 痕
121	深鉢	胴部	B区V層				縦方向のナデ (一部ミガキ あり)	縦方向へのミ ガキとナデ	明 (5 YR 6/6)	にぶい黄 (2.5YR 6/4)	1mm以下の灰 白色粒・無色透 明光沢粒・淡黄 色粒を含む	胴部の1/3	外面一部ス ス付着、内 面一部黒痕 あり。内外 面ともに気 泡状の穴多 し

第 14 表 縄文時代石器計測表 1

遺物番号	部種	出土位置	グリッド	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
60	削器	SI6		ホルンフェルス	5.0	7.9	2.1	108.91	
61	打石	SI43		砂岩	13.4	22.5	6.4	2877.30	
62	石斧	SP5		ホルンフェルス	12.0	6.0	2.6	204.89	
63	削器	SC103		ホルンフェルス	6.5	10.6	1.7	124.40	
122	石鏃	V層	E15	黒曜石桑ノ木津留	2.0	1.5	0.4	0.79	
123	石鏃	V層	F8	黒曜石桑ノ木津留	1.2	1.0	0.2	0.20	
124	石鏃	V層	G14	黒曜石白重	1.4	1.1	0.6	0.76	
125	石鏃	V層	C7	チャート	1.3	1.0	0.2	0.26	
126	石鏃	V層	C7	チャート	2.4	1.3	0.5	0.92	
127	石鏃	V層	C8	チャート	2.1	1.3	0.4	0.53	
128	石鏃	V層	E7	チャート	1.9	1.4	0.4	0.65	
129	石鏃	V層	A6	チャート	1.9	1.7	0.4	1.26	
130	石鏃	V層	B6	チャート	0.9	1.2	0.2	0.22	
131	石鏃	V層	B7	チャート	1.4	1.7	0.5	0.64	
132	石鏃	V層	B9	チャート	1.6	0.9	0.3	0.47	
133	石鏃	V層	C8	チャート	2.2	1.2	0.4	0.61	
134	石鏃	V層	G12	チャート	2.2	1.5	0.3	0.59	
135	石鏃	V層	G12	チャート	2.7	2.2	0.4	2.24	
136	石鏃	V層	F12	チャート	2.2	1.4	0.3	0.71	
137	石鏃	V層	F11	チャート	1.9	1.4	0.3	0.70	
138	石鏃	V層	G13	チャート	3.1	1.2	0.3	0.90	
139	石鏃	V層	G14	チャート	1.7	1.5	0.3	0.56	
140	石鏃	V層	E15	チャート	2.4	2.2	0.4	1.24	
141	石鏃	V層	F12	チャート	1.7	1.5	0.4	0.55	
142	石鏃	V層	D14	チャート	1.7	1.3	0.3	0.33	
143	石鏃	V層	B6	チャート	2.6	1.8	0.3	1.37	
144	石鏃	V層	F8	チャート	1.8	1.7	0.3	0.61	
145	石鏃	V層	E9	赤チャート	1.9	1.6	0.3	0.48	
146	石鏃	V層	G12	赤チャート	2.9	2.0	0.5	2.16	
147	石鏃	V層	D16	流紋岩	1.7	1.3	0.3	0.48	
148	石鏃	V層	E15	ホルンフェルス	1.5	1.4	0.2	0.43	
149	石鏃	V層	G12	ホルンフェルス	2.1	1.2	0.4	1.24	
150	石鏃	V層	不明	ホルンフェルス	2.0	1.6	0.3	0.90	
151	石斧	V層	D12	ホルンフェルス	5.2	8.4	2.3	116.13	
152	石斧	V層	F14	ホルンフェルス	7.5	6.1	2.2	155.90	
153	石斧	V層	G13	ホルンフェルス	9.0	5.7	2.7	171.48	
154	石斧	V層	不明	ホルンフェルス	9.2	5.8	2.8	155.99	
155	石斧	V層	E12	ホルンフェルス	11.9	9.1	3.8	426.86	
156	削器	V層	F12	流紋岩	4.3	5.3	1.0	25.74	
157	削器	V層	F11	流紋岩	4.7	5.1	1.3	18.12	
158	削器	V層	G13	ホルンフェルス	3.2	3.8	0.9	11.61	
159	削器	V層	E13	ホルンフェルス	6.6	3.3	1.2	21.48	
160	削器	V層	G10	ホルンフェルス	7.8	6.7	2.2	130.57	
161	鏃器	V層	G15	ホルンフェルス	10.7	10.2	2.0	263.17	
162	鏃器	V層	G15	ホルンフェルス	6.9	7	2.2	123.79	
163	鏃器	V層	E17	ホルンフェルス	11.9	12.2	4.5	702.56	
164	鏃器	V層	H13	ホルンフェルス	5.2	11.1	1.0	77.13	
165	鏃器	V層	G15	ホルンフェルス	4.5	7.8	2.2	102.28	
166	鏃器	V層	G14	ホルンフェルス	5.6	7.6	1.5	79.65	
167	鏃器	V層	G12	ホルンフェルス	6.2	8.9	1.5	106.12	
168	鏃器	V層	G11	ホルンフェルス	5.2	6.9	1.5	61.54	
169	鏃器	V層	G11	ホルンフェルス	7.4	8.3	2.5	170.31	
170	鏃器	V層	F12	ホルンフェルス	7.8	8.1	2.1	182.48	
171	鏃器	V層	G14	ホルンフェルス	9.4	10.8	3.3	431.70	
172	鏃器	V層	G14	ホルンフェルス	9.7	8.1	2.5	192.48	
173	鏃器	V層	F15	ホルンフェルス	7.8	7.9	2.3	186.39	
174	鏃器	V層	E13	ホルンフェルス	4.4	6.1	1.5	44.33	
175	鏃器	V層	E12	ホルンフェルス	11.1	4.8	1.8	73.41	
176	鏃器	V層	F18	ホルンフェルス	6.8	11.7	2.9	184.20	
177	鏃器	V層	D15	ホルンフェルス	13.6	8.5	1.9	302.41	
178	鏃器	V層	E16	ホルンフェルス	6.7	10.4	3.4	320.96	

第15表 縄文時代石器計測表2

遺物番号	器種	出土位置	グリッド	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
179	磯器	V層	G13	ホルンフェルス	7.7	10.2	2.8	224.48	
180	磯器	V層	E13	ホルンフェルス	5.7	9.0	2.3	153.78	
181	磯器	V層	E16	ホルンフェルス	5.1	10.0	1.7	86.87	
182	磯器	V層	D13	ホルンフェルス	12.4	7.2	2.6	292.37	
183	磯器	V層	F10	ホルンフェルス	8.2	7.6	3.1	191.60	
184	磯器	V層	G10	ホルンフェルス	5.9	7.9	2.4	105.36	
185	磯器	V層	F11	ホルンフェルス	8.0	7.8	2.1	174.90	
186	磯器	V層	E13	ホルンフェルス	10.1	6.9	2.8	173.65	
187	磯器	V層	D13/E13	ホルンフェルス	9.1	7.7	3.2	280.97	
188	磯器	V層	E13	ホルンフェルス	12.2	6.1	4.5	173.65	
189	磯器	V層	H13	ホルンフェルス	9.0	13.3	4.7	601.98	
190	磯器	V層	G11	ホルンフェルス	5.5	8.6	2.4	96.43	
191	磯器	V層	G11	ホルンフェルス	7.7	13.5	2.6	329.29	
192	磯器	V層	H13	ホルンフェルス	13.5	7.3	3.4	308.69	
193	礫石	V層	E15	尾跡山酸性岩類	11.2	7.0	4.6	508.91	
194	礫石	V層	E14	尾跡山酸性岩類	7.7	7.3	6.1	405.38	
195	礫石	V層	E9	砂岩	9.8	8.9	4.5	523.00	
196	礫石	V層	D9	尾跡山酸性岩類	10.0	8.4	4.9	748.00	
197	礫石	V層	D9	尾跡山酸性岩類	9.0	7.8	4.3	448.20	
198	礫石	V層	不明	尾跡山酸性岩類	9.6	10.7	5.0	783.10	
199	礫石	V層	F16	尾跡山酸性岩類	10.5	8.7	4.8	630.30	
200	礫石	V層	G14	尾跡山酸性岩類	12.9	9.9	4.5	913.30	
201	礫石	V層	F12	砂岩	14.6	6.9	3.1	428.33	
202	台石	V層	C7	砂岩	18.4	11.3	5.2	1499.80	
203	台石	V層	E15	尾跡山酸性岩類	23.3	30.6	10.2	9700.00	
204	台石	V層	G12	尾跡山酸性岩類	21.5	35.5	13.4	1500.00	
205	台石	V層	F16	砂岩	28.9	43.0	7.1	13100.00	
206	台石	V層	E15	尾跡山酸性岩類	24.9	28.2	9.5	9200.00	
207	台石	V層	F14	尾跡山酸性岩類	21.2	26.8	8.9	7900.00	
208	台石	V層	D13	尾跡山酸性岩類	30.6	38.8	14.3	19200.00	
209	台石	V層	G13	尾跡山酸性岩類	30.8	34.2	14.0	18800.00	
210	台石	V層	H13	尾跡山酸性岩類	27.6	35.1	19.7	29600.00	
211	二次加工剥片	V層	B8	チャート	2.9	2.7	0.8	5.45	
212	二次加工剥片	V層	F14	流紋岩	3.6	2.2	0.8	4.72	
213	使用痕剥片	V層	E14	流紋岩	6.5	2.2	0.8	8.02	
214	剥片	V層	G12	黒曜石燻ノ木津留	1.7	1.0	0.7	1.49	
215	剥片	V層	G12	黒曜石燻ノ木津留	2.3	1.7	0.9	3.03	
216	剥片	V層	E12	黒曜石燻ノ木津留	1.5	2.2	0.8	1.54	
217	剥片	V層	E12	黒曜石燻ノ木津留	3.1	1.4	1.0	4.55	
218	剥片	V層	D10	黒曜石白東系	2.2	1.9	1.0	3.98	
219	剥片	V層	不明	黒曜石白東系	2.1	2.2	0.7	2.68	
220	剥片	V層	F8	壱島無珉品安山岩	4.4	3.7	0.9	12.96	
221	剥片	V層	G12	流紋岩	5.0	1.1	0.6	3.39	
222	剥片	V層	不明	ホルンフェルス	7.6	8.6	2.2	162.93	
223	剥片	V層	不明	ホルンフェルス	7.1	7.5	1.3	78.89	
224	石核	V層	G14	黒曜石燻ノ木津留	2.0	1.3	1.0	1.92	
225	石核	V層	F13	黒曜石燻ノ木津留	2.5	1.1	1.2	3.09	
226	石核	V層	H15	黒曜石燻ノ木津留	1.9	2.2	1.0	3.72	
227	石核	V層	E16	チャート	3.4	3.2	1.3	15.85	
228	石核	V層	不明	チャート	3.8	4.0	1.3	23.39	
229	石核	V層	H13	ホルンフェルス	11.8	10.3	5.6	686.90	
230	石核	V層	C9	ホルンフェルス	7.1	8.6	1.1	76.20	
231	石核	V層	G16	ホルンフェルス	9.2	6.8	3.7	230.92	
232	石核	V層	G11	ホルンフェルス	10.1	7.1	4.1	344.46	
233	石核	V層	D12	ホルンフェルス	6.8	11.9	4.8	386.02	
234	石核	V層	F10	ホルンフェルス	7.9	8.5	2.3	220.05	
235	石核	V層	H12	ホルンフェルス	10.1	11.0	4.3	394.67	
236	石核	V層	D12	ホルンフェルス	9.7	11.6	13.4	1865.27	
237	石鏝	V層	不明	チャート	1.6	1.4	0.3	0.48	
238	石核	V層	不明	黒曜石燻ノ木津留	1.4	2.3	1.1	3.49	

第3節 弥生時代終末期の遺構と遺物

(1) 調査の概要

表土・客土の除去後、鬼界阿カホヤ火山灰（以下、K-Ahと略す）でそろえて遺構検出をした結果、A区では、K-Ahの残存状況の良い調査区の南側や西側部分を中心にして、弥生時代終末期の竪穴住居跡7軒、土坑11基、周溝状遺構1基が検出された。しかしB区では、弥生時代の遺構や遺物は確認されなかった。

なお、弥生時代終末期の包含層は、IV層（K-Ah）直上のⅢ層（クロボク）に該当する。しかしA区では攪乱等により、Ⅲ層の残存状況は極めて良くなかった。

(2) 弥生時代終末期の環境

該当期の古地形は、遺構が検出されたA区に関しては、縄文時代草創期～早期の状況から大きな変化はなかったと思われる。

また弥生時代終末期の竪穴住居跡2軒（SA3・SA7）と周溝状遺構（SL1）から出土した炭化種子・果実を自然科学分析にかけた結果、SL1出土のものは、イネとカヤツリグサ科の果実、SA3出土のものはイネ、カヤツリグサ科の果実、コキンバイザサ、アカネ科の種子、SA7出土の炭化種実はずばらじやコナラ属の子葉片、モモの核片と同定された（詳細は第IV章 自然科学分析を参照）。当時の遺跡周辺の自然環境の一端が窺われる。

(3) 弥生時代終末期の竪穴住居跡と出土遺物

本遺跡では、K-Ah上面で竪穴住居跡が7軒検出された。この項では、本遺跡で検出された竪穴住居跡と出土遺物について、その詳細を示す。

なお隣接する湯牟田遺跡では、弥生時代の焼失住居跡が多く検出されたが、本遺跡の竪穴住居跡の遺構埋土中（灰を除く）からは炭化材は検出されておらず、対称的な状況である。

以下、遺構検出状況と出土遺物の詳細を示す。

○SA1（第57図）

A区E6グリッドで検出された。SA2により遺構南側の一部を切られ、また遺構の東側半分は調査区

外に伸びていることから、平面プランは特定しにくい。一辺3.4m程度の隅丸方形であることが予想される。検出面から床面までの深さは、0.13mである。

遺構中央部に直径0.2mほどの土坑を検出したが、焼土・炭化物は検出されず、炉と断定することは出来なかった。また柱穴は検出されなかった。なお遺物は、多くは床面に張り付く形で出土した。

◇土器（第64図239）

239は器台の裾部であり、端部に4条から5条の沈線が見られる。なお土器外面に糊圧痕が見られる（図版17）。床面直上の出土である。

◇石器（第70図317～319）

317は石庖丁未製品、318は斧状石器、319は搬入礫である。317と318の石材はホルンフェルスであり、319は尾鈴山酸性岩類である。3点ともに床面直上で出土した。

○SA2（第57図）

遺構の東北隅部分だけがA区E6グリッドで検出されたので、平面プランは不明であるが、検出面からの床面までの深さは、0.19mである。SA2はSA1を切っている。またSA2は、本遺跡の竪穴住居跡の中では、唯一、貼床と壁溝溝を有する。遺物は具体的な出土位置は不明であるが、埋土中で土器が1点だけ出土している。

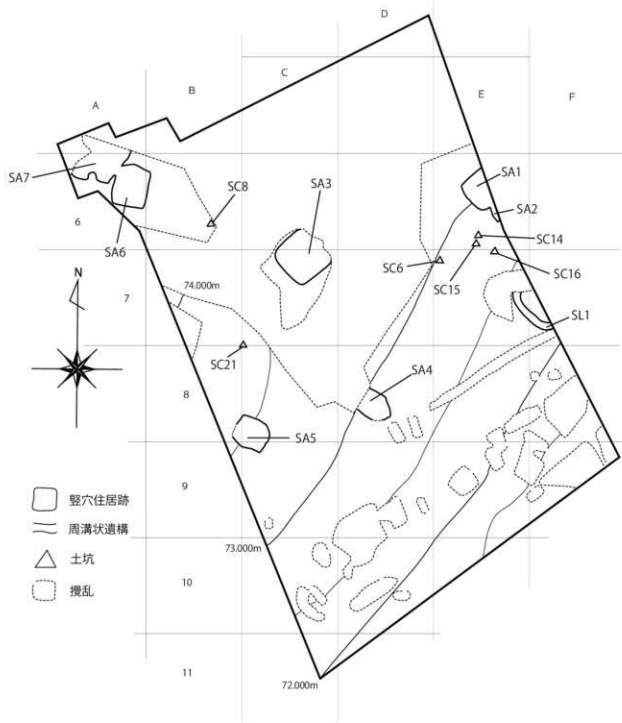
◇土器（第64図240）

240は甕の底部であり指頭圧痕が明瞭に残る。SA2で出土した唯一の遺物である。

○SA3（第58図）

A区C6とC7グリッドにまたがり検出された。一辺4.8mの隅丸方形プランであり、検出面から床面までの深さは0.32mである。

炉は住居跡の中央部で検出された。やや大きめの炭化材が3点出土した他、細かい炭化材も多く出土している。なお、フローテーション法（本章第6節参照）により、炉の周囲の土から、炭化種実が15点出土しており、自然科学分析でイネやアカネ科の種子と同定された（詳細は第IV章 自然科学分析を参照）。炭化したイネは、C14放射性炭素年代測定により、AD60年という測定値を得ている。



※SC4・SC5・SC9・SC10・SC11の位置については、SA7実測図を参照



第56図 弥生時代遺構分布図 (1/400)

柱穴は10基検出されたが、P1～P7とP10の8基が、検出面からの深さが0.2m以下であるのに対して、炉の東側にあるP9と炉の西側にあるP8の2基は、ともに0.6m程度の深さがある。よって、この2基がSA3の主柱穴であると思われる。

また、P1～P3の3基は、住居跡内の西側隅部分で、P5～P7の3基は、住居跡内の南側隅部分で、一直線上に狭い間隔で並んでいる状態で検出された。

なお、P4は住居跡内の北側角で、P10は南側角で検出され、この2基は住居跡の対角線上に配置されていることが確認された。

これらの浅い8本の柱穴が、副次的な柱穴として利用されたのか、また柱穴利用以外に別の用途があったかは不明である。

遺物は多量の弥生土器片と石器が、床面から少し浮いた状態で出土した。住居跡内での土器片の接合状況を見ると、多くの土器で、近辺で出土したものと土で接合することが多いことから、堅穴住居廃絶後、遺物の一括廃棄が複数回行われたことが示唆される。

◇土器 (第64図241～第67図282)

実測・掲載したのは、甕17点、壺12点、鉢8点、脚台付鉢2点、高環2点、杓子状土製品1点の合計42点である。

241～257は甕である。

241～245は、器高約25cm、口径が胴部最大径と同じか、やや小さい値を示す一群である。口縁部はくの字状を呈し、その端部は面取りされる。247～249・253は、口縁部が大きく外に逆「ハ」の字状に広がる一群である。

250・251は、ゆるく外反する短い口縁部を有する甕である。252は広口壺の可能性もある。

17点のいずれも指や工具による調整を基本としているが、245と251の外表面のみハケ目の調整が見られる。

258～269は壺である。倒卵形の胴部を基調とする。

258は、本遺跡出土の弥生土器の中でも最も大きな器形をもつことが注目される。ただ口縁部は接合痕を残して失われている。

259～264は器高24cm～32cmをはかる一群

である。259は、ほぼ完形に近い。259・260は、外面に工具によるミガキが施されている。

265・266は器高約16cm程度のグループに分類される。

267・268は壺の単口縁であるが、268は複合口縁で、外面に刺突及び櫛描波状文を有する。

269は壺の底部である。

270～277は鉢であり、270・271・273・274・276は口縁が大きく外に開くタイプ、275は口縁が外反するタイプである。273は口縁端部が短く外側へ突出する。口縁が大きく開くタイプのうち、270・271・274は口縁端部を面取り調整し、276は丸くまとまる。

272は小型の鉢、277は鉢の底部である。

鉢類は、いずれも指と工具によるナデ調整を基本としているが、270と272では内外面ともにハケ目調整が見られる。

278・279はともに脚台付鉢の脚部である。

280・281は高環の脚部であり、ともに円形透かしを有する。

282は杓子状土製品である。把手部分が欠失している。

◇石器 (第70図320～第71図334)

SA3より出土した石器は、磨製石庖丁が5点(320…頁岩製、321～324…ホルンフェルス製)、砥石が1点(325…ホルンフェルス製)、磨石が4点(326…砂岩製、327～329…尾鈴山酸性岩類製)、凹石が1点(330…尾鈴山酸性岩類製)、搬入礫が1点(331…砂岩製)、台石が3点(332…砂岩製、333…尾鈴山酸性岩類製、334…ホルンフェルス製)である。

320の磨製石庖丁は、他の4点の挟り入り磨製石庖丁とは石材が異なると同時に、穿孔を有する点でも他の4点とは異なる。

332は大型の台石であり、また、333と334の台石は、それぞれ割れた状態で出土したが、接合の際、SA7で出土した台石の一部と接合できたことが注目される。

○SA4 (第60図)

A区内D8グリッドで検出されたが、攪乱と樹根の影響で、平面プランの特定ができなかった。検出

面から床面までの深さは0.12 mである。

埴が竪穴住居跡内の北側部分で検出されており、そこから若干の焼土が確認された。

柱穴、貼床は検出されず、遺物は床面に張り付いた状態で土器片が出土した。以下、その概要である。

◇土器 (第68図 283～285)

裏3点を掲載した。底部のみであるが、SA3出土の裏とは違い、外面にタタキの技法を有するものがある(283・284)。

○SA5 (第60図)

A区B8・B9・C8・C9グリッドにまたがり検出された一辺3.2mの隅丸方形プランを呈する竪穴住居跡である。検出面から床面までの深さは0.16 mである。埴・貼床・柱穴は確認できなかった。

遺物は、床面に張り付いた状態で、土器片が出土した。

◇土器 (第68図 286～287)

高環(287)と裏(286)を掲載した。高環は円形透かしを有し、裏は、口縁が大きく外に開くタイプのものである。

◇石器 (第72図 335～336)

335は挟入り磨製石砲丁、336は磨石である。335は頁岩製であり、336は尾鈴山酸性岩類製である。

○SA6 (第61図)

A区のA6グリッドとB6グリッドにまたがって検出された一辺4.5mの隅丸方形プランを呈する竪穴住居跡であり、検出面から床面までが、かなり浅く0.06 mほどしか残存していない。貼床は認められず、柱穴は住居の西南隅で2基検出されている。

住居跡の中央部で、検出面からの深さ0.1 mほどの埴が検出され、やや大きめの炭化材が1点と細かい炭化材がわずかに検出された。なお、埴のすぐ北側に、埴とほぼ同規模の土坑が検出されているが、検出面からの深さも埴と同程度であり、炭化材が出土していないことから、使用されなくなった埴である可能性も指摘できる。

土器片は床面に張り付いた状態で出土した。

◇土器 (第68図 288)

裏(288)のみを掲載した。底部のみの出土である。

◇石器 (第72図 337～338)

337はホルンフェルス製の砥石、338は尾鈴山酸性岩類の磨石である。

○SA7 (第61図)

A区のA5グリッドとA6グリッドにまたがり、SA6と切り合う状態で検出されたが、その切り合い関係は判然としなかった。検出面から床面までの深さは0.32 mである。

SA7は本遺跡の竪穴住居跡で唯一の花弁状住居跡である。貼床は存在しない。間仕切り部分は、竪穴住居跡南側の2箇所確認されている。

柱穴は、住居跡の四隅部分に1基ずつ、合計で4基が検出されている。

埴は住居跡の中央部で検出した。検出面からの深さは0.1 mである。埋土中には細かい炭化材が含まれていた。

遺物は、床面に張り付いた状態で、土器片と石器が出土したが、他に自然遺物として、ツブラジイ・コナラ属・モモの炭化種実3点が出土した。種実同定に関する詳細は、第IV章の「自然科学分析」に譲るが、その内の2点をC14放射性炭素年代測定にかけた結果、AD100年とAD110年の測定値を得ている。

◇土器 (第68図 289～297)

289～292の4点は裏である。289と291は、顔部のくびれが目立つが、290・292では、口縁部は大きく外反する。

293は壺である。

294と295は高環であり、294は坏部、295は脚部であるが、それぞれ別個体である。

296は裏、297は小型の鉢である。

◇石器 (第72図 339～第73図 349)

SA7からは、石鏃が4点出土した。他の竪穴住居跡では出土しておらず注目される。339のみがホルンフェルス製の打製石鏃であり、340～342は緑色頁岩製の磨製石鏃である。

打製石鏃(339)は、平面二等辺三角形で基部の挟りは深い。磨製石鏃は、3点ともに平面二等辺三角形であるが、基部の形状に関しては、平基のもの(340・341)と浅い凹基のもの(342)に分類することができる。

343は磨製石庖丁未製品であり、344は、343製作の際に剥離された剥片である。

345はホルンフェルス製の挟入り磨製石庖丁である。

346と347はシルト岩製の砥石である。法量的にはほぼ同一である。

348と349は尾鈴山酸性岩類の磨石で、この形状の磨石は、他の竪穴住居跡(SA3・SA5・SA6)でも出土している。

(4) 弥生時代終末期の土坑と出土遺物

弥生時代終末期の土坑はA区のK-Ah上で11基が検出されている。そのうちの5基は、竪穴住居跡と切り合った状態で検出された。詳細については、「第17表 土坑一覧表」による。

11基のうち、A区のE6・E7グリッドで4基(SC6・SC14・SC15・SC16)が集中して検出され、A区西側部分では、SC8がB6グリッドで、SC21がC7グリッドで検出された。これらの6基については、切り合い関係はない。

なお、本遺跡A区では、樹痕が多かったため、遺構として掘削した後、完備後の検討の結果、遺構の認定をはずしたものが多くある。その結果、土坑の遺構番号には欠番が多い。

またA区西北隅のSA7と切り合う土坑のうち、4基(SC4・SC5・SC10・SC11)はSA7東側部分で集中して検出され、SC9のみがSA7西北隅部分の離れた位置で検出された。これらの5基の土坑は、竪穴住居跡SA7に伴うかどうかは不明である。

平面での検出状況は、SC6とSC8が長径0.5m～0.7mほどの楕円形プラン、SC16とSC21が一回辺1.4m～1.8m程度の方形プラン、残りの7基(SC4・SC5・SC9・SC10・SC11・SC14・SC15)が長径0.4m～0.5m程度の円形プランを示す。

これらの土坑のうち、SC5・SC6・SC9・SC10・SC14・SC16・SC21からは、埋土中で弥生土器片が数点ずつ出土しており、SC10からは、土器片に加えて石器も2点(砥石・凹石)出土した。しかし、焼土や炭化物はいずれの土坑でも確認できていない。

以下、土坑出土の遺物の詳細を、遺構番号順に記載す。

【SC5】

◇土器(第69図298～299)

SC5出土土器として裏2点を掲載した。頸部のしまりが緩いタイプ(298)と、頸部のしまりが強いタイプ(299)の2種類の裏が出土した。

【SC6】

◇土器(第69図300)

300は鉢である。SA3出土の鉢(270～277)よりも、底部付近の立ち上がりが急である。

【SC10】

◇石器(第73図350～351)

350は砂岩製の砥石、351は尾鈴山酸性岩類製の凹石である。

【SC13】

◇土器(第69図301)

301は高坏の裾部である。

【SC14】

◇土器(第69図302～305)

302～305は、裏である。302と305は、外面にタタキの調整を有する特徴がある。

303の底部は、やや上げ底気味を呈し、本遺跡出土の弥生土器(裏)の中で、やや古式の特徴を示す。

(5) 弥生時代終末期の周溝状遺構と出土遺物

本遺跡では、弥生時代終末期の遺構としては、竪穴住居跡と土坑の他に、周溝状遺構が1基検出された(第63図)。

本遺跡A区の、F7とE7グリッドにまたがり検出されている。遺構の半分以上が調査区外に広がるが、一辺約6mの隅丸方形プランを呈すると考えられる。周溝状であった可能性もあるが、調査区内に墓塚である主体部は検出できなかった。溝の幅は約0.7m、深さは約0.25mである。

なお周溝状遺構の周溝底面の土をフローテーション法で洗浄し、イネなど4点の炭化種実片を採取することができた。種実同定の詳細は第IV章に譲るが、炭化種実をC14放射性炭素年代測定にかけた結果、BC50年という測定値を得ており、前述の

竪穴住居跡 (SA3・SA7) から出土した炭化種実と比較して古い年代に所属すると推定される。

遺物は、土器片が周溝の底面から少し浮き、散在した状態で出土した。

◇土器 (第 69 図 306～316)

306～309 は、甕である。308 の底部は、接地面の広い平底で、307 よりも古式の特徴を示す。

310 は小型の壺であり、311～313 は壺である。311 の口縁は、外に開かず、口が小さい点に特徴がある。313 の底部は、平底である。

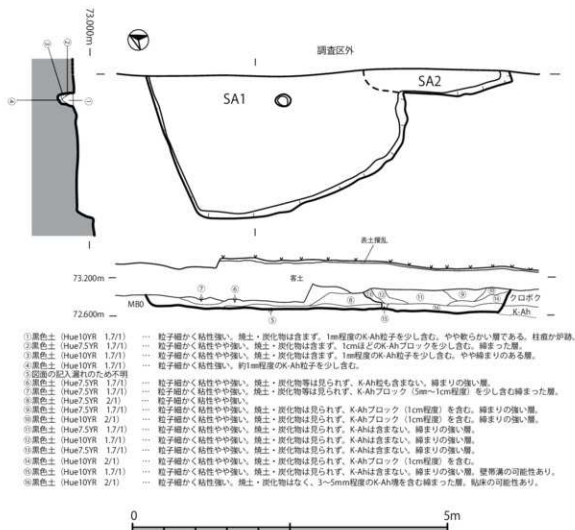
314～316 は、高坏である。

(6) III層包含層出土の土器 (第 74 図 352～358)

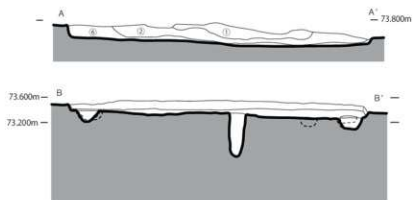
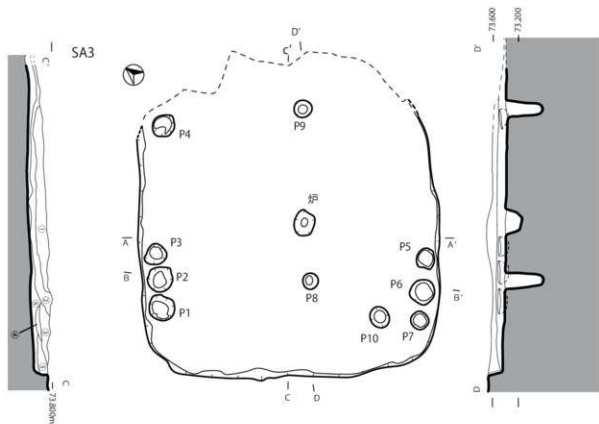
352・353 は壺、354 は鉢である。355～358 は甕または壺である。353 は胴部に突帯を有する壺である。いずれも III層という層位以外に、詳細な出土位置は不明である。

(7) 攪乱出土の石器 (第 74 図 359)

359 は、ホルンフェルス製の抉入り磨製石庖丁であり、A区北端の攪乱中から出土した。



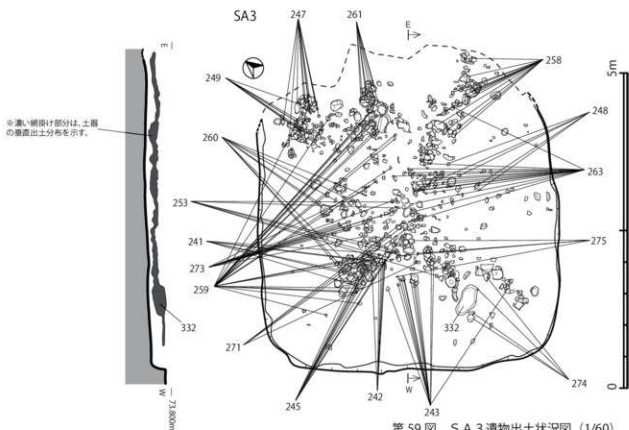
第 57 図 SA1・SA2 実測図 (1/60)



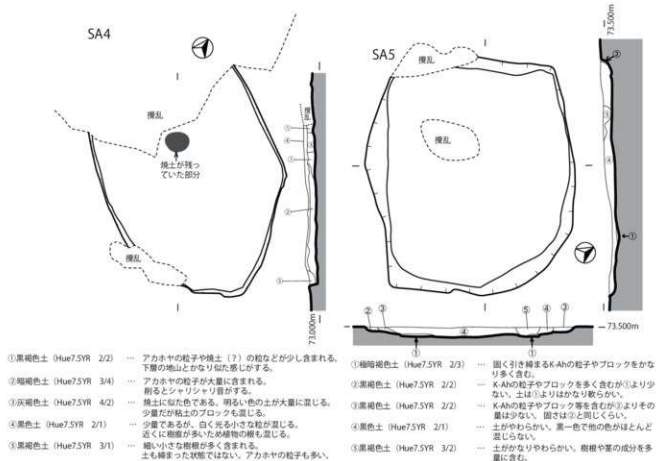
- | | |
|------------------------|----------------------------------------|
| ① 黒色土 (Hue7.5YR 1.7/1) | --- 粒子細かく粘性やや弱い。締まりのやや強い層。 |
| ② 黒色土 (Hue10YR 1.7/1) | --- 粒子細かく粘性やや強い。K-A hは含まず。締まりのやや強い層。 |
| ③ 黒褐色土 (Hue10YR 2/1) | --- 粒子細かく粘性やや弱い。K-A hをわずかに含む締まりのやや強い層。 |
| ④ 黒色土 (Hue10YR 1.7/1) | --- 粒子細かく粘性弱い。K-A hの混入しない締まりの強い層。 |
| ⑤ 黒色土 (Hue10YR 2/1) | --- 粒子細かく粘性やや弱い。少しK-A h粒を含む。 |
| ⑥ 黒褐色土 (Hue10YR 2/2) | --- 粒子細かく粘性やや強い。K-A h粒をわずかに含む。 |



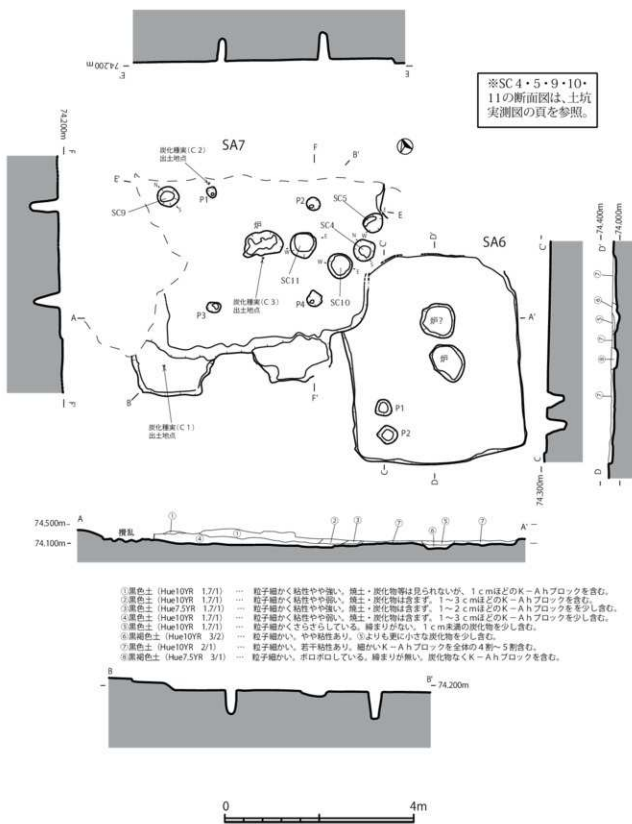
第 58 図 SA 3 実測図 (1/60)



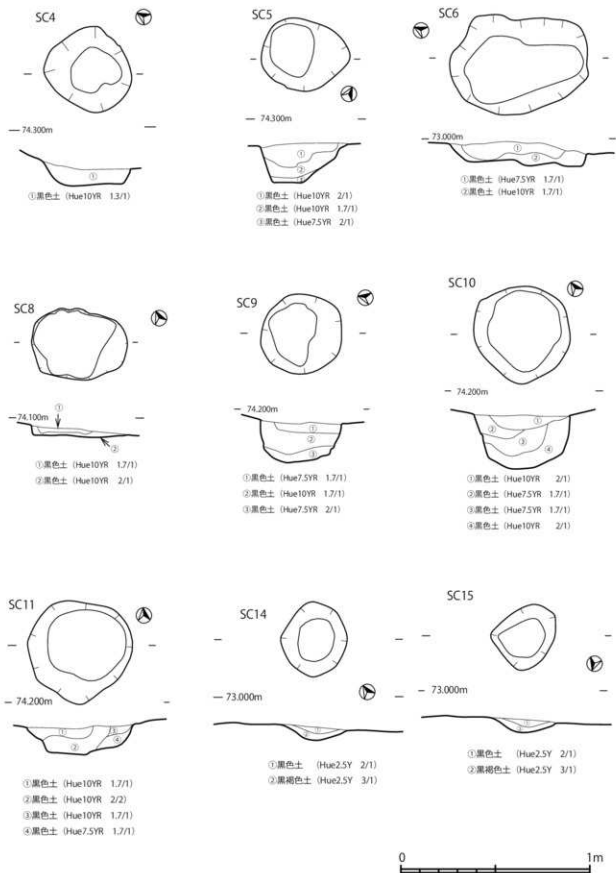
第59図 SA3遺物出土状況図 (1/60)



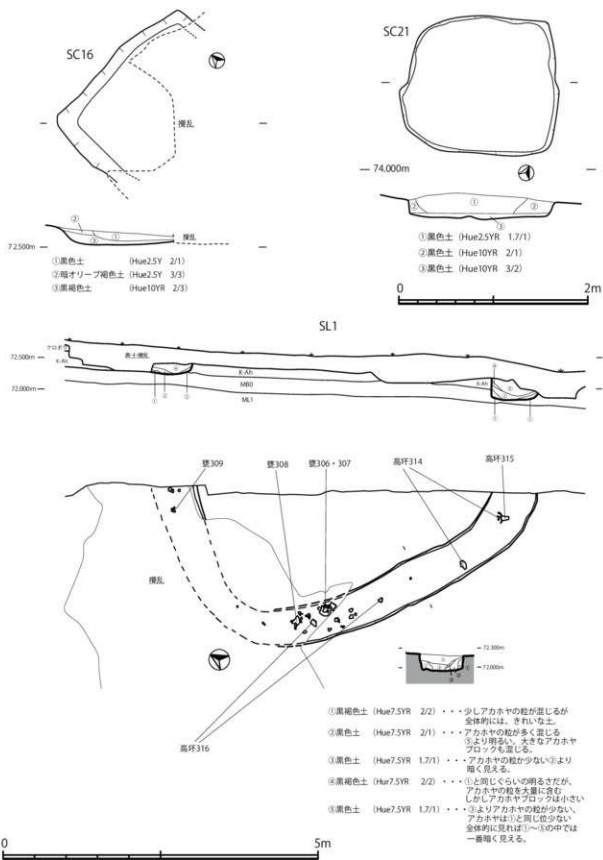
第60図 SA4・SA5実測図 (1/60)



第61図 SA6・SA7実測図 (1/80)



第 62 图 土坑实测图 (1/20)



第63図 SC16・SC21・SL1実測図 (SC16,SC21 1/40)

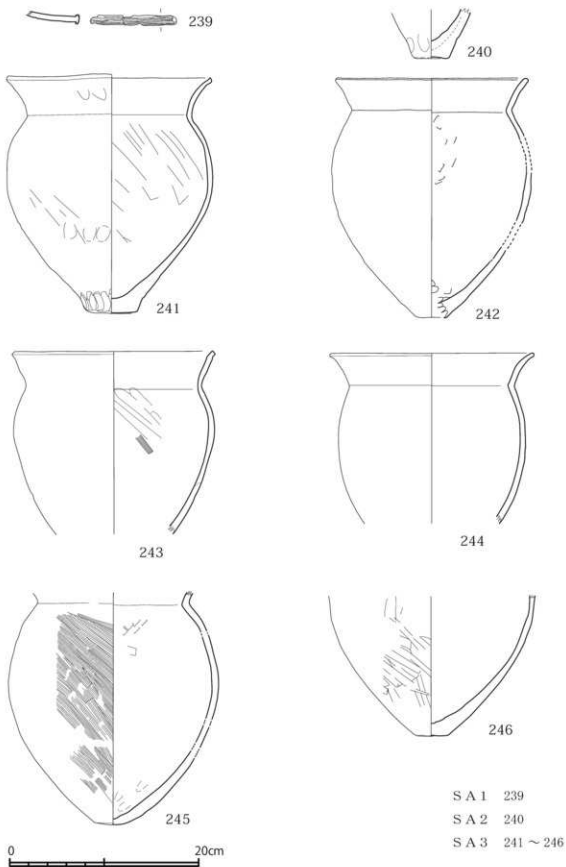
(SL1 1/60)

第16表 弥生時代竪穴住居跡一覧表

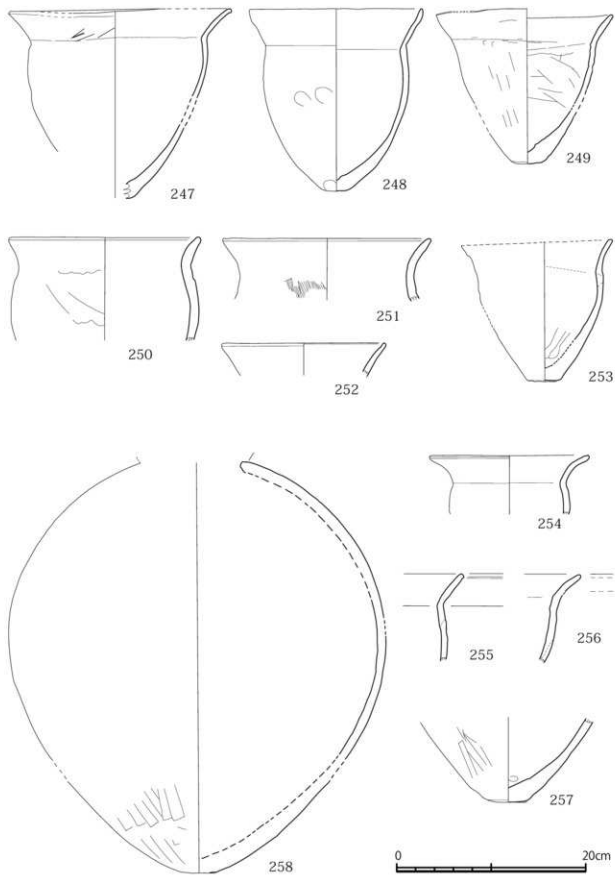
N o	グリッド	検出面	一辺 (m)	深さ (m)	プラン	遺物	炭化物	貼床	炉	間仕 切り	柱穴	壁帯溝	備考
SA1	E6	IV層	3.46	0.13	隅丸方形?	有	無	無	有?	無	無	無	SA2に切られる
SA2	E6	IV層	?	0.19	不明	有	無	有	無	無	無	有	SA1を切る
SA3	C6・C7	IV層	4.8	0.32	隅丸方形	有	炉の埋土 から3点	無	有	無	10	無	年代測定 (AD60)
SA4	D8	IV層	?	0.12	不明	有	無	無	有	無	無	無	炉で焼土を 検出
SA5	B8・B9 C8・C9	IV層	3.2	0.16	隅丸方形	有	無	無	無	無	無	無	中央部に大 きな樹痕
SA6	A6・B6	IV層	4.5	0.06	隅丸方形	有	炉の埋土 から1点	無	有	無	2	無	SA7と切り 合う
SA7	A5・A6	IV層	?	0.32	花卉	有	床面で炭 化種実片 が3点	無	有	有	4	無	SA6と切り 合う、年代測 定(AD100、 AD110)

第17表 弥生時代土坑一覧表

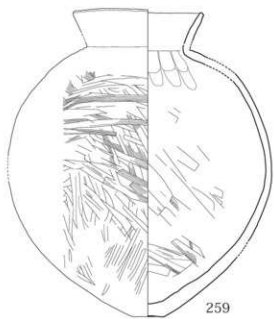
N o	グリッド	検出面	長径(m)	深さ(m)	プラン	遺物	炭化物	焼土	備考
SC4	A6	IV層	0.46	0.09	円	なし	なし	なし	SA7と切り合う
SC5	A6	IV層	0.44	0.20	円	土器片4	なし	なし	SA7と切り合う
SC6	E7	IV層	0.72	0.12	楕円	土器片3	なし	なし	
SC8	B6	IV層	0.50	0.04	楕円	なし	なし	なし	
SC9	A5	IV層	0.42	0.21	円	土器片5	なし	なし	SA7と切り合う
SC10	A6	IV層	0.51	0.29	円	土器片3・ 石器2	なし	なし	SA7と切り合う
SC11	A6	IV層	0.56	0.14	円	なし	なし	なし	SA7と切り合う
SC14	E6	IV層	0.38	0.09	円	土器片10	なし	なし	
SC15	E7	IV層	0.37	0.07	円	なし	なし	なし	
SC16	E7	IV層	1.87	0.08	隅丸方形	土器片6	なし	なし	
SC21	C8	IV層	1.47	0.27	隅丸方形	土器片1	なし	なし	



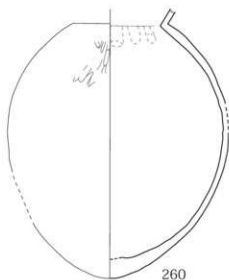
第 64 图 SA 1 · SA 2 · SA 3 出土土器实测图 (1/4)



第 65 圖 SA 3 出土土器実測図 1 (1/4)



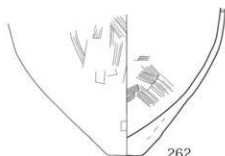
259



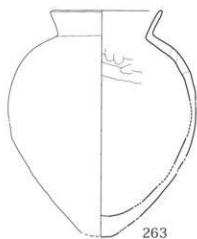
260



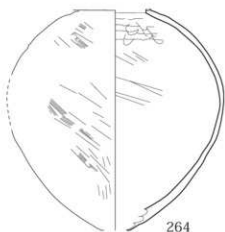
261



262



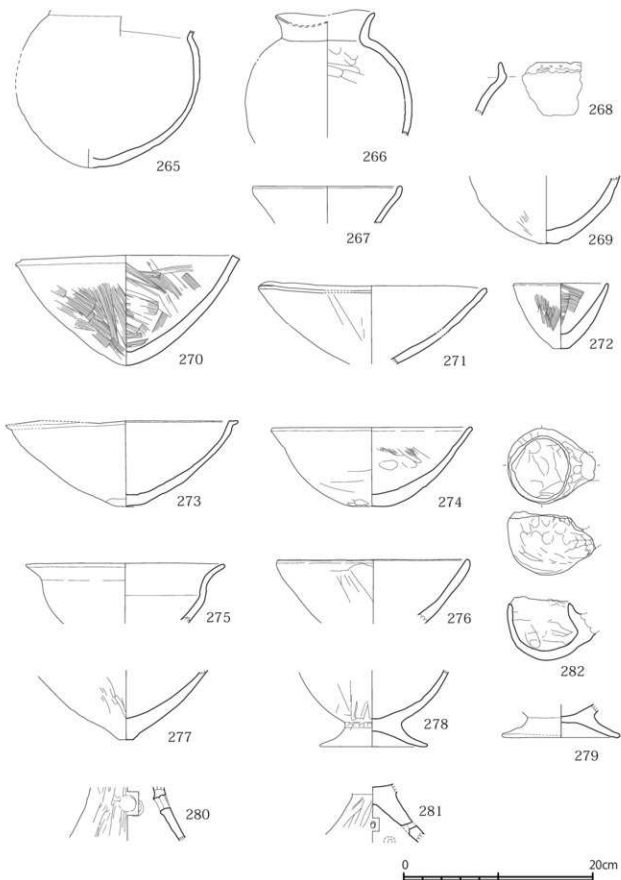
263



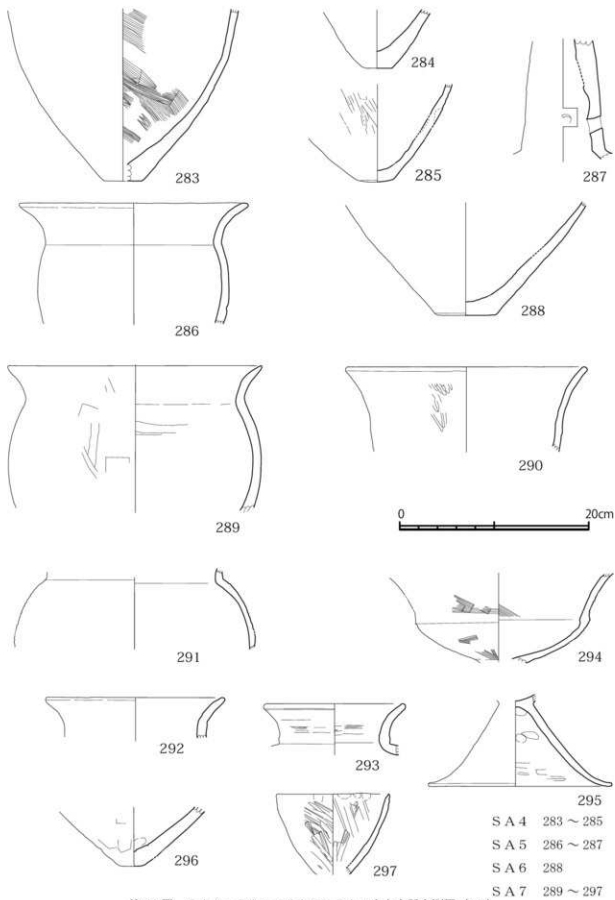
264



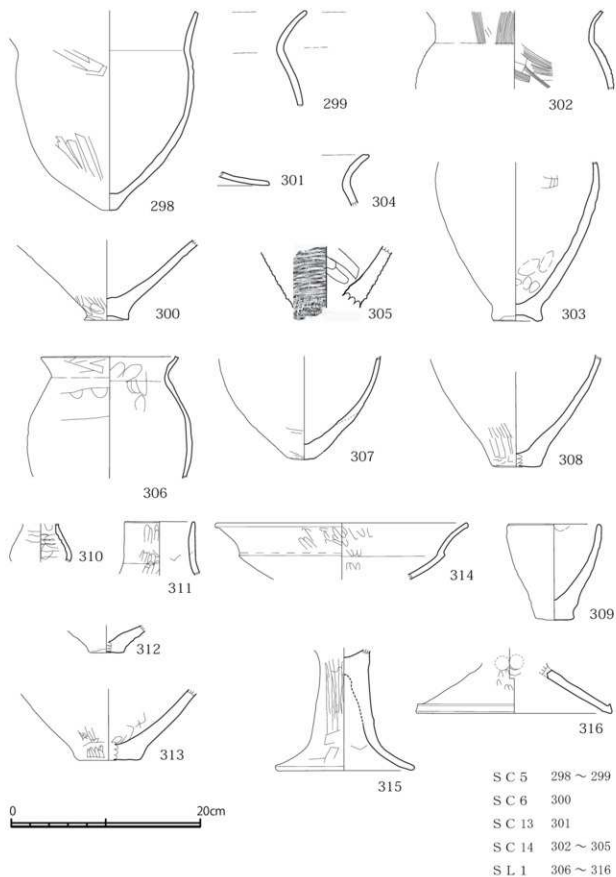
第66图 SA3出土土器实测图2(1/4)



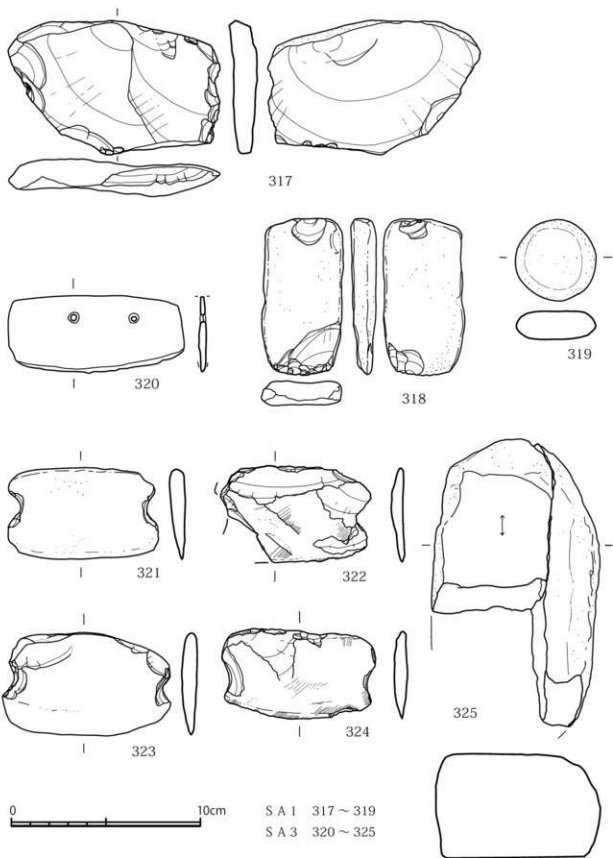
第 67 图 SA 3 出土土器实测图 3 (1/4)



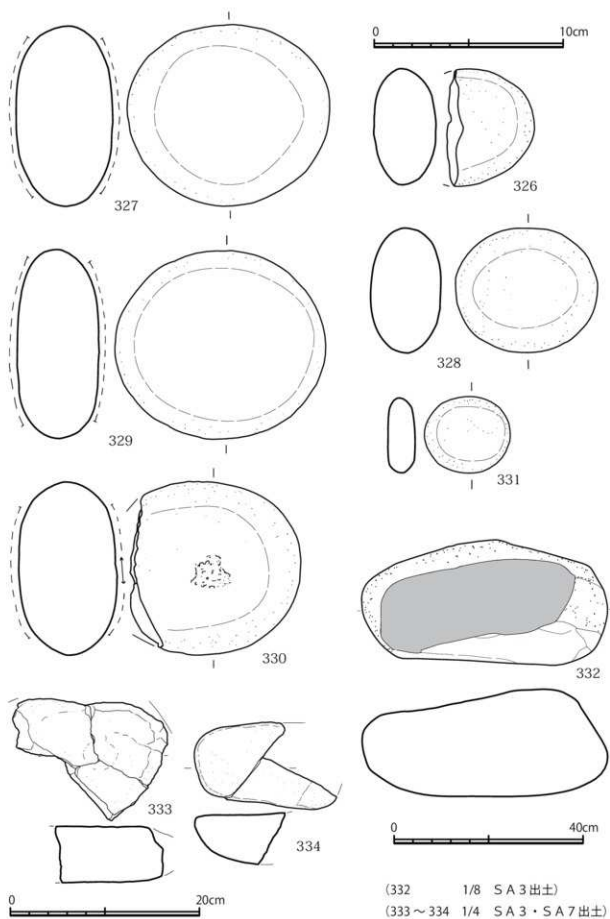
第 68 图 SA 4・SA 5・SA 6・SA 7 出土土器实测图 (1/4)



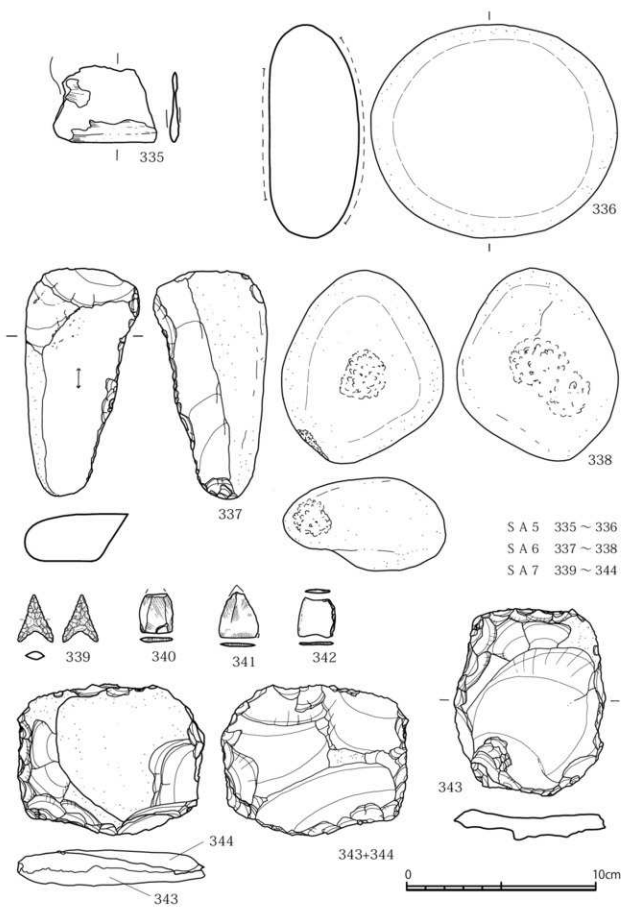
第 69 図 SC 5・SC 6・SC 13・SC 14・SL 1 出土土器実測図 (1/4)



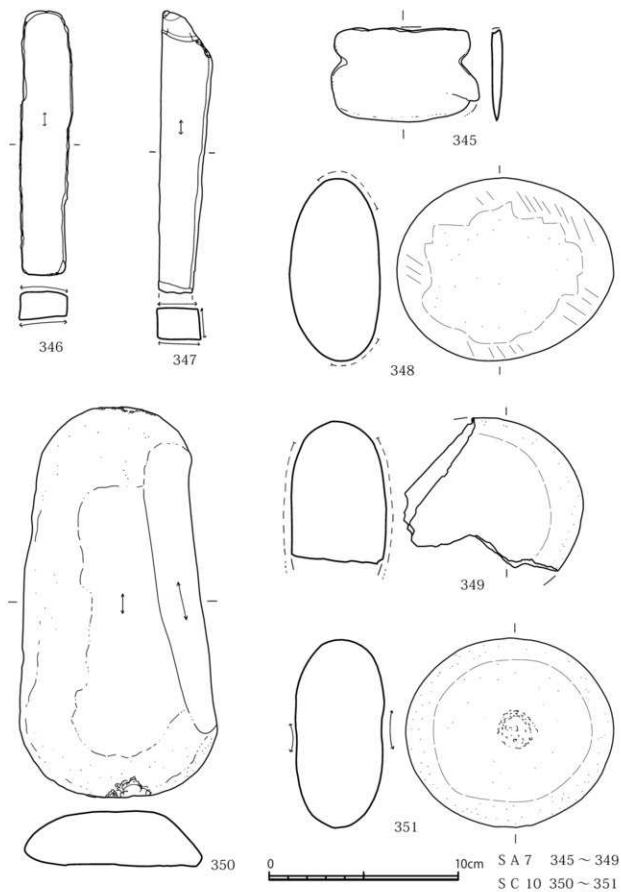
第70図 弥生時代遺構内出土石器実測図1 (1/2)



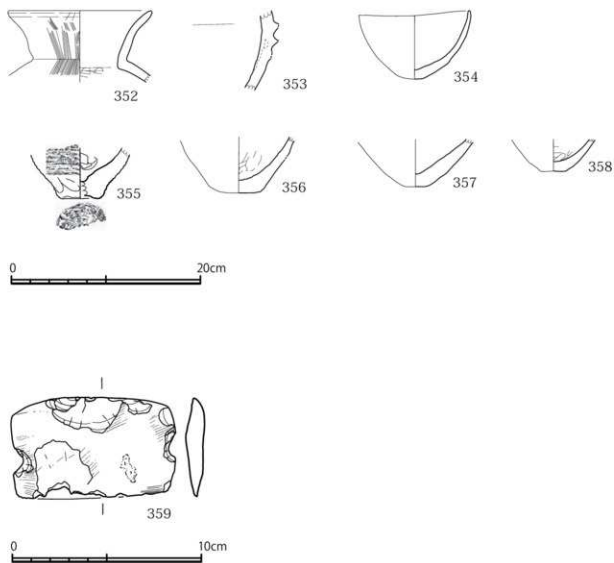
第 71 図 弥生時代遺構内出土石器実測図 2 (326~331 1/2 SA 3 出土)



第 72 図 弥生時代遺構内出土石器実測図 3 (1/2)



第73図 弥生時代遺構内出土石器実測図4 (1/2)



第74図 弥生時代包含層出土・攪乱出土遺物実測図 (土器 352～358 1/4)
(石器 359 1/2)

第18表 弥生土器観察表1

NO	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
239	器台	底部	SA1				横方向のミカキ、脚部端部に4条から5条の沈線	横方向のミカキ、脚部はナデ	橙 (5YR 6/6)	橙 (5YR 7/6)	1mm以下の灰色砂粒と光沢透明粒をわずかに含む		内外面に接合痕あり、外面に凹凸あり
240	甕	底部	SA2		推定3.6		縦方向のタタキ、斜め方向のナデ、指頭痕あり	斜方向のハケ目横ナデ	粗灰黄 (2.5Y 5/2)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	3mm以下の白色粒と褐色粒を少し含む	約1/2	底面・内面に接合痕・工具痕あり
241	甕	口縁部～底部	SA3	21.5	5.5	25.3	横ナデ、工具による縦・斜方向のナデ、指頭痕あり	横ナデ、工具による縦・横・斜方向のナデ、指頭痕あり	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい黄橙 (7.5 YR 7/4)	1mm以下の淡黄色粒・透明光沢粒・オリブ黒色粒を含む	約3/4	底部完形、外面に接合痕、底部に粘土のたまり、内面に黒斑あり、外面にスス付着
242	甕	口縁部～底部	SA3	推定19.8	推定2.6	25.3	横・斜方向のナデ	横・斜方向のナデ、指頭痕あり、工具による斜方向のナデ	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/8)	3mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の赤褐色粒を含む	約1/2	外面スス付着
243	甕	口縁部～底部付近	SA3	推定20.8			横ナデ	斜方向の強いナデの後、工具によるナデ、一部ハケ目あり	橙 (5YR 6/8)	橙 (5YR 6/6)	6mm以下の褐色粒、4mm以下の白色粒を含む	約1/2	外面スス付着、接合痕あり
244	甕	口縁部～側部	SA3	推定21.7			工具による横ナデ、斜方向のナデ	斜方向のナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	淡黄 (2.5 Y 8/4)	4mm以下の明褐色粒、3mm以下の灰褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	約2/3	外面一部スス付着、内面一部黒斑あり
245	甕	頸部～底部	SA3		3.4		横方向のナデ後斜め方向のハケ目	横方向のナデ、指頭痕・工具痕あり	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/8)	1mm～2mm大の灰白色・乳白色・黒い炭光沢の鉱物粒を含む	約3/5	外面スス付着、内面炭化物付着
246	甕	胴部～底部	SA3	胴径推定21.8	推定3.2		縦・横・斜方向のナデ	縦・横・斜方向のナデ	浅黄橙 (10YR 8/3)	浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3mm以下の灰色粒・灰白色粒・黄灰色粒、2mm以下のにぶい黄褐色粒、1mm以下の無色透明光沢粒を含む		底部完形、外面一部スス付着、内面一部黒斑あり
247	甕	口縁部～底部	SA3	23.0		19.8	斜・縦・横方向のナデ、口縁部は横ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 (7.5 YR 7/3)	にぶい黄橙 (7.5 YR 7/3)	3mm以下の黒色光沢粒と2mm以下の灰白色粒を少量含む	約5/6	
248	甕	口縁部～底部	SA3	推定18.1	2.9	19.3	工具による縦・横・斜方向のナデ、指頭痕あり、横ナデ	工具による縦・横・斜方向のナデ、横ナデ	浅黄 (2.5Y 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	5mm以下の白色粒、2mm以下の灰白色粒、1mm以下の無色透明光沢粒を含む	約2/3	外面スス付着、内面一部黒斑あり

第19表 弥生土器観察表2

NO	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		土器の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
249	甕	口縁部 ～底部	SA3	18.7	3.15	16.4	口縁端部に指つまみ、ナデ一部あり、板状工具による斜方向のナデ	縦・横方向のナデ、指頭痕あり	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	3mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の白色粒、6mm以下の褐色粒を含む	約5/6	内面に部分的な黒炭と粘土のたまるみあり、外面にスス付着、外面に接合痕あり
250	甕	口縁部 ～胴部	SA3	推定 20.4			工具による斜方向のナデ後一部横ナデ	横・斜方向のナデ	明 褐 (7.5YR 5/6)	にぶい 橙 (7.5 Y R 7/3)	3mm以下の黒色光沢粒、4mm以下の灰白色粒、2mm以下の褐色粒を含む	約1/6	内面一部黒炭あり
251	甕	口縁部 ～頸部	SA3	推定 23.0			横方向のナデ、斜方向のハケ目	横方向のナデ	橙 (7.5YR 6/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	8mm以下のにぶい黄褐色粒、3mm以下の褐灰色粒と灰白色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	約1/4	内面一部黒炭あり
252	甕	口縁部 SA3	推定 17.4			ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	1mm以下の黒色光沢粒・灰白色・黄褐色粒を含む	約1/3		
253	甕	口縁部 ～底部	SA3	15.9	3.5	14.7	斜方向のナデ、底部指押え後ナデ、口縁端部指押え	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	3mm以下の黒色光沢粒、5mm以下の白色粒・褐色粒を含む	約5/6	外面に一部黒炭あり、外面スス付着
254	甕	口縁部 ～胴部	SA3	推定 16.6			ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR 8/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	3mm以下の白色粒と褐色粒を含む	約1/6	
255	甕	口縁部 ～胴部	SA3				横・斜方向のナデ	斜方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	4mm以下の白色粒、3mm以下の褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	約1/7	外面スス付着
256	甕	口縁部 ～胴部	SA3				ナデ	ナデ・工具痕あり	にぶい 褐 (7.5 Y R 5/3)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	1mm以下の白色光沢粒、3mm以下の白色粒、4mm以下の褐色粒を含む	約1/24	外面一部スス付着
257	甕	胴部～ 底部	SA3	推定 4.4			板状工具による縦・斜方向のナデ、底部ナデ	ナデ、指頭痕あり	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	3mm～1mm大の白色粒・灰色粒と微細半透明粒を含む	底部完形	外面にスス付着、内面に炭化物付着
258	壺	頸部～ 底部	SA3	推定 3.8			斜・縦方向のナデ、一部板状工具による斜方向のケズリ	ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	明黄褐 (10YR 7/6)	0.5mm～3mm大の褐色・灰色の粒を多く含む	約1/3	
259	壺	口縁部 ～底部	SA3	13.5	3.4	32.5	工具による縦・横・斜方向のナデ、工具によるミガキ?	工具による縦・横・斜方向のナデ、頸部に指頭痕あり	明黄褐 (10YR 7/6)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	2mm以下のにぶい赤褐色粒・明褐色粒、1mm以下の灰白色粒、6mm以下の灰色粒を多く含む	約4/5	外面一部黒炭あり

第20表 弥生土器観察表3

NO	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
260	壺	頸部～底部	SA3		1.5		ナデ、ヘラミナデ、指頭痕あり	縦・斜方向ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	にぶい黄褐色 (10YR 5/4)	5 mm 以下の灰白色粒、2 mm 以下の褐色粒を含む	ほぼ完形	外面黒斑あり
261	壺	頸部～胴部	SA3	頸部径	12.2		斜方向のナデ、頸部に刻み目突帯	横・斜方向のナデ	にぶい黄褐色 (7.5YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	1 mm ～ 2 mm 大の茶褐色・灰色の粒を含む	頸部は完形	
262	壺	胴部～底部	SA3	推定	3.75		工具のハケ目の残ナデ	工具のハケ目の後、一部にナデ	黒褐色 (2.5Y 3/1)	オリーブ黒 (2.5 Y: 3/1)	2 mm ～ 5 mm 大の灰白色で不定形な岩片を含む		外面スス付着、内面黒斑・接合痕あり
263	壺	口縁部～底部	SA3	11.4	2.3	23.9	縦・横・斜方向のナデ	ナデ	褐色 (7.5YR 6/6)	褐色 (7.5YR 6/6)	6 mm 以下の白色粒、5 mm 以下の褐色粒を含む	ほぼ完形	外面スス付着、内面接合痕あり
264	壺	頸部～底部付蓋	SA3	頸部径	7.6		工具による斜方向のナデ	工具による斜方向のナデ、指頭痕あり	褐色 (7.5YR 7/6)	褐色 (7.5YR 6/6)	3 mm 以下の白色粒、4 mm 以下の褐色粒を多く含む	約1/2	外面スス付着、頸部に接合痕あり
265	壺	口縁部～頸部	SA3				縦方向のナデ	ナデ、指頭痕あり	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	2 mm 以下の黒色光沢粒、3 mm 以下の灰白色粒を含む		外面一部スス付着
266	壺	口縁部～胴部	SA3	10.3			ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 (7.5YR 6/4)	灰褐色 (7.5YR 6/4)	5 mm 以下の褐色粒、3 mm 以下の褐色粒を含む	約2/3	外面スス付着
267	壺	口縁部～頸部	SA3	推定	15.6		横ナデ	横ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	4 mm 以下の明褐色粒、2 mm 以下の灰白色粒・黒色光沢粒を含む	約1/4	
268	壺	口縁部～頸部	SA3				横ナデ、口縁部に縞線波状文	横ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	2 mm 以下の黒色光沢粒・灰白色粒・褐色粒を含む	約1/8	内面黒変
269	壺	底部	SA3	2.0			ナデの後、工具による縦方向のナデ	縦・横方向のナデ	にぶい黄褐色 (7.5YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	2 mm 以下の黒色光沢粒、6 mm 以下の褐色粒を少し含む	約1/3	
270	鉢	口縁部～底部	SA3	23.7			工具による斜方向のハケ目	工具による斜方向のハケ目	にぶい黄褐色 (7.5YR 6/4)	にぶい黄褐色 (10YR 6/4)	0.5 mm ～ 4 mm 大の乳白色・灰色・黒色粒を含む	約1/4	外面スス付着、内面一部炭化物付着、口縁部に粘土のたまりあり

第21表 弥生土器観察表4

NO	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		粘土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内部	外面	内部			
271	鉢	口縁部 ～底部	SA3	23.8			横ナデの後、腹 方向の粗いナ デ	ナデ	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	にぶい黄 橙 (10YR 6/4)	6mm以下の黒 色・褐灰色粒 を少し含む	ほぼ完形	外面一部黒炭 あり
272	鉢	口縁部 ～底部	SA3	9.8	1.6		斜方向の後腹 方向のハケ目、 口縁端部付近 横ナデ、底部 ナデ	横・斜方向の ハケ目あり	にぶい 褐 (7.5YR 6/4)	にぶい 褐 (7.5YR 6/4)	2mm以下の黒 色光沢粒・赤 褐色粒と3mm 以下の赤褐色 粒を含む	約1/4	外面黒炭あり
273	鉢	口縁部 ～底部	SA3			4.4	ナデ、底部に 工具痕あり	ナデ、底部に 工具痕あり	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	7mm以下の灰 白色粒、4mm 以下の黒褐色 粒、2mm以下 の黒色光沢粒 を含む	ほぼ完形	底部に粘土の たるみあり
274	鉢	口縁部 ～底部	SA3	18.8	4.4		上部はナデ、底 部は工具ナデ	ナデの後、工 具による斜方 向のナデ	浅黄橙 (7.5YR 8/4) 橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	5mm以下の灰 白色細砂粒、2 mm以下の黒色 光沢粒を含む	ほぼ完形	
275	鉢	口縁部 ～底部	SA3	21.0			横ナデ	工具によるナ デ	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	明黄褐 (10YR 7/6)	1～1.5mm大 の黒色鈍光沢 粒、1mm大の 茶褐色粒を含 む	約1/4	外面一部スス 付着、内面一 部炭化物付着
276	鉢	口縁部 ～胴部	SA3	20.2			工具によるナ デ、口縁部付近 へら切り、口 縁端部ナデ	横・斜方向ナ デ	にぶい黄 橙 (10YR 6/4)	にぶい黄 橙 (10YR 6/4)	2mm以下の黒 色光沢粒を含 む、9mm程度 の褐灰色粒あ り	約1/5	
277	鉢	胴部 ～底部	SA3	16.5			工具による腹 方向のナデの 後ミガキ、底 部ナデ	工具による腹 方向のナデの 後ミガキ	にぶい黄 橙 (10YR 6/4)	明褐 (7.5YR 5/6)	2mm以下の灰 白色粒と黒色 光沢粒、5mm 以下の褐色粒 を含む	約1/4	外面スス付着
278	脚台 付鉢	脚部	SA3	11.0			工具による腹 斜方向のナデ、 底部縦・横ナ デ	縦・横ナデ	脚部：にぶい 橙 (7.5YR 7/4) 胴部：橙 (5YR 6/6)	脚部：にぶい 黄 橙 (10YR 7/4) 胴部：橙 (5YR 6/6)	4mm以下の灰 白色粒・灰色 粒、1mm以下 の無色透明光 沢粒・黒色光沢 粒・にぶい赤 褐色粒を含む	約2/3	外面一部スス 付着、内面炭 化物付着、外 面に粘土のた るみあり
279	脚台 付鉢	脚部	SA3	12.0			横ナデ	横ナデ	橙 (5YR 6/6)	にぶい 橙 (7.5YR 7/4)	3mm以下の 灰白色・灰色・ 灰黄色粒と1 mm以下の無 色透明光沢粒・ 黒色光沢角柱 状粒を含む	約3/4脚部	外面一部スス 付着、内面黒 炭あり、外面 横合痕あり
280	高杯	脚部	SA3				腹方向のミガ キ、円形透か しあり	ナデ	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	4mm以下の灰 白色粒、2mm 以下のにぶい 赤褐色粒と褐 灰色粒、1mm 以下の無色透 明光沢粒を含 む	約1/3脚部	

第22表 弥生土器観察表5

NO	器種	部位	出土層	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
281	高坏	胴部	SA3				工具による縦ナデ、円形透かし5カ所あり	縦・横ナデ	外面 (10YR 6/3)	内面 (10YR 6/4)	4mm以下の灰白色粒・白色粒・黒色粒・褐色粒・褐色粒、2mm以下の黒色光沢粒、1mm以下の灰オリーブ色粒・無色透明光沢粒を含む	約2/3 (脚部)	外面一部スス付着、内面一部灰化物付着
282	粒子状土製品	内部	SA3				ナデ、指頭痕あり	ナデ、指頭痕あり	にぶい黄褐色 (10YR 6/3)	にぶい黄褐色 (10YR 7/3)	1mm～5mmの褐色砂粒、3mm以下の灰白色石粒、1mm以下の無色透明粒を含む		取っ手以外はほぼ完形
283	甕	胴部～底部	SA4	推定 22.9	推定 4.0	18.15	平行タタキ、底部平行タタキ後ナデ、底部の一部で指押え後のナデ	縦・斜方向のハケ目、底部付近指押え後のハケ目	黄褐色 (7.5YR 7/8)	にぶい褐色 (7.5YR 7/3)	4mm以下の赤褐色粒・明褐色粒、2mm以下の灰白色粒を含む	約1/3	全体的に黒黒あり
284	甕	底部	SA4			2.8	平行タタキ、底部平行タタキ後ナデ	縦・斜方向のハケ目、底部付近指押え後のハケ目	にぶい褐色 (7.5YR 7/4)	にぶい褐色 (7.5YR 6/3)	3mm以下の褐色粒・灰褐色粒を含む	約1/4 (底部)	内面黒黒あり、部は完形
285	甕	胴部～底部	SA4			3.6	工具による縦方向のナデの後、部分的にミガキ	縦・横方向の工具ナデ後、指ナデ	にぶい黄褐色 (10YR 7/4)	褐色 (10YR 4/1)	1mm以下の黒色光沢粒、2mm以下の灰白色粒を含む	約2/3	外面部分的に黒黒あり、その上にスス付着、内外面に接合痕あり
286	甕	口縁部～胴部	SA5	推定 24.0			指押え後ナデ	横ナデ	褐色 (5YR 6/6)	褐色 (5YR 6/6)	3mm以下の透明光沢粒・赤褐色粒・灰白色粒を含む	約1/4	外面スス付着
287	高坏	胴部	SA5				縦方向ナデ、円形透かしあり	指ナデ	灰褐色 (7.5YR 4/2)	灰褐色 (7.5YR 4/2)	7mm以下の褐色色粒、2mm以下の黒色光沢粒を含む	約2/3	
288	甕	胴部～底部	SA6			6.2	ナデ	ナデ	淡赤褐色 (2.5YR 7/4)	褐色 (5YR 7/6)	1mm以下の灰白色粒・黄灰色粒・明褐色粒・無色透明粒を含む	底部約3/4、脚部1/2	外面一部スス付着、内面黒黒あり
289	甕	口縁部～胴部	SA7	推定 26.85			胴部：下から上に向かうハケ目 口縁部：横ナデ	胴部：下から上に向けてナデ、一部工具痕あり 口縁部：横ナデ	にぶい赤褐色 (5YR 5/4)	灰黄褐色 (10YR 4/2)	7mm以下の淡黄色粒、5mm以下の暗赤褐色粒、4mm以下の黄褐色粒、2mm以下の乳白色粒・無色透明光沢粒・黒色光沢粒を含む	約1/8	外面一部黒変
290	甕	口縁部～胴部	SA7	推定 25.0			工具による縦・斜方向のナデ後、縦方向のミガキ	縦・横方向のナデ	褐色 (5YR 6/8)	褐色 (5YR 6/8)	5mm以下の淡褐色色粒、3mm以下の黒色光沢粒を含む	約1/4	外面一部スス付着
291	甕	頸部～胴部	SA7				胴部：平行タタキ 頸部：横ナデ	ナデ	明赤褐色 (5YR 5/6)	褐色 (7.5YR 6/6)	3mm以下のにぶい黄褐色粒、1mm以下の灰白色粒を含む	約1/4	外面一部スス付着

第 23 表 弥生土器観察表 6

NO	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
292	甕	口縁部	SA7	推定 18.6			横ナデ	横ナデ	明赤褐 (5YR 5/6)	明赤褐 (5YR 5/6)	3mm 以下の灰赤色粒・褐色粒と 2mm 以下の灰白色粒と 1mm 以下の黒色光沢粒・赤褐色粒を含む	約 1/9	
293	甕	口縁部 ～底部	SA7	14.4			工具による横ナデ	工具による横ナデ	浅黄褐 (2.5Y 7/4)	にぶい黄褐 (10R 7/3)	4mm 以下の灰黄色粒・暗灰黄色粒と 2mm 以下の灰白色粒・灰色粒と 1.5mm 以下の無色透明光沢粒・黒色粒を含む	約 1/4 (口縁部)	
294	高坪	杯部	SA7				ハケ目・指押えによる凹み	ナデ・横ナデ・指ナデによる凹み	灰褐 (7.5YR 4/2)	灰褐 (7.5YR 4/2)	5mm 以下の灰白色粒。1mm 以下の黒色光沢粒を含む	約 3/4	外面部分的黒斑あり、内面一部黒斑あり
295	高坪	杯部	SA7				縦・斜方向ナデ	工具による縦・横方向のナデ。指頭痕あり	橙 (7.5YR 6/6) 橙 (5YR 6/8)	明褐 (7.5YR 5/6)	3.5mm 以下の灰色粒・灰白色粒と 2mm 以下の白色半透明粒・透明光沢粒・黒色光沢粒を含む	胴部ほぼ完形	
296	不明	胴部～ 底部	SA7		2.0		工具による縦方向のナデ	ナデ、指圧痕あり	明赤褐 (5YR 5/6) 橙 (7.5YR 7/6)	灰褐 (7.5YR 4/2)	3mm 前後の白色不透明粒。2mm 前後の灰白色砂粒。1.5mm 以下の黒色光沢粒を含む	約 1/4	
297	不明	口縁部 ～底部	SA7		11.8		工具によるナデ、一部ミガキ	工具によるナデ、口縁部付近指頭痕あり	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	橙 (7.5YR 6/6)	2mm 以下の褐色粒・褐色粒・黒色光沢粒と 1mm 以下の灰白色粒を含む	約 3/5	外面一部スス付着
298	甕	口縁部 ～底部	SC5				下位：縦方向のナデ後ヘラケズリ 上位：横・斜方向ナデ	下位：指押え後斜方向ナデ 上位：横・斜方向ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	5mm 以下の灰白色粒。2mm 以下の赤褐色粒。3mm 以下の黒色光沢粒	胴部～底部までほぼ完形	全体スス付着
299	甕	口縁部 ～胴部	SC5				上位：工具による横ナデ 下位：ナデ	上位：工具による横ナデ 下位：ナデ	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	1～5mm 大の黄褐色石粒。1.5mm 以下の白色石粒	約 1/12 (口径)	
300	鉢	胴部～ 底部	SC6		4.6		工具による斜方向ナデ、底部付近指ナデ	工具による斜方向ナデ、底部付近指ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4) 黒褐 (10YR 3/2)	にぶい黄橙 (10YR 7/3)	微細な白色半透明粒。1mm 以下の乳白色粒。1.5mm ほどの黒色光沢粒。2mm 以下の灰白色粒。2mm 前後の黒色光沢粒を含む	底部ほぼ完形	外面黒斑あり、部分的にスス付着、内面黒変、底部に土器の重みによる粘土のたまるみあり
301	高坪	杯部	SC13				ナデ	ナデ	明褐 (7.5YR 5/6) 橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 6/8) 明黄褐 (10YR 6/6)	2mm 以下の白色不透明粒。1.5mm 以下の黒色粒を含む	約 1/8 (口径)	

第24表 弥生土器観察表7

NO	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
302	甕	口縁部 ～胴部	SC14				上位：タタキの後、 縦方向にハケ目 下位：横方向に平 行タタキ後斜方向 平行タタキ	上位：横方向ハ ケ目後、斜方 向ハケ目	橙 (7.5YR 7/6)	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	3mm以下の褐 灰色粒、7mm 以下の褐色粒を 含む	約1/4 (胴部の径)	外面スス付 着、内面一 部黒変
303	甕	胴部～ 底部	SC14・10・ 17	5.25			工具によるナデ、 縦方向ナデ	工具によるナデ、 指痕あり	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (7.5YR 7/4)	4mm以下の灰 白色粒・黒褐色 粒・灰白色粒を 含む	約1/3	外面一部ス ス付着
304	甕	口縁部 ～胴部	SC14				工具による縦・横 方向のナデ		にぶい橙 (7.5YR 7/4)	にぶい橙 (5YR 7/4)	3mm以下の灰 白色粒・褐灰色 粒と4mm以下 のにぶい赤褐色 粒・にぶい黄橙 色粒を含む	約1/7	外面スス付 着
305	甕	底部付 近～胴 部	SC14				横方向の平行タタ キ、底部付近は斜 方向の平行タタキ もあり	工具による斜方 向のナデ	にぶい黄 褐 (10YR 7/4)	黄 黄 (2.5Y 7/3)	4mm以下の褐 灰色粒・明褐灰 色粒を含む	約1/4	
306	甕	口縁部 ～胴部	SL1	推定 14.6			工具による斜方向 のナデ、指ナデ	指押え、指ナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	灰白 (10YR 8/2)	4mm以下の黄 褐色粒・褐灰色 粒・灰白色粒を 含む	約1/2 (口径)	外面接合痕 あり、外面 スス付着
307	甕	胴部～ 底部	SL1	2.9			上位：斜方向ナデ 下位：タタキ	ナデ、底部付近 指押え	にぶい黄 橙 (10YR 3/6)	にぶい黄 橙 (10YR 7/2)	3mm以下のに ぶい黄橙色粒、 3.5mm以下の褐 灰色粒を含む	約3/4	外面接合痕 あり、外面 スス付着、 内面黒変
308	甕	胴部～ 底部	SL1	5.1			工具による縦方向 ナデ、工具による 凹みあり	ナデ	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	黄 黄 橙 (10YR 8/3)	5mm以下の黄 褐色粒、4mm 以下の灰白色不 透明粒を含む	約1/2 (底部～胴 部)	外面スス付 着、内面黒 変
309	甕	口縁部 ～底部	SL1	推定 9.6	推定 3.9	推定 11.05	ナデ、口縁部指 つまみ	ナデ、口縁部指 つまみ	にぶい黄 橙 (7.5YR 7/4)	にぶい黄 橙 (10YR 7/4)	5mm以下の黒 褐色粒・暗褐色 粒と3mm以下 の褐色粒・褐灰 色粒・灰白色粒 を含む	約2/3	外面黒変あ り、内面上 位黒変あり
310	小型甕	胴部～ 胴部	SL1				ナデ	指押えの後ナデ	にぶい黄 橙 (10YR 7/3)	にぶい黄 橙 (10YR 7/3)	3mm以下の黒 色粒・にぶい黄 橙色粒・灰白色 粒を含む	約1/4	外面接合痕 あり、粘土 のたるみあり
311	甕	口縁部 ～胴部	SL1	推定 7.4			横方向ナデ後へつ みがき	横方向ナデ	浅黄橙 (10YR 8/3)	灰白色 (10YR 8/2)	2mm以下の褐 灰色粒・明赤褐 色粒を含む	約1/6	外面接合痕 あり
312	甕	胴部～ 底部	SL1	推定 3.4			ナデ、粘土のかえ り	ナデ、工具痕あ り	褐灰 (7.5YR 5/1)	褐灰 (7.5YR 4/1)	3mm以下の褐 灰色粒・明赤褐 色粒と1mm以下 の灰白色粒を含 む	約1/4	
313	甕	胴部～ 底部	SL1	6.8			ヘラケズリ	工具によるナデ、 底部付近指押え	にぶい黄 橙 (7.5YR 6/3)	にぶい黄 橙 (10YR 6/3)	7mm以下の褐 灰色粒と3mm 以下の褐色粒・ にぶい黄橙色粒・ 黒色粒を含む	約1/3	外面接合痕 あり、内黒 変あり

第 25 表 弥生土器観察表 8

NO	器種	部位	出土場所	法量 (c m)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
314	高坏	坏部	SL1	推定 26.4			ヘラミガキ、口縁端部ナデ	ヘラミガキ、口縁部付近横ナデ	橙 (7.5YR 6/6)	橙 (7.5YR 6/6)	5 mm 以下の褐色色粒と 2 mm 以下の灰色・褐灰色色粒を含む	約 1/4	
315	高坏	脚部	SL1				ナデ、一部工具痕、ミガキ	ナデ、一部工具痕あり、坏部は工具による調整の後ナデ	浅黄橙 (10YR 8/3) 黄橙 (10YR 8/6)	浅黄橙 (10YR 8/3)	4 mm 以下の褐色色粒・灰白色不透明粒と 1 mm 以下の透明光沢粒を含む	底部ほぼ 完形	外面黒境・接合痕あり
316	高坏	裾部	SL1	推定 20.4			縦方向ナデの後ミガキ、円形透かしあり	縦・斜方向ナデ	浅黄橙 (10YR 8/4)	浅黄橙 (10YR 8/3)	3 mm 以下の灰白色粒を含む	約 1/3	
352	甕	口縁部～胴部	A区田層	推定 15.0			横ナデ後斜目め・縦方向にハケ目あり	口縁部はナデ、胴部に指頭痕あり、ハケ目あり	橙 (7.5YR 6/6)	明橙 (7.5YR 5/6)	5 mm 以下の灰白色粒を含む	約 1/3	内外面接合痕あり、内面一部黒境あり
353	甕	胴部	A区田層				横ナデ、下にミガキ、突帯あり	斜方向のハケ目、指頭痕あり	明赤褐 (5YR 5/6)	灰褐 (7.5YR 4/2)	5 mm 以下の灰白色粒。3.5mm 以下の明赤褐色粒。3 mm 以下の褐灰色粒。7 mm 以下の白色半透明粒を含む		突帯剥離
354	鉢	口縁部～底部	A区田層	11.8	1.7	6.7	横・斜方向ナデ	斜方向ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	橙 (7.5YR 7/6)	2 mm 以下の黒色光沢粒・明褐色粒・灰白色粒・褐灰色色粒を含む	ほぼ完形	外面一部黒境あり
355	甕	底部～胴部	A区田層	推定 4.1			斜方向の平行タキ、指頭痕あり	工具による縦・横ナデ、指頭痕あり	にぶい黄橙 (10 Y R 7/3)	にぶい黄橙 (10YR 7/2)	3 mm 以下の褐色色粒・明褐色色粒と 2 mm 以下のにぶい赤褐色粒・灰白色粒と 1 mm 以下の無色透明粒・無色透明光沢粒・赤褐色色粒を含む	約 1/3 (底部)	外面接合痕あり
356	甕	底部～甕胴部	A区田層	3			縦ナデ	工具によるナデ、指頭痕あり	浅黄橙 (10 Y R 8/3)	にぶい黄橙 (10 Y R 7/3)	4 mm 以下の透明褐色粒・暗褐色粒と 2 mm 以下の褐灰色粒・赤褐色色粒と 1 mm 以下のにぶい赤褐色色粒を含む	底部ほぼ 完形	外面黒境と接合痕あり
357	甕	底部～甕胴部	A区田層	推定 1.9			ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR 6/4)	にぶい黄橙 (10YR 6/3)	2 mm 以下の灰白色粒・黒褐色粒・褐灰色色粒と 1 mm 以下のにぶい黄褐色粒・浅黄褐色粒・無色透明光沢粒・黒色透明光沢粒を含む	約 2/3	内外面一部黒境あり
358	甕	底部	A区田層	2.6			ナデ	横・斜方向ナデ、指押え	にぶい橙 (7.5 Y R 6/4)	にぶい橙 (7.5 Y R 6/4)	1 mm 以下の透明光沢粒と 2 mm 以下の黒色光沢粒・灰白色粒・褐灰色色粒を含む	底部完形	外面一部黒境あり

第 26 表 弥生時代石器計測表

遺物番号	器種	出土区	出土位置	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
317	石庖丁未製品	A	SA1	ホルンフェルス	7.1	11.1	1.5	161.8	
318	斧状石器	A	SA1	ホルンフェルス	8.2	4.3	1.4	74.5	
319	搬入礫	A	SA1	尾鈴山酸性岩類	4.3	4.3	1.5	42.2	
320	磨製石庖丁	A	SA3	頁岩	4.0	9.2	0.4	22.2	
321	磨製石庖丁	A	SA3	ホルンフェルス	4.8	7.9	0.8	45.2	
322	磨製石庖丁	A	SA3	ホルンフェルス	5.1	7.9	0.7	35.7	
323	磨製石庖丁	A	SA3	ホルンフェルス	5.4	8.8	0.8	58.6	
324	磨製石庖丁	A	SA3	ホルンフェルス	4.7	8.1	0.7	36.7	
325	砥石	A	SA3	ホルンフェルス	15.2	8.8	5.5	960.9	
326	磨石	A	SA3	砂岩	4.6	6.2	3.3	123.1	
327	磨石	A	SA3	尾鈴山酸性岩類	10.6	9.0	5.1	767.3	
328	磨石	A	SA3	尾鈴山酸性岩類	7.4	6.6	3.7	269.4	
329	磨石	A	SA3	尾鈴山酸性岩類	11.1	9.9	4.3	74.3	
330	凹石	A	SA3	尾鈴山酸性岩類	8.9	9.1	5.1	696.0	
331	搬入礫	A	SA3	砂岩	4.6	4.0	1.4	40.9	
332	台石	A	SA3	砂岩	51.8	26.0	22.6	約 40kg	
333	台石	A	SA3/SA7	尾鈴山酸性岩類	17.3	21.7	7.9	4070.0	
334	台石	A	SA3/SA7	ホルンフェルス	12.1	20.1	8.0	1614.0	
335	磨製石庖丁	A	SA5	頁岩	4.1	5.5	0.5	12.1	
336	磨石	A	SA5	尾鈴山酸性岩類	12.9	11.2	4.7	1074.2	
337	砥石	A	SA6	ホルンフェルス	12.0	5.9	3.4	276.3	
338	砥石	A	SA6	尾鈴山酸性岩類	10.1	8.5	5.0	444.8	
339	打製石鏃	A	SA7	ホルンフェルス	2.5	1.9	0.4	0.9	
340	磨製石鏃	A	SA7	頁岩	2.1	1.8	0.2	1.2	
341	磨製石鏃	A	SA7	頁岩	2.4	2.1	0.2	1.5	
342	磨製石鏃	A	SA7	頁岩	2.1	2.0	0.2	1.2	
343	磨製石庖丁未製品	A	SA7	ホルンフェルス	7.9	9.8	1.5	123.3	
343-344	磨製石庖丁未製品	A	SA7	ホルンフェルス	7.9	9.8	1.8	182.5	
345	磨製石庖丁	A	SA7	ホルンフェルス	4.9	7.8	0.5	29.1	
346	砥石	A	SA7	シルト岩	13.9	2.2	1.9	109.8	
347	砥石	A	SA7	シルト岩	14.9	2.2	2.2	124.4	
348	磨石	A	SA7	尾鈴山酸性岩類	11.3	9.6	4.7	764.1	
349	磨石	A	SA7	尾鈴山酸性岩類	9.4	8.1	5.0	516.3	
350	砥石	A	SC10	砂岩	20.4	10.4	2.9	941.8	
351	凹石	A	SC10	尾鈴山酸性岩類	10.9	9.9	4.7	796.6	
359	磨製石庖丁	A	1層	ホルンフェルス	5.3	8.7	1.1	65.2	

第4節 中世の遺構と遺物

(1) 調査の概要

A区のアカホヤ残存部分では、竪穴住居跡を中心とした弥生時代終末期の遺構を検出すると同時に、A区南西部分で、埋土の状況から弥生時代の遺構とは時期が異なると思われる2条の溝状遺構も検出した(第75図)。

その後のB区の調査では、K-Ah上面で、A区で検出した2条の溝状遺構と同種類の埋土を有する10条の溝状遺構を検出した(第76図)。

これらの溝状遺構からは、A区では遺物が出土しなかったが、B区では、溝の底面、または底面付近で、1点の陶器片と4点の土師器が出土した。

陶器片は東播系の播鉢であるが、中世前期の13世紀～14世紀に該当するものと思われ、このことにより、本遺跡で検出された12条の溝状遺構がつくられた時期は、中世前半期に該当するものと判断することができた。

(2) 中世の環境

前節までに述べてきた縄文時代草創期～早期、または弥生時代終末期といった時期と比較すると、それまでの時期に遺構が見られなかったB区の東南隅に、溝状遺構(SE7・SE8・SE9)が造営されたという点が注目される(第76図)。縄文時代早期以前には確実に湿地帯の一部だったB区東南隅は、古代以前には、自然堆積により大部分が埋まった可能性が高い。

なお、A区よりも北側の調査区外部分は、近代以降の土地改変事業により、現代ではフラットな地形になっているが、少なくとも中世の後の近世までは、ゆるやかな起伏を有する地形が広がっていたことが想像される。

(3) 中世の遺構と遺物

前述の通り、A区～B区にかけてK-Ah上面で合計12条の溝状遺構が検出されている。幅は最大で0.65m～0.9m、深さは0.1m～0.4mほどである。東西方向や南北方向に錯綜して走る状態を示す。以下、個別の溝状遺構ごとに、検出状況等と出土遺物

を示す。なおSE1は欠番である。

【SE2】(第75図・第77図)

本遺跡で最長の溝状遺構であり、A区南西部からB区南西部にかけて50m以上の長さがある。検出面での遺構の幅と検出面からの深さは、B区南西部で最も幅広い(約0.8m)と同時に最も深く(約0.25m)、そこからA区に向かってだんだんと狭くなると同時に浅くなっていく状況が確認された。なお、遺構底部の埋土がかなり硬化した状態(以下、硬化面と略す)がB区で検出された(第76図)。

SE6にB区調査区の西端部で、さらにその南側でSE13に切られた状態が確認できた。

遺物は、B区の西側中央部で、中世前半期の東播系播鉢の破片が1点(第79図、360)、遺構底面に張り付いた状態で出土した。

【SE3】(第75図・第77図)

A区南端部で、東西方向に走る状態で検出された。K-Ah上面から遺構底面までが0.15mほどの浅い溝状遺構である。硬化面はなく、遺物等も出土しなかった。

【SE4】(第76図・第77図)

B区中央部を、SE5と平行して途中で途切れながら南北方向に走る21m程度の長さの溝状遺構である。硬化面はなく、遺物等も出土しなかった。溝の南端部はSE6に切られる。

【SE5】(第76図・第77図)

B区中央部を、SE4と平行して、途中で途切れながら南北方向に走る長さ29mほどの溝状遺構である。硬化面はなく、遺物等も出土しなかった。

【SE6】(第76図・第78図)

B区南部を東西方向に走る溝状遺構である。検出面から底面まで、最も深い所で0.4m近い深さがあり、最大幅も0.9m以上ある。本遺跡の12条の溝状遺構の中で、最も深いと同時に、最も幅広いという点では注目される。SE6は、B区の西端でSE2を切ると同時に、B区南部中央でSE4を切る。

硬化面は、SE2と切り合う地点で検出されている。

他の3条(SE2・SE8・SE13)の硬化面と比較すると、SE6の硬化面は特に硬い状態であった。

遺物は、SE4と切り合う地点で合計4点が出土した。4点ともに遺構底面からは少し浮いた状態で出土しており、内訳は土師皿が3点(第80図361～363)、土師器の鍋が1点(第80図364)である。361・363・364の3点が、SE4と切り合う地点の西側で出土し、362だけがSE4と切り合う地点の東側で出土している(145頁の図版8参照)。

土師皿は、361・362が糸切り底、363がヘラ切り底の特徴をもつ。361と363の2点は、廃棄時点では、重なり合っていたものと思われる。この3点の土師皿は、ほぼ完形に近い状態に復元できた。

364は、鍋の底部を上にした状態で出土したが、鍋底が抜けた状態で出土した。割れた底の部分は周囲に散乱していなかったことから、初めから底が抜けた状態で廃棄されたものと思われる。

【SE7】(第76図・第78図)

B区南東部を東西方向に走る5m程度の長さの溝状遺構である。硬化面はなく、遺物も出土しなかった。

【SE8】(第76図・第78図)

B区南東部を南北方向に走る5m程度の長さの溝状遺構である。溝の全長の3分の2程度に及ぶ範囲で硬化面が検出された。遺物は出土しなかった。

【SE9】(第76図・第78図)

B区南端部で検出された長さ4m程度の溝状遺構である。南北方向に走り、硬化面はなく、遺物も出土しなかった。

【SE10】(第76図・第78図)

B区北側で検出された。検出面から遺構底部まで0.1m以下の非常に浅い溝状遺構である。長さは、途中で途切れている部分も含めて16m程度である。硬化面はなく、遺物も出土しなかった。

【SE11】(第76図・第78図)

B区北側端部で検出された。南北方向に走る長さ5m程度の溝状遺構である。硬化面はなく、遺物も

出土しなかった。溝状遺構の向きから考えると、検出面の上層では、SE4と直線的に繋がっていた可能性が高い。

【SE12】(第76図・第79図)

B区西側で検出された。東西方向にSE10と平行して走る長さ13m程度(途中で途切れている部分を含む)の溝状遺構である。硬化面はなく、遺物も出土しなかった。

【SE13】(第76図・第78図・第79図)

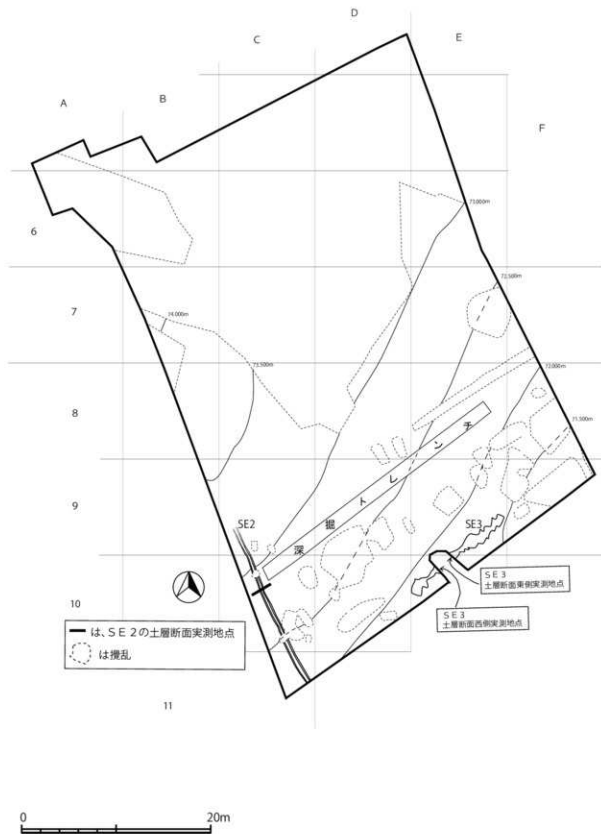
B区南西部をSE2を切る状態で検出された。調査区を東西に走る長さ21m程度(途中で途切れている部分を含む)の溝状遺構である。硬化面が検出されているが、遺物は出土していない。なお、遺構の向きから考えるに、検出面の上層では、SE7と直線的に繋がっていた可能性がある。

【表土中の遺物】(第80図)

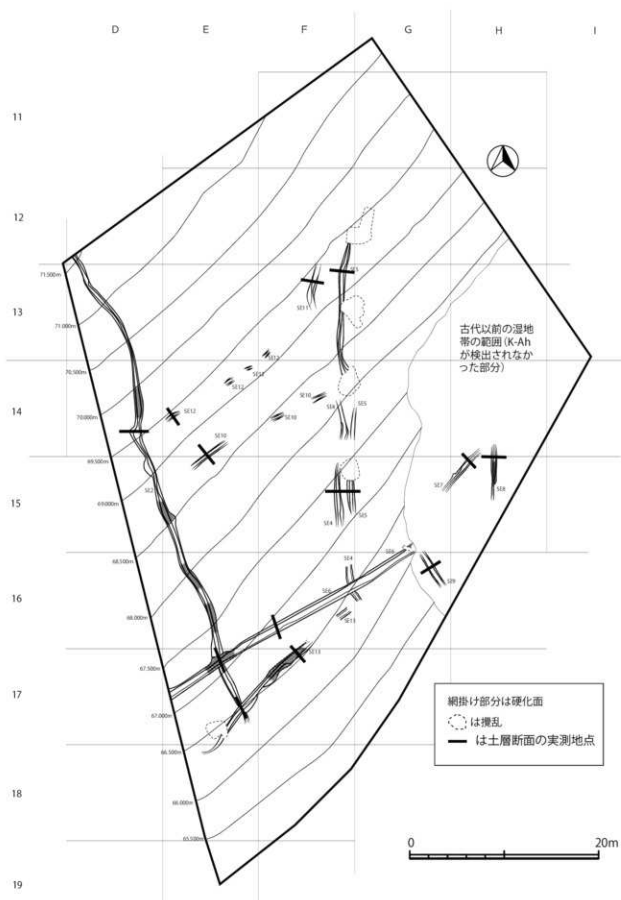
365の石鍋は、湯牟田遺跡に隣接する本遺跡B区の南端部で表土中から出土した。SE6から出土した土師器の鍋(364)と、突帯が付いている位置が似ており、全体の形も364を一回り小さくした状態であり、形態的に似ている。364と比較的、近い時期につくられたものと思われる。

本遺跡と湯牟田遺跡の境界部分では、第1章で述べた通り、灌漑用ヒューム管敷設に伴い、その周囲が大きく削平されている。現代の土木工事に伴い、中世の溝状遺構も何条か、削平されてしまった可能性がある。

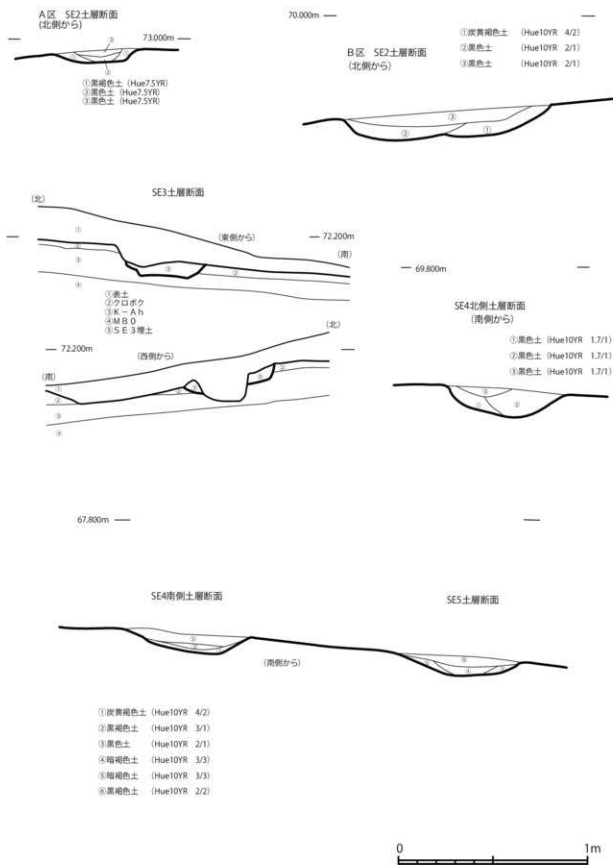
このような状況を考えると、365の石鍋は、364と同じく、一連の溝状遺構中の遺物であった可能性が高いので、図面を掲載した。



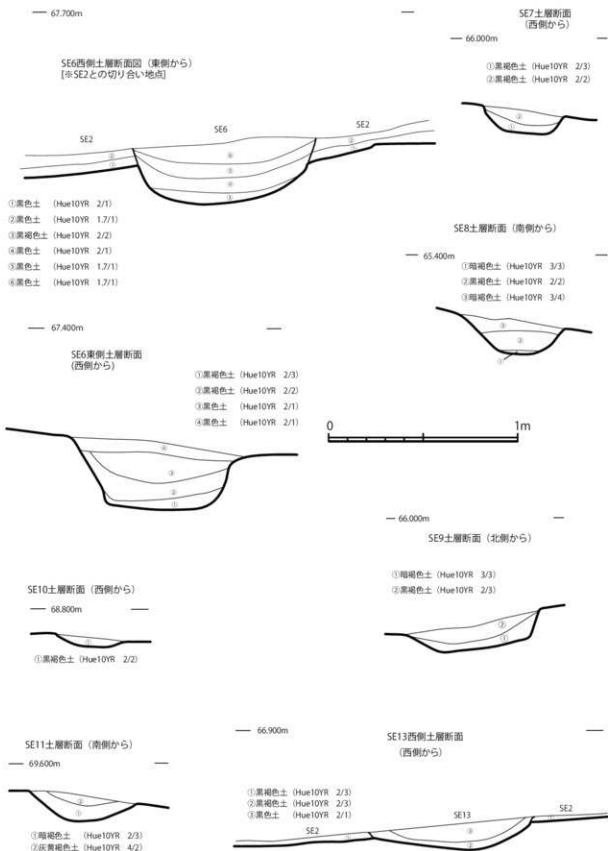
第75図 中世溝状遺構分布図A区 (1/400)



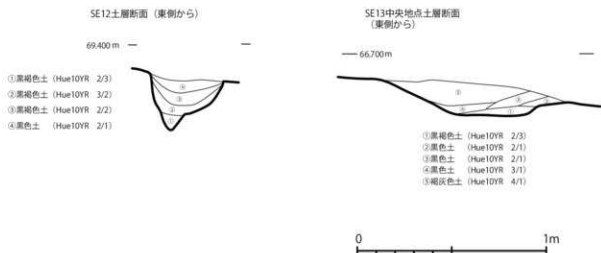
第 76 図 中世溝状遺構分布図B区 (1/400)



第77図 中世溝状遺構断面実測図1 (1/20)



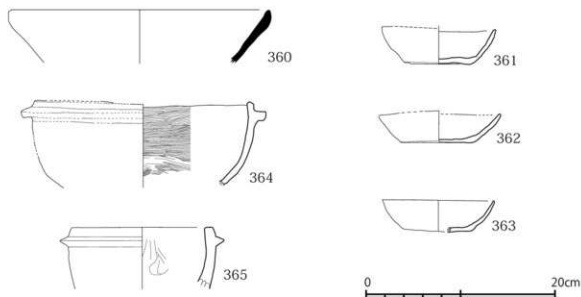
第 78 図 中世溝状遺横断面実測図 2 (1/20)



第 79 図 中世溝状遺構断面実測図 3 (1/20)

遺構No	調査区	検出面	長さ (m)	深さ (m)	遺物	炭化物	硬化面	備考
SE2	A・B	IV層	50 以上	0.25	陶器 1	なし	有り	A 区と B 区にまたがる
SE3	A	IV層	10	0.15	なし	なし	なし	
SE4	B	IV層	14(途中で途切れる部分を含む)	0.15	なし	なし	なし	
SE5	B	IV層	29(途中で途切れる部分を含む)	0.11	なし	なし	なし	
SE6	B	IV層	30	0.36	土師皿 3・鍋 1	なし	有り	
SE7	B	IV層	5	0.11	なし	なし	なし	
SE8	B	IV層	5	0.18	なし	なし	有り	
SE9	B	IV層	4	0.14	なし	なし	なし	
SE10	B	IV層	16(途中で途切れる部分を含む)	0.04	なし	なし	なし	
SE11	B	IV層	5	0.13	なし	なし	なし	
SE12	B	IV層	13(途中で途切れる部分を含む)	0.18	なし	なし	なし	
SE13	B	IV層	21(途中で途切れる部分を含む)	0.17	なし	なし	有り	

第 27 表 中世溝状遺構一覧表



第 80 図 中世遺構内出土・表面採集遺物実測図 (1/4)

NO	器種	部位	出土場所	法量 (cm)			手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	残存	備考
				口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
360	東播系 播鉢	口縁部	B区 SE2				回転横ナデの 後指ナデ	回転横ナデの 後指ナデ	黄 灰 (2.5Y 5/1)	灰 (5 Y 4/1)	3mm 以下の 灰白色粒がわ ずかに含まれ る	不明	
361	土師器 の皿	口縁部 ～底部	B区 SE6	11.85	7.0	3.9	口縁部は回転 横ナデ、体部 は回転ヘラ削 りの後丁寧な ナデ、底部は 回転糸切り	口縁部付近は 回転横ナデ、 底部は指ナデ の後に回転横 ナデ	浅 黄 橙 (10 YR 8/3)	浅 黄 橙 (10 YR 8/3)	微細な明赤褐 色粒・黒褐色 粒を含む	ほぼ完形	内外面とも に部分的に 黒斑あり
362	土師器 の皿	口縁部 ～底部	B区 SE6	12.62	7.55	3.33	口唇部ナデ、 口縁部から体 部は回転ヘラ 削りの後ナデ、 底部は回転糸 切り	回転横ナデ	浅 黄 橙 (7.5 YR 8/4)	浅 黄 橙 (7.5 YR 8/4)	2mm 以下の 明赤褐色粒・ 黒褐色粒を含 む	ほぼ完形	内面炭化物 付着
363	土師器 の皿	口縁部 ～底部	B区 SE6	11.75	3.3	7.6	口唇部ナデ、 口縁部から体 部は回転横ナ デ、底部はヘ ラ切りの後木 目の圧痕あり	回転横ナデ	橙 (7.5YR 7/6)	に ぶ い 橙 (7.5 YR 6/4)	1mm 以下の 明赤褐色粒を 含む	約 1/2	外面少しス ス付着
364	土師器 の鍋	口縁部 ～底部	B区 SE6	26.5			ナデ、突帯の 貼付	口縁部付近： 横方向のウケ目、 底部付近：斜 方向のハケ目	淡 橙 (5YR 8/4) 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	淡 橙 (5YR 8/4) 浅黄橙 (7.5YR 8/4)	3mm 以下の 赤褐色粒・に ぶい褐色粒と 2mm 以下の 黒色粒を含む	底部以外 にはほぼ完 形	外面スス付 着、内面炭 化物付着
365	石鍋	口縁部 ～胴部	B区 表土	推定 14.7			突帯あり、丁 率なケズリ	瓶いケズリ	黄 灰 (2.5Y 6/1)	黄 灰 (2.5Y 6/1)		底部の約 1/4	外面スス付 着、内面黒 斑あり

第 28 表 土師器・陶器等観察表

第5節 時期不明の遺構

(1) 調査の概要

A区のアカホヤ残存部分では、竪穴住居跡を中心とした弥生時代終末期の遺構と中世の溝状遺構を検出したが、同時に、A区のK-Ah上面では、3基の時期不明遺構(粘質土を有する土坑)を検出した(第81図)。

また、その後のB区の調査では、ML1下部相当(Ⅶ層上面)で後期旧石器時代～縄文時代早期にかけてのものと思われる陥し穴状遺構を1基検出した(第81図)。

本節では、これら4基の土坑について、その詳細を示す。

(2) 粘質土を有する土坑(第82図)

粘質土を有する土坑は、A区で合計3基(SC1～SC3)検出されたが、SC1は、A区の東側で、SC2とSC3は、A区の南側端部で検出された。SC1とSC2は平面で円形プランを、またSC3は平面で楕円形プランを呈する。これらの遺構は、長径で0.5m～0.7mほど、検出面から底面までの深さは、3基ともに0.1mほどである。

これら3基の埋土は、ほとんどが非常に強い粘性をもった土に占められることに特徴がある。

粘質土の詳細は、3基ともに共通していて、基本的には、黄色と灰色ベースの明るい色をした埋土であるが、部分的に白や紫がかかった、さらに明るい粘質土が不規則状態で混在する。

粘質土中には、礫や遺物は混在しておらず、これら3基の土坑がつくられた時期を知る手がかりはない。

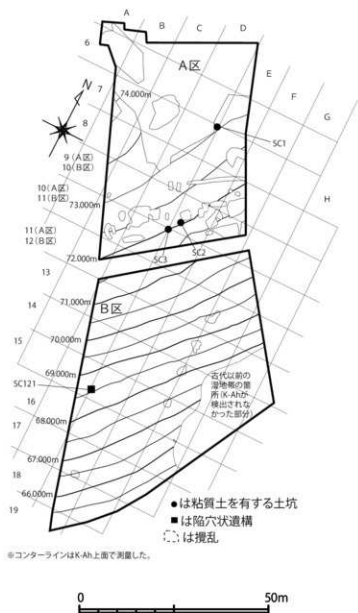
(3) 陥し穴状遺構(第83図)

B区のⅦ層で、縄文時代草創期～早期の竪穴の検出作業を実施している時に、検出面で、明らかに埋土色が竪穴と異なる1基の大型土坑(SC121)が検出された。

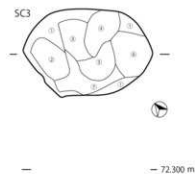
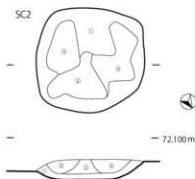
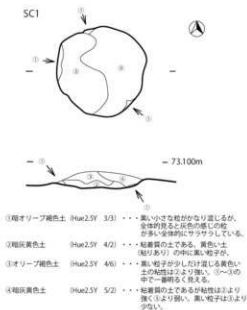
検出面での遺構の長径は1.05mであり、遺構底面までの深さは1.05mもある。遺構埋土は、縄文時代草創期～早期の竪穴と同じくかなり硬い状態であり、遺物は全く出土しなかった。

遺構断面図の形状から推測すると、SC121は陥し穴状遺構の可能性が高いが、底面には杭が打たれていた跡は無かった。

SC121が見つかった時期は、検出面から推定すると後期旧石器時代～縄文時代早期に該当するものと思われる。



第81図 時期不明遺構分布図(1/1,000)



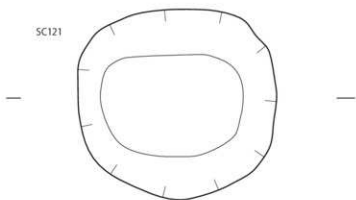
第 82 図 時期不明遺構実測図 1 (1/20)

遺構 N o	調査区	検出面	長径 (m)	深さ (m)	プラン	遺物	炭化物	焼土	備考
SC1	A	IV	0.47	0.09	円	なし	なし	なし	粘土を有する土坑
SC2	A	IV	0.58	0.12	円	なし	なし	なし	粘土を有する土坑
SC3	A	IV	0.69	0.11	楕円	なし	なし	なし	粘土を有する土坑
SC121	B	VII	1.05	1.05	円	なし	なし	なし	陥し六穴遺構

第 29 表 時期不明遺構一覧表

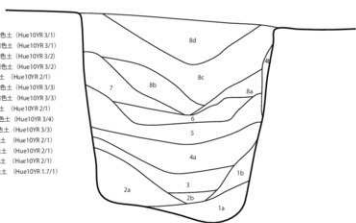


SC121



6.000m

- 1a 灰褐色土 (Hue10YR 3/1)
- 1b 灰褐色土 (Hue10YR 3/1)
- 2a 灰褐色土 (Hue10YR 3/2)
- 2b 灰褐色土 (Hue10YR 3/2)
- 3 棕色土 (Hue10YR 2/1)
- 4a 暗褐色土 (Hue10YR 3/3)
- 4b 暗褐色土 (Hue10YR 3/3)
- 5 棕色土 (Hue10YR 2/1)
- 6 暗褐色土 (Hue10YR 3/4)
- 7 暗褐色土 (Hue10YR 3/3)
- 8a 褐色土 (Hue10YR 2/1)
- 8b 褐色土 (Hue10YR 2/1)
- 8c 褐色土 (Hue10YR 2/1)
- 8d 褐色土 (Hue10YR 1.7/1)



0 1m

第 83 圖 時期不明遺構実測図 2 (1/20)

第6節 フローテーションの成果と結果

(1) はじめに

本遺跡では、弥生時代の遺構（竪穴住居跡・周溝状遺構）を対象に、遺構内から採取した土を洗浄し、炭化物等の存否を確認するフローテーション法を実施した。本節で、作業の工程、成果と結果について簡潔に報告する。

(2) 作業の工程

①土の採取（平成16年7月～10月）

周溝状遺構（SL1）では、遺構の残存状況の良かった南側部分を、平面上で12区画に分割し、各区画ごとに遺構底部の土を採取した（第84図）。

また竪穴住居跡に関しては、炉そのもの、または炉の可能性のある土坑について、その周囲の土を採取することにした。炉そのもの、または炉の可能性のある土坑をもつ住居跡は7軒のうち5軒あったが、そのうち2軒は攪乱による影響が大きく、土の採取に適さないと考えた。

よって土の採取は、SA1・SA3・SA7の3軒の竪穴住居跡で実施し、炉の周囲の床面直上部分の土を「炉の北」「炉の南」「炉の東」「炉の西」の4区画に分けて採取した。

②土の乾燥（平成17年7月～8月）

土の乾燥作業は、低温期を避けて翌年の夏（平成17年度）に実施した。

乾燥作業用にコンテナの箱を用意し、土壌の中に保存していた埋土を箱の中に広げて干した。

③土の洗浄と種子の選別（平成18年4月）

洗浄機械を使い土を洗浄し、水面上に浮かぶ浮遊物を回収した。

④種子の選別（平成18年5月）

浮遊物を乾燥させた後、肉眼で見えるゴミや植物の根等を除去し、その後、顕微鏡を使って、ピンセットで炭化物だけを選別した。

(3) 成果と結果

①フローテーション作業の成果

今回のフローテーション作業では、竪穴住居跡の炉の周囲から採取した土からは、微小な炭化材が多く選別され、特にSA3住居跡の土からは、炭化種

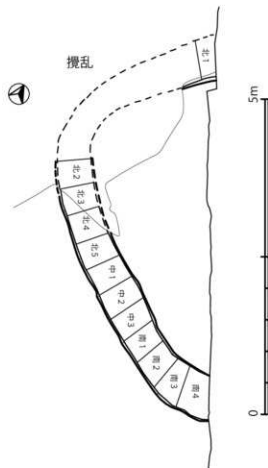
実も合計15点選別できた。また、周溝状遺構（SL1）埋土からは、少量の微小な炭化材と同時に、炭化種実も4点選別できた。

②自然科学分析

今回のフローテーション作業によって得られた炭化物のうち、炭化材については、微小すぎるものがほとんどであるため、樹種同定やC14年代測定にかけるには不適當であった。

しかし炭化種実については、種実同定がすべての試料について可能であり、またC14年代測定が可能な大きさの試料が数点あった。よって炭化種実については、平成18年6月～9月にかけて、（株）古環境研究所に委託して自然科学分析を実施した。

詳細な結果については、次章（第4章）『自然科学分析』の第2節「自然科学分析（2回目）」に譲る。



第84図 周溝状遺構からの土の採取場所 (1/60)

第Ⅳ章 自然科学分析

国光原遺跡では、縄文時代草創期～早期の集石遺構・炉穴・土坑から炭化材、また弥生時代終末期の竪穴住居跡や周溝状遺構から炭化材・炭化種実が出土した。

縄文時代草創期～早期の遺構については、

①遺構の種類の違いにより、作られた年代に違いがあるかどうか。

②同じ種類の遺構であっても、形態的な違いによって、つくられた年代に違いが出るかどうか。

③検出層の違いにより、各遺構がつくられた年代に差があるかどうか。

という三つの視点をもって、集石遺構、炉穴、土坑の合計 12 基の遺構から出土した炭化材で C14 放射性炭素年代測定を実施した。

また、縄文時代草創期～早期の遺跡周辺の植生を知る手がかりを得るために、集石遺構と炉穴から出土した炭化材 3 点で樹種同定を実施した。

また、弥生時代終末期の遺構に関する自然科学分析は、遺跡の発掘調査の際に竪穴住居跡の床面から出土した炭化種実、さらに、竪穴住居跡の炉の周囲の土や周溝状遺構底部の土を洗浄すること（フローテーション法）で得られた炭化種実を同定することで、当時の食生活や遺跡周辺の植生を知る手がかり

が得られることを期待して実施した。

さらに、これらの遺構は、出土した弥生土器により、つくられた時期が比定できるが、弥生土器編年を裏付ける実年代を得る目的から、炭化種実を C14 放射性炭素年代測定にかけている。

なお、当遺跡の自然科学分析は、発掘調査とそれに伴う整理作業の進展に応じて、平成 17 年度と平成 18 年度の 2 回に分けて実施した。

本章の第 1 節は、平成 17 年度の発掘調査終了直後に実施した 1 回目の自然科学分析の結果であり、縄文時代の集石遺構と炉穴から検出された炭化物を対象にして実施したものである。

第 2 節は、2 回目の自然科学分析（平成 18 年度）の結果であり、フローテーション作業により得られた炭化種実の、自然科学分析結果が主である。それに加えて、1 回目の自然科学分析で得られた結果（データ）を補充するために、縄文時代の集石遺構・炉穴・土坑から検出した炭化材を追加して分析にかけている。

以下、当埋蔵文化財センターから業務委託した株式会社古環境研究所による国光原遺跡の自然科学分析結果を示す。

第 1 節 自然科学分析（1 回目）

（1）国光原遺跡における放射性炭素年代測定

①試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	SI19 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No.2	SI40 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No.3	SI48 集石遺構	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No.4	SP19 炉穴	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No.5	SP26 炉穴	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS
No.6	SP35 炉穴	炭化材	酸-アルカリ-酸洗浄、石墨調整	AMS

※ AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

【 ^{14}C 年代測定値】

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5.568年を用いた。

【 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値】

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

【補正 ^{14}C 年代値】

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

【暦年代】

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。 1σ （68%確率）と 2σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の $1\sigma \cdot 2\sigma$ 値が表記される場合もある。

②測定結果

試料名	測定No. (Beta)	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代（西暦） (1σ :68%確率, 2σ :95%確率)
No.1	210969	8170 ± 40	-25.3	8170 ± 40	交点: cal BC7140 1σ : cal BC7190 ~ 7080 2σ : cal BC7310 ~ 7070
No.2	210970	8140 ± 40	-26.5	8120 ± 40	交点: cal BC7080 1σ : cal BC7100 ~ 7060 2σ : cal BC7180 ~ 7050
No.3	210971	9170 ± 40	-26.0	9150 ± 40	交点: cal BC8300 1σ : cal BC8320 ~ 8280 2σ : cal BC8450 ~ 8270
No.4	210972	9060 ± 40	-26.0	9040 ± 40	交点: cal BC8260 1σ : cal BC8270 ~ 8240 2σ : cal BC8290 ~ 8220

No.5	210973	9090 ± 40	-28.6	9030 ± 40	交点: cal BC8260 1σ: cal BC8270 ~ 8240 2σ: cal BC8280 ~ 8220
No.6	210974	9020 ± 50	-28.6	8960 ± 50	交点: cal BC8220 1σ: cal BC8250 ~ 8190 2σ: cal BC8270 ~ 8150, BC8140 ~ 7970

③所見

加速器質量分析法 (AMS 法) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 (SI19) の炭化材では 8170 ± 40 年 BP (1σ の暦年代で BC7190 ~ 7080 年)、No.2 (SI40) の炭化材では 8120 ± 40 年 BP (同 BC7100 ~ 7060 年)、No.3 (SI48) の炭化材では 9150 ± 40 年 BP (同 BC8320 ~ 8280 年)、No.4 (SP19) の炭化材では 9040 ± 40 年 BP (同 BC8270 ~ 8240 年)、No.5 (SP26) の炭化材では 9030 ± 40 年 BP (同 BC8270 ~ 8240 年)、No.6 (SP35) の炭化材では 8960 ± 50 年 BP (同 BC8250 ~ 8190 年) の年代値が得られた。

<文献>

Stuiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫 (1999) 放射性炭素法, 考古学のための年代測定学入門, 古今書院, p.1-36.

(2) 国光原遺跡における樹種同定

①はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

②試料

試料は、SI-19 および SI-40 から採取された炭化材 2 点である。

③方法

試料を割削して新鮮な横断面 (木口と同義)、放射断面 (柱目と同義)、接線断面 (板目と同義) の基本 3 断面の切片を製作し、落射顕微鏡によって 50 ~ 1000 倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

④結果

第 30 表に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真（第 85 図、132 頁）を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科（第 85 図）

横断面：年輪のはじめに大型の道管が 1～2 列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものど大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ 15 m、径 60cm ぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。なおコナラ属コナラ節の特徴は示すものの、炭化などによる変形が著しく広範囲の観察が困難で広放射組織の存在が確認できない試料は、コナラ属コナラ節? とした。

⑤所見

分析の結果、SI-40 の炭化材はコナラ属コナラ節、SI-19 の炭化材はコナラ属コナラ節? と同定された。コナラ属コナラ節は、日当たりの良い山野に生育する落葉高木で、冷温帯落葉広葉樹林の構成要素であるミズナラやナラガシワ、および温帯に広く生育し二次林の性格を持つコナラなどがある。コナラ属コナラ節の種実（ドングリ）はアクが強く、食用とするためには水さらしや加熱処理などが必要である。

<文献>

- 佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.20-48。
佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞。木材の構造，文永堂出版，p.49-100。
島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p.296

第 30 表 国光原遺跡における樹種同定結果

試料	結果 (学名/和名)
No.1 SI-19	<i>Quercus sect. Prinus</i> ? コナラ属コナラ節?
No.2 SI-40	<i>Quercus sect. Prinus</i> コナラ属コナラ節

第2節 自然科学分析（2回目）

（1）放射性炭素年代測定

①はじめに

放射性炭素年代測定は、生物に含まれる放射性炭素（ ^{14}C ）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。過去における大気中の ^{14}C 濃度には変動が認められ、年代測定結果に影響していることから、年輪年代学などの成果を利用した校正曲線により ^{14}C 年代から暦年代への校正が行われている。

②試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	A区, SA 3-1	炭化樹実（イネ）	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.2	A区, SA 7-C2	炭化樹実（ツブラジイ）	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.3	A区, SA 7-C3	炭化樹実（モモ）	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.4	A区, SI 1-1	炭化樹実（イネ）	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.5	B区, SI 11	炭化材	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.6	B区, SI 32	炭化材	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.7	B区, SI 46	炭化材	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.8	B区, SP 1	炭化材	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.9	B区, SP 6	炭化材（コナラ属コナラ節）	酸-76かり-酸洗浄	AMS
No.10	B区, SC 113	炭化材	酸-76かり-酸洗浄	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass spectrometry）

【 ^{14}C 年代測定値】

試料の $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。 ^{14}C の半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

【 $\delta^{13}\text{C}$ 測定値】

試料の測定 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ 比を補正するための炭素安定同位体比（ $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

【補正 ^{14}C 年代値】

$\delta^{13}\text{C}$ 測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、 $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料の $\delta^{13}\text{C}$ 値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

【暦年代】

過去の宇宙線強度の変動による大気中 ^{14}C 濃度の変動を校正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年台値であることを示す。校正には、年代既知の樹木年輪の ^{14}C の詳細な測定値およびサンゴのU-Th年代と ^{14}C 年代の比較により作成された校正曲線を使用した。INTCAL98では、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正 ^{14}C 年代値と校正曲線との交点の暦年代値を意味する。1 σ （68%確率）と2 σ （95%確率）は、補正 ^{14}C 年代値の偏差の幅を校正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1 σ ・2 σ 値が表記される場合もある。

③測定結果

試料名	測定No (Beta)	^{14}C 年代 (年 BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ^{14}C 年代 (年 BP)	暦年代（西暦） (1 σ :68%確率, 2 σ :95%確率)
No.1	218283	1910 ± 40	-22.7	1950 ± 40	交点: cal AD 60 1 σ : cal AD 20-90 2 σ : cal BC 40- AD 130
No.2	218284	1880 ± 40	-24.5	1890 ± 40	交点: cal AD 110 1 σ : cal AD 70-140 2 σ : cal AD 40-230

No.3	218285	1930 ± 40	-26.7	1900 ± 40	交点: cal AD 100 1σ: cal AD 70-130 2σ: cal AD 30-220
No.4	218286	2050 ± 40	-24.3	2060 ± 40	交点: cal BC 50 1σ: cal BC 110-30 2σ: cal BC 180-AD 30
No.5	218015	9240 ± 60	-26.1	9220 ± 60	交点: cal BC 8440 1σ: cal BC 8540-8300 2σ: cal BC 8600-8280
No.6	218016	9880 ± 70	-25.4	9870 ± 70	交点: cal BC 9280 1σ: cal BC 9330-9250 2σ: cal BC 9580-9570, 9390-9220
No.7	218017	8260 ± 60	-28.2	8210 ± 60	交点: cal BC 7190 1σ: cal BC 7320-7090 2σ: cal BC 7450-7390, 7370-7070
No.8	218018	8350 ± 60	-25.8	8340 ± 60	交点: cal BC 7460 1σ: cal BC 7500-7330 2σ: cal BC 7540-7280, 7230-7190
No.9	218019	9180 ± 60	-26.5	9160 ± 60	交点: cal BC 8300 1σ: cal BC 8440-8280 2σ: cal BC 8540-8260
No.10	218020	7970 ± 60	-26.1	7950 ± 60	交点: cal BC 6820 1σ: cal BC 7040-6690 2σ: cal BC 7060-6650

④所見

加速器質量分析法 (AMS) による放射性炭素年代測定の結果、No.1 (SA3) の炭化種実では 1950 ± 40 年 BP (1σ の暦年代で AD20 ~ 90 年)、No.2 (SA7) の炭化種実では 1890 ± 40 年 BP (同 AD70 ~ 140 年)、No.3 (SA7) の炭化種実では 1900 ± 40 年 BP (同 AD70 ~ 130 年)、No.4 (SL1) の炭化種実では 2060 ± 40 年 BP (同 BC110 ~ 30 年)、No.5 (SI11) の炭化材では 9220 ± 60 年 BP (同 BC8540 ~ 8300 年)、No.6 (SI32) の炭化材では 9870 ± 70 年 BP (同 BC9330 ~ 9250 年)、No.7 (SI46) の炭化材では 8210 ± 60 年 BP (同 BC7320 ~ 7090 年)、No.8 (SP1) の炭化材では 8340 ± 60 年 BP (同 BC7500 ~ 7330 年)、No.9 (SP6) の炭化材では 9160 ± 60 年 BP (同 BC8440 ~ 8280 年)、No.10 (SC113) の炭化材では 7950 ± 60 年 BP (同 BC7040 ~ 6690 年) の年代値が得られた。

<文献>

Stuiver et al. (1998). INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.
中村俊夫 (1999) 放射性炭素法。考古学のための年代測定学入門。古今書院, p.1-36.

(2) 樹種同定

①はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

②試料

試料は、B区SP 6から採取された炭化材1点である。

③方法

試料を剖折して新鮮な横断面(木口と同義)、放射断面(柾目)、接線断面(板目)の基本三断面の切片を複製し、落射顕微鏡によって50～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

④結果

分析の結果、B区SP 6から採取された炭化材は、コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* と同定された。以下に同定根拠となった特徴を記し、各断面の顕微鏡写真(第85図、132頁)を示す。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものど大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15 m、径60 cmぐらいに達する。材は強靱で弾力に富み、建築材などに用いられる。

<文献>

佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版、p.49-100。
島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣、p.296

(3) 炭化種実同定

①はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆植物や遺構内に残存している場合がある。堆植物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

②試料

試料は、弥生時代のA区SA 3、SA 7、SL 1から採取・選別された計10区分の炭化種実である。

③方法

肉眼および双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

④結果

【分類群】

分析の結果、樹木3、草本4の計7分類群が同定された。学名、和名および粒数を第31表(131頁)に示し、主要な分類群を写真に示す(第86図、133頁)。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

●樹木

◆ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schott. 子葉 ブナ科
子葉は炭化しているため、黒褐色で広卵形を呈す。表面には種皮の模様のみみられる。

◆コナラ属 *Quercus* 子葉片 ブナ科
炭化しているため黒褐色で楕円形を呈す。表面は種皮の模様のみみられ平滑である。なお、殻斗が欠落した破片のため、属レベルの同定にとどめた。

◆モモ *Prunus persica* Batsch 核片バラ科
炭化しているため黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

●草本

◆イネ *Oryza sativa* L. 果実・果実片 イネ科
炭化しているため黒色である。長楕円形を呈し、胚の部分がくぼむ。表面には数本の筋が走る。完形は1個で、あとは破片である。

◆カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実
黒褐色で倒卵形を呈す。断面は扁平である。

◆コキンバイザサ *Hypoxis aurea* Lour. 種子 キンバイザサ科
暗灰褐色で広楕円体を呈し粗面。基部の片側に下方へ曲がる突起があり、へそはその先端部にある。

【種実群集の特徴】

●SA 3

コキンバイザサ5、カヤツリグサ科4、アカネ科3、イネ1が同定された。

●SA 7

モモ片6、コナラ属片2、ツブラジイ1が同定された。

●SL 1

イネ片3、カヤツリグサ科1が同定された。

⑤考察

種実同定分析の結果、弥生時代の各遺構（A区SA 3、SA 7、SL 1）の試料では、モモ6、コキンバイザサ5、カヤツリグサ科4、アカネ科3、コナラ属2、イネ4、ツブラジイ1が同定された。このうち、イネとモモは栽培植物であり、ツブラジイとコナラ属の種実（ドングリ）は食用として有用である。

<文献>

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

笠原安夫（1988）作物および田畑雑草種類，弥生文化の研究第2巻生業，雄山閣 出版，p.131-139.

金原正明（1996）古代モモの形態と品種，月刊考古学ジャーナル No.409，ニューサイエンス社，p.15-19.

南木睦彦（1991）栽培植物，古墳時代の研究第4巻生産と流通1，雄山閣出版株式会社，p.165-174.

第31表 国光原遺跡における炭化種実同定結果

分類群		部位	SA3				SA7			SL1		
学名	和名		1	2	3	4	C1	C2	C3	1	2	3
Arbor	樹木											
<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky.	ツブラジイ	子葉						1				
<i>Quercus</i>	コナラ属	子葉片					2					
<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核片							6			
Herb	草本											
<i>Oryza sativa</i> L.	イネ	果実	1									
		果実片								2	1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実		4								1
<i>Hypoxis aurea</i> Lour.	コキンバイザサ	種子		3	2							
Rubiaceae	アカネ科	種子				3						
Total	合計		1	7	2	3	2	1	6	2	1	1
Unknown	不明炭化物片			2					(+)			

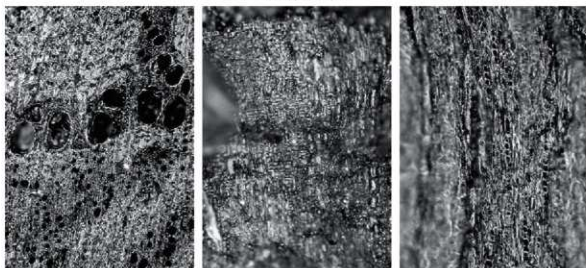
※SA 3出土の炭化種実は、1・2が「炉の東」、3・4が「炉の北」にあたる場所出土している。

※SA 7出土の炭化種実C1・C2・C3の出土位置については、88頁の「第61図 SA6・SA7実測図」を参照。

※SL 1出土の炭化種実は、123頁の「第84図 周溝状遺構からの土の採取場所」で、1・2が「中3」、3が「中2」の位置で出土している。

第 85 図 国光原遺跡の樹種同定分析

SI-19 コナラ属コナラ部?

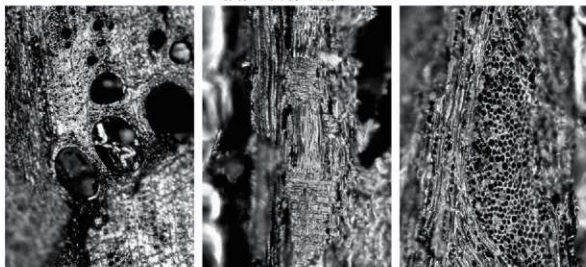


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.4mm

接線断面 : 0.2mm

SI-40 コナラ属コナラ部

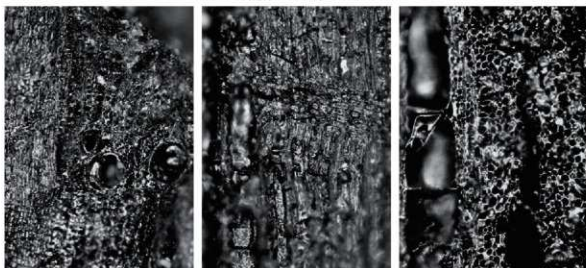


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

SP6 炭化材 コナラ属コナラ部

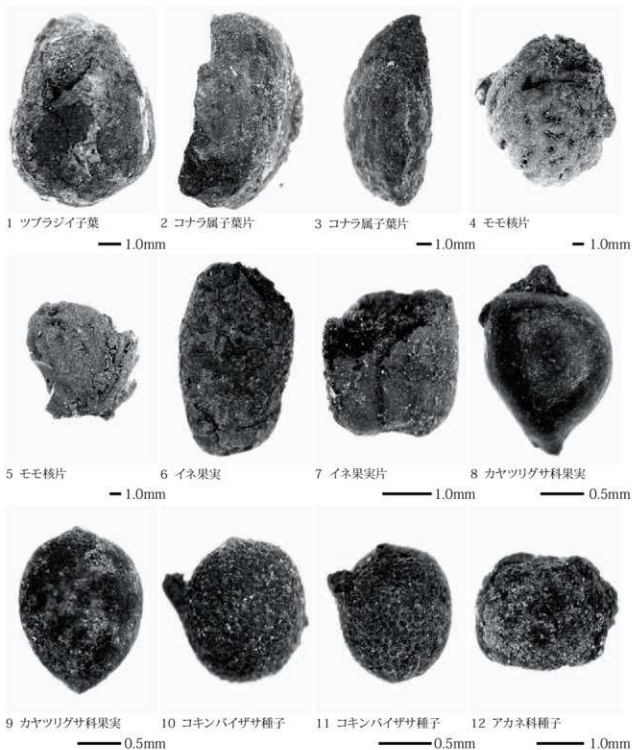


横断面 : 0.4mm

放射断面 : 0.2mm

接線断面 : 0.2mm

第 86 図 国光原遺跡の炭化種実



第V章 まとめ

(1) 後期旧石器時代

始良 Tn 下位のXⅠ層とX層で、数十点にのぼる旧石器が出土したが、特にXⅠ層の最下部で出土した台形石器(1)は、始良 Tn 火山灰層の下位で出土した県内でも数少ない例として非常に注目される。

また始良 Tn 上位のⅧ層上面では、本遺跡で唯一の礫群が検出され、それに伴う遺物として、角錐状石器と剥片による接合資料も出土した。該当時期に、この遺跡上で、石器製作が行われたことを示している。

宮崎県旧石器文化談話会刊行の「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」により、本遺跡出土の後期旧石器を時期比定すると、以下のようになる。

【第1段階の遺物】

XⅠ層(MB3)最下部の礫層に近い位置から出土した遺物(1～4)は、層位的に考えると、第1段階に相当する。

【第3段階の遺物】

X層(MB2)上部の遺物(5～9)は、始良 Tn 火山灰層直下で出土した。層位的な面から考えると、第3段階に相当すると考えられる。

【第4段階の遺物】

Ⅵ層から出土した10・11のナイフ形石器は、素材剥片の打点先端側にあるという特徴から、第4段階に相当するものとした。

【第5～第6段階の遺物】

12～17のⅥ～Ⅷ層で出土した角錐状石器を中心とした旧石器が、これに該当する。剥片も、16・17のような大型のものである。

【第6～第7段階の遺物】

37～39のⅤ～Ⅵ層で出土した台形石器が、これに該当する。

【第7段階の遺物】

18～23のⅤ～Ⅵ層出土のナイフ形石器は、第4段階のナイフ形石器と違い、基部の方に素材剥片の打点側がある。その他の旧石器、24～36も、この段階に相当すると思われる。

【第8段階以降の遺物】

Ⅴ～Ⅵ層から出土した40～46の細石刃、47の細石刃核がこの段階に該当する。

上記に記した遺物以外には、Ⅴ層出土の48の剥片と、49の石核がある。この2点の旧石器に関しては、「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」に該当する段階がなかった。

なお、始良 Tn 火山灰層下位のXⅠ層とX層では、遺物出土地点が、B区西北端部に限られているが、始良 Tn 火山灰降下後のⅤ～Ⅷ層では、A区中央部から、B区南端にかけて比較的広い面積にまたがっている。

本遺跡調査区内における二次始良 Tn 火山灰の偏った堆積状況等を考慮し、始良 Tn 火山灰降下後の本遺跡の微妙な地形変化が、当遺跡や周囲の居住環境に与えた影響についても、慎重に考察する必要があると思われる。

(2) 縄文時代草創期～早期

K-Ahより下の、Ⅴ～Ⅷ層にかけて、集石遺構が63基、灰穴が41基、土坑が18基検出された。これら合計で122基の遺構は、遺構の形態、遺構の検出面、遺構からの出土遺物、遺構内から出土した炭化材のC14年代測定という四つの要素から総合的に判断して、縄文時代草創期～早期にかけての遺構であると推定できた。

特に遺構底面で、実際に燃料として使用されたと特定できる炭化材をC14年代測定にかけて得られた測定値は、古いもので1万年～1万1千年以上前の年代を示しており、1万年以上前の縄文時代草創期に、実際に本遺跡で人間の生活の営みがあったことを示すものである。

しかし、これら122基の遺構を、草創期と早期に分けるには、遺構内部から出土した縄文土器について検討する必要があるが、以下に示す二つの問題があり、実質的には諦めざるを得なかった。

①地形が斜面地である本遺跡では、縄文時代草創期～早期に該当する時期の包含層(Ⅴ層)で、縄文

時代草創期土器と縄文時代早期土器が混在して数多く出土していることから、斜面地という地形上、当遺跡への遺物の流れ込みがあった可能性もあり、それらの遺物が遺構埋土中にも混じっている可能性が高い。

②遺構内から出土した縄文土器の数が少なすぎ。特に、明らかに遺構底面に張り付いた状態で出土したものが、ほとんど無かった。

ただし、これだけの遺構数を伴う、縄文時代草創期～早期にかけての遺跡は、東九州自動車道関連の遺跡中에서도数少ないと思われる、その点は注目される。

また、遺物の面からは、縄文時代草創期の土器がある程度まで出土したことは特筆すべきである。特に、全器形の1/3が、包含層のほぼ一箇所からまとまって出土した瓜形文土器(65)は、明らかに県内出土の縄文時代草創期土器の中では最大の法量をもつ。

65の土器以外にも、遺構埋土中や包含層中から、縄文時代草創期の土器が出土しており、今後の宮崎県内の縄文時代草創期土器の研究に、多大な貢献をするものと期待される。

一方、縄文時代早期の土器では、塞ノ神式土器(80・81)や下刺峯式土器(82・83)が出土した。県内において、これらの土器群が出土した他の縄文時代早期遺跡との比較検討が必要である。

(3) 弥生時代終末期

K-Ah 上面で、竪穴住居跡7軒、周溝状遺構1基、土坑11基が検出された。

これらの遺構から出土した弥生土器を、松永幸寿「日向における古式土師器の成立と展開 ―宮崎平野部を中心として―」による宮崎平野北部の土器編年案にあてはめてみると、以下の①～③のことが言える。

①中型裏底部の器形を見ると、SA3出土の241は、松永編年の第4段階に相似するが、同じくSA3出土の242・245・246やSA4出土の283は、松永編年の第6段階に相似する。SC5出土の裏(298)の底部は松永編年の第5段階、SC14出土の裏(303)の底部は、第3段階、SL1出土の裏(308)の底部は、第4段階に相似する。

②SA3出土の深鉢(272)の外形は、松永編年の第4段階に相似する。SA3出土の浅鉢(270・271・273)の全体的な器形は、第4段階に併行する時期にあたる百町原遺跡(日向市)出土の鉢に相似する。

③SL1出土の高環(314)は、弥生時代後期前葉のものと比較して、高環部の高さが浅いという特徴を有する。また、受部に短く反する口縁部がつき、その境に明瞭な稜線をもつという特徴から、松永編年の第3段階に併行する時期のものと考えられる。

よって、松永編年に比較が可能な遺物が出土しているSA3・SA4・SC5・SC14・SL1の各遺構に関して、その出土遺物を時代順(段階ごと)にまとめてみると次のようになる。

【第3段階の遺物】

SC14 出土の裏と SL1 出土の高環

【第4段階の遺物】

SA3 出土の裏・深鉢・浅鉢と SL1 出土の裏

【第5段階の遺物】

SC5 出土の裏

【第6段階の遺物】

SA3 出土の裏と SA4 出土の裏

上記のことから、本遺跡の弥生時代の遺構の造成過程を考えると、周溝状遺構がつくられた後に、しばらくしてから竪穴住居跡群がつくられたものと判断できる。土器編年によるこの判断は、竪穴住居跡(SA3・SA7)と周溝状遺構(SL1)から出土した炭化種実のC14年代測定結果からも裏付けが得られた(第IV章第2節を参照)。

11基の土坑に関しては、SA7の竪穴住居跡との切り合い状況から、SA7に伴う遺構かどうかを推定できるものが、SC5を含めて5基ある。しかしそれ以外の6基に関しては、竪穴住居跡や周溝状遺構との切り合い関係もなく、遺物出土量もごく少ないことから、具体的な造営時期を類推する資料のないものが多い。ただ、唯一SC14に関しては、周溝状遺構と同じく、一連の竪穴住居跡群から出土したのよりも、明らかに古い時期に該当する裏が出土していることから、竪穴住居跡群よりも古い時期を想定することが可能である。

同じ川南町内の赤坂遺跡や、隣接する湯牟田遺跡の竅穴住居跡では、住居廃絶後、柱や屋根材の焼失行為が行われた可能性が高い焼失住居跡が数多く見られるが、本遺跡の竅穴住居跡では、埋土中に、炉の部分以外では炭化材が確認できなかった。

また、本遺跡の竅穴住居跡からの土器の出土形態に関しては、二種類があった。SA1・SA4・SA5・SA6・SA7のように、大部分の土器片が住居床面に張り付いて出土する場合、それに対して、SA3のように、住居床面から浮いた状態で、かなり多量の土器片が、一括廃棄された状態で出土する場合である。

上記に挙げたような発掘調査成果については、川南町内における、近在または隣接する弥生時代遺跡の発掘調査成果と照らし合わせながら、今後、慎重に比較検討していくことが必要であると思われる。

(4) 中世

溝状遺構が K-Ah 上面で合計 12 条検出され、そのうちの 1 条 (SE2) からは、東播系播鉢 1 点が、また他の 1 条 (SE6) からは、土師器の皿 3 点と鍋 1 点が出土した。

検出面上層での、これら 12 条の溝状遺構の状態が不明であることから、使用法が、水路であったか、道路であったかというような特定は困難である。ただし硬化面を有する 4 条の溝状遺構については、道路として使用された可能性が高い。

また、第 III 章の第 4 節でも述べたように、SE6 から出土した土師器の鍋が、底を抜いた状態で出土し、周囲に割れた鍋の底の部分が全く散在していなかった点は注目すべきである (巻末の図版 8 を参照)。鍋に関しては、初めから底を抜いた状態で廃棄されたことが推測される。

また、この鍋は、割れた鍋の底を上面にして出土しており、周囲で、ほぼ完形状態に復元できた土師器の皿 3 枚と一緒に出土した。これらの 4 点の遺物が、2 条の溝状遺構 (SE6・SE4) の切りあう地点付近で出土したことも、何らかの意図を考えさせられる。

祭祀的な意味合いがあるのか、あるいは、毀損したり、不要になったものを廃棄したものかなど、多面的な考慮が必要である。

(5) その他

その他の遺構として、IV 層上面で粘質土を有する土坑 3 基、VII 層上面で陥し穴状遺構 1 基を検出している。

粘質土を有する土坑に関しては、本遺跡と隣接する湯牟田遺跡や赤坂遺跡でも類似の遺構が検出されており、それらの遺跡の発掘成果との比較検討が必要である。

また陥し穴状遺構に関しても、東九州自動車道(都農～西都間)内の発掘調査においては、特に新富・高鍋町内で多数の陥し穴状遺構が検出されている。川南町内の調査事例はまだ少ないと思われるが、他の事例を取集蓄積し、遺跡の立地環境面も考慮しながら、慎重な検討が必要であると考えられる。

なお第 II 章第 2 節 (5 頁) でも述べた通り、本遺跡の A 区では、国光原共同墓地の隣接地移転に伴う埋め戻された墓壇跡 (攪乱) が多く散在していたが、IV 層 (K-Ah) 上面での遺構精査の際には、近代の伸展葬による土葬墓跡 (攪乱) をいくつか確認している。

【参考文献】

宮崎県旧石器文化談話会 2005 「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66

南九州縄文研究会 2002 『南九州縄文集成 1 南九州貝殻文系土器 1』

松永幸寿 2004 「日向における古式土師器の成立と展開 ―宮崎平野部を中心として―」『西南四国―九州間交流に関する考古学的研究』平成 14 年度～15 年度科学研究費補助金 (基礎研究 (c)) (11)

圖版

図版 1



散磔の検出状況（B区西側）



炉穴群 3・4・5 と SP14 完掘状況



散礫の検出状況 (B区東側)



炉穴群 6 完掘状況



礫群 PSI 1



SI32 (左)・SI33 (中)・SI34 (右) 検出



SI 3 検出



SI33 断面



SI 3 配石



SI33 配石



SI 5 検出



SI32 断面



SI40 検出



SI46 (左)・SI45 (右) 検出



SI40 断面



SI46 断面



SI40 配石



SI46 配石



SI14 検出



SI14 完掘

図版 5



SI 47 検出



SI10 検出



SI47 断面



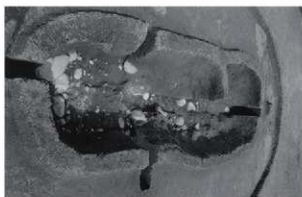
SI59 配石



SI47 配石



SP 1 完掘 (西から)



SP 5(左)・SP 6(右) 完掘 (西北から)



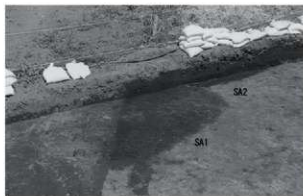
SP12(左)・SP13(右) 完掘 (西北から)



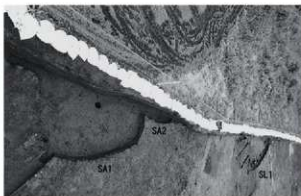
B区V層 縄文時代草創期土器集中部 (SC100)



B区V層 縄文時代草創期土器 (66) 出土状況



SA 1・SA 2 検出 (西から)



SA 1・SA 2 完掘 (北から)



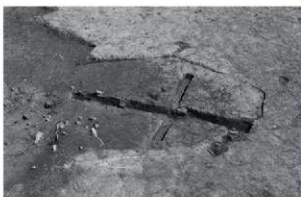
SA 3 検出 (東から)



SA 3 遺物出土状況 (西から)



SA 3 完掘 (西南から)



SA 4 完掘

図版 7



SA6・SA7 検出 (東から)



SA 5 完掘 (南東から)



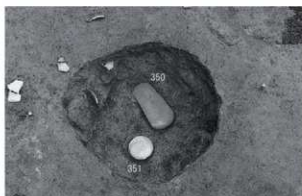
SA 6・SA7 完掘 (南東から)



SL 1 遺物出土状況 (西から)



SL 1 完掘 (西から)



SC10 遺物出土



B区 中世溝状遺構検出



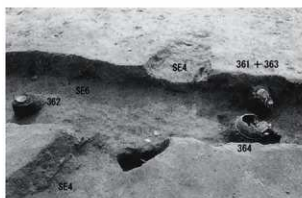
SE 2 断面 (A区、南から)



SE 3 断面 (西から)



SE 6 断面 [SE 2 との切り合い地点] (西から)



SE 6 遺物出土 (北から)



SE 6 出土の土師器の鍋・皿 (南から)



SE 6 出土の糸切底の土師器の皿 (362)



SE11 断面



SC 1 (粘質土を有する土坑) の検出



SC 2 (粘質土を有する土坑) の検出



SC 3 (粘質土を有する土坑) 検出



SC121 断面



SC121 完掘1



SC121 完掘2



B区ベルトの土層断面



B区ベルトと礫層



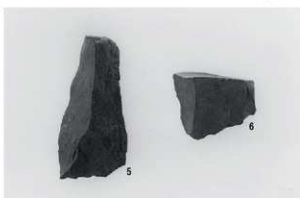
B区礫層の検出1



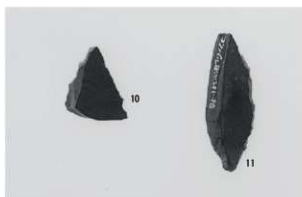
B区礫層の検出2



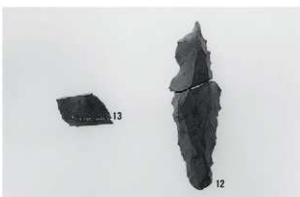
旧石器 (第 1 段階)



旧石器 (第 3 段階)



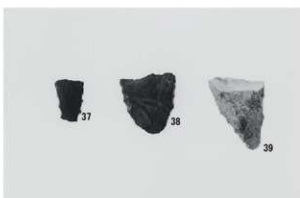
旧石器 (第 4 段階)



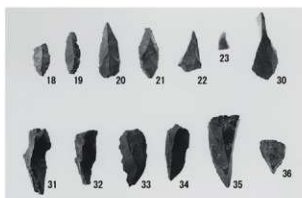
旧石器 (第 4 段階、接合資料)



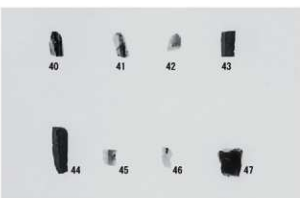
旧石器 (第 5 ~ 6 段階)



旧石器 (第 6 ~ 7 段階)



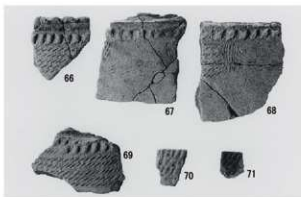
旧石器 (第 7 段階)



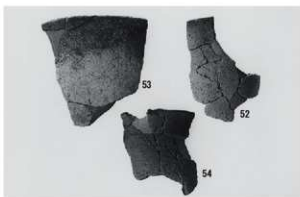
旧石器 (第 8 段階以降、細石刃・細石刃核)



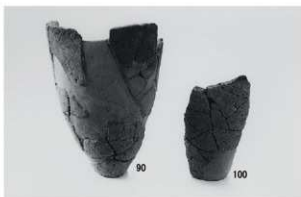
縄文時代草創期土器 遺構内出土



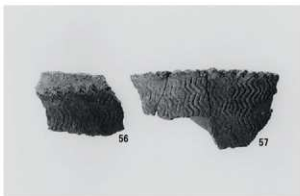
縄文時代草創期土器 V層出土



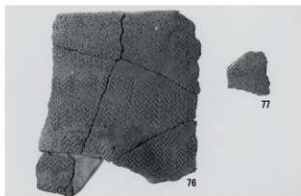
縄文時代早期土器(条痕文) 遺構内出土



縄文時代早期土器(条痕文) V層出土



縄文時代早期土器(山形押型文) 遺構内出土



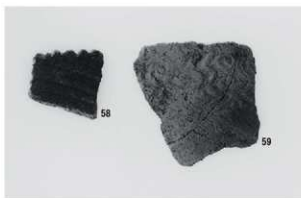
縄文時代早期土器(山形押型文) V層出土



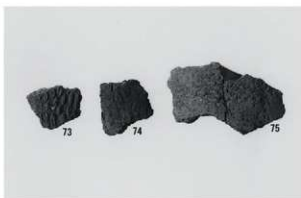
縄文時代早期土器(縄文施文) 遺構内出土



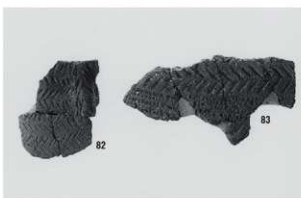
縄文時代早期土器(縄文施文) V層出土



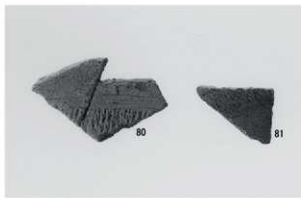
縄文時代早期土器 遺構内出土



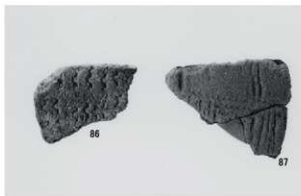
縄文時代早期土器 (精円押型文) V層出土



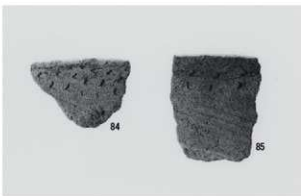
縄文時代早期土器 (下剥峯式) V層出土



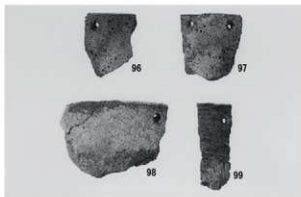
縄文時代早期土器 (塞ノ神式) V層出土



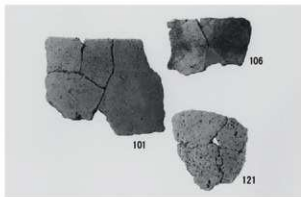
縄文時代早期土器 (貝殻腹縁刺突文) V層出土



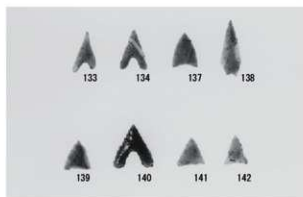
縄文時代早期土器 (刺突文) V層出土



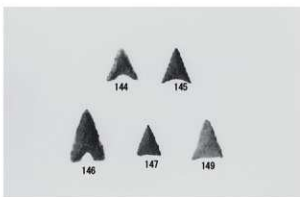
縄文時代早期土器 (貝殻条痕文) V層出土



縄文時代早期土器 (無文) V層出土



縄文時代（石鏃 1） V層出土



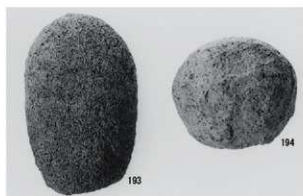
縄文時代（石鏃 2） V層出土



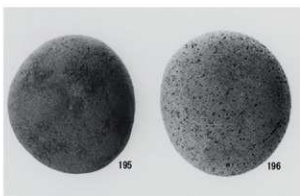
縄文時代（石斧） V層出土



縄文時代（石器） V層出土



縄文時代（敲石） V層出土



縄文時代（磨石） V層出土



縄文時代（砧石） V層出土



縄文時代（台石） V層出土



SA 3 出土 甕 242 (弥生時代)



SA 3 出土 甕 243 (弥生時代)



SA 3 出土 甕 245 (弥生時代)



SA 3 出土 甕 247 (弥生時代)



SA 3 出土 甕 248 (弥生時代)



SA 3 出土 甕 249 (弥生時代)



SA 3 出土 壺 259 (弥生時代)



SA 3 出土 壺 260 (弥生時代)

図版 15



SA 3 出土 壺 263 (弥生時代)



SA 3 出土 壺 266 (弥生時代)



SA 3 出土 鉢 270 (弥生時代)



SA 3 出土 鉢 271 (弥生時代)



SA 3 出土 鉢 273 (弥生時代)



SA 3 出土 鉢 274 (弥生時代)



SA 3 出土 脚台付鉢 278 (弥生時代)



SA 3 出土 脚台付鉢 279 (弥生時代)



SA 3 出土 高環 281 (弥生時代)



SA 3 出土 杓子状土製品 282 (弥生時代)



SA 4 出土 甕 283 (弥生時代)



SA 7 出土 高環 294 (弥生時代)



SC 5 出土 甕 298 (弥生時代)



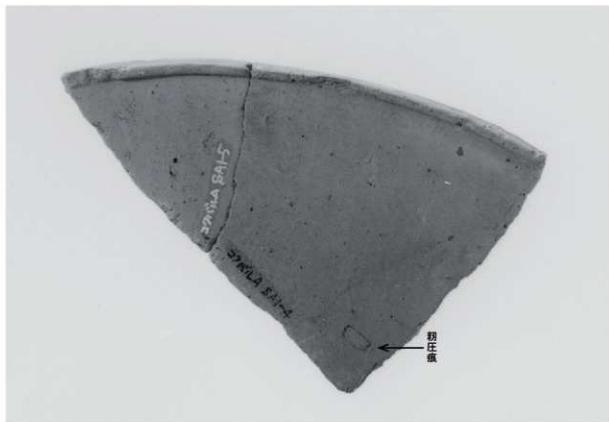
SA 7 出土 高環 295 (弥生時代)



SC14 出土 甕 303 (弥生時代)



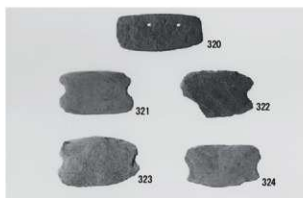
SL 1 出土 高環 315 (弥生時代)



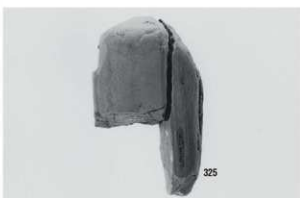
SA 1 出土の初圧痕を有する器台裾部 (239)



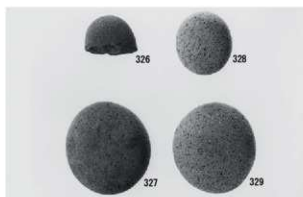
SA 3 出土の大型の壺 (258)



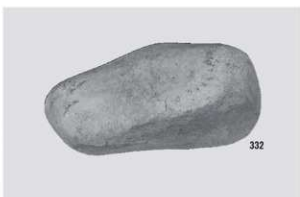
SA 3 出土 石砲丁 (弥生時代)



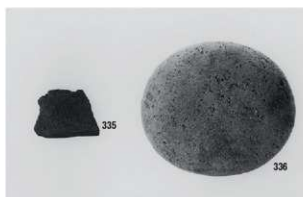
SA 3 出土 砥石 (弥生時代)



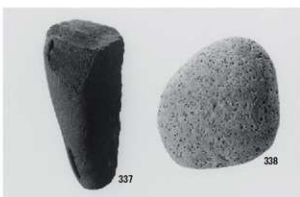
SA 3 出土 磨石 (弥生時代)



SA 3 出土 台石 (弥生時代)



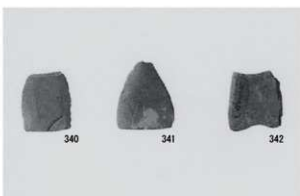
SA 5 出土 石砲丁 (左) 磨石 (右) (弥生時代)



SA 6 出土 砥石 (左) 磨石 (右) (弥生時代)



SA 7 出土 打裂石鏃 (弥生時代)



SA 7 出土 磨製石鏃 (弥生時代)